

ロ、極體ノ開キハ普通極褥留金ノ附近ニテ極褥ノ裏面ト馬體間ニ掌ヲ入レ得ルヲ度トス

ハ、極體ヲ閉閉スルニハ必ず先ヅ脚鉞壓螺ヲ弛メタル後規正螺ヲ回轉シ其開キ決定セルトキハ駈柱ヲ上方ヨリ規正螺ノ圓孔ニ通ジ其ノ下端ヲシテ穹鐵樞軸ノ凹部ニ陥入セシメ次ニ脚鉞壓螺ヲ緊定スルモノトス

又駈載ヲ行ヒタルトキハ更ニ極體ノ開キヲ點檢規正ス

ニ、規正螺ヲ回轉スル時前(後)方穹臂間隔ヲ過度ノ差ヲ生セシメザルコト若シ過度ニ回轉スルトキハ居木定著鉞ハ折損シ穹鐵ト居木トノ定著ニ遊隙ヲ生ジ動搖スルニ至ルモノトス

此ノ間隔ノ差ハ前(後)方穹臂ノ下端ニ於テ百二十耗ハ通常ニシテ最小八十耗、最大百六十耗以上ノ限度以上ニ達スレバ規正螺ハ回轉セザルニ至ルモノナレバ限度以上ニ閉閉スベカラズ

ホ、極褥ヲ馬背ニ適合セシムルニハ粗殼ヲ増減シ或ハ轉移セシムベシ、而シテ粗殼ノ量ハ極褥ヲシテ過硬ナラシメズ彈性ヲ帶ブルヲ適度トス

ヘ、腹帶、鞴環ノ位置ハ左側ニ於テ成ルベク極褥ニ接近スル如ク兩腹帶ノ長サヲ規定スルヲ要ス

ト、鞍ヲ地上ニ置クトキハ成ルベク横倒ヲ避クベシ、殊ニ數鞍ヲ重

ネタル際ニ於テ然リトス、蓋シ構造上破損スレバナリ

チ、樞軸部、摩擦部並ニ螺絲部ハ常ニ若干ノ油氣ヲ帶バシメ殊ニ塵埃ノ堆積セシメザルコトニ注意スベシ

リ、架匡殊ニ大架用架匡ヲ附スル駈鞍ニハ脚鉞部ニ坐鉞ヲ入ルルコトヲ忘レザルコト又彈藥箱ニ在リテハ扱鐵樞軸部ニ副鉞ヲ裝スルコトヲ忘レザルヲ要ス



第八節 彈藥

一、野山砲兵ノ用フル彈藥ノ次ノ如シ

彈丸ノ種類	構造ノ概要	用	途
(一) 榴霰彈 現用	一、内部ニ炸藥及二百七十筒ノ彈子ヲ填實ス 二、外部ニハ白色ニ塗料ス 帶狀ニ塗料ス	一、主トシテ人馬ヲ殺傷シ(曳火信管) 二、堅固ナラザル構築物等ヲ破壊ス(著發信管)	
(二) 榴彈 現用	一、内部ニ黄色(茶褐)藥ヲ炸藥トシテ填實ス 二、外部ニハ黄色ニ塗料ス 帶狀ニ塗料ス	一、主トシテ障礙物等ヲ破壊シ(著發信管) 二、掩護物ノ後方ニ在ル人馬ヲ殺傷ス(曳火信管)	

(三十一年式) 榴彈 新式	(四十年式) 鋼製銃榴彈 新式	(五十一年式) 發煙彈 新式
一、彈體內ニ多量ノ炸藥(現用榴彈ノ約一倍半)ヲ填實ス	一、彈體ノ金質ハ銅製銃鐵ヲ用ヒ者ヨリ少量トス 二、炸藥ノ量ハ前	彈體内部ノ主劑ハ黃燐ニシテ之レニ複働信管ヲ裝ス
一、用途ハ右ニ同ジキモ暴發力著大特ニ暴音甚大ナルヲ以テ志氣上ノ效力亦甚大ナリ 二、鐵條網ノ破壊ニ適ス(瞬發信管) 三、人馬ノ殺傷(短延期信管ヲ用フレバ)第二彈道ノ效力著大ナリ	一、用途ハ現用榴彈ト同ジク其威力モ前者ヨリ劣ルモ現用榴彈ト略同ノ效力アリ 二、戰時多量ノ彈丸ヲ要スルニ方リ其補給容易ナルノ利アリ	一、敵ノ視目ヲ遮蔽シテ友軍ノ前進ヲ容易ナラシム 二、敵ノ觀測所司令所等ヲ蔽ヒ其視察ヲ不能ナラシム



<p>(六) 新式 六十二年式照明彈</p>	<p>彈丸ノ光劑藥ハ「マゲネシウム」ヲ用ヒ吊傘ニ依リ空中ニ於テ吊下燃焼ス</p>	<p>一、夜間我が第一線ノ前方ヲ照シテ友軍ノ行動ヲ容易ナラシメ或ハ敵ノ連動ヲ窺知シ 二、之ヲ照シテ戦闘ヲ有利ニ指導ス</p>
<p>(七) 新式 七十二年式燒夷彈</p>	<p>彈丸ノ主劑ハ「アルミニウム」ニシテ之ニ複働信管ヲ附ス</p>	<p>停車場工場等ヲ燒夷ス</p>
<p>(八) 新式 八十三年式尖銳彈</p>	<p>構造ハ概ネ十一年式鋼性銑榴彈ト同一ナリ</p>	<p>一、射程ヲ一萬米ニ連セシムル爲メ 二、其效力ハ十一年式鋼性銑榴彈ト同一ナリ</p>
<p>(九) 現用 代用彈</p>	<p>彈體ハ銑鐵ニシテ内部ニハ彈子ヲ填實シアラズ</p>	<p>演習用トシテ現用榴霰彈ノ代用トシテ使用ス</p>

二、信管ノ種類及用途ハ次ノ如シ

イ、現用信管ハ三年式複働信管ニテ曳火、著發ノ二裝置アリ

1、著發信管ハ破壊 2、曳火信管ハ殺傷ノ目的ニ使用ス、而シテ曳火信管ハ信管廻ニテ測合シ一定ノ時間後彈道上ノ一點ニテ

破裂シ彈子若クハ破片ヲ散飛セシメ效力ヲ生ズ

ロ、新式信管トシテ瞬發信管、短延期信管ノ二種アリ

1、瞬發信管ハ著發シタル瞬時ニ於テ破裂スルヲ以テ鐵條網等ヲ破壊スルニ最モ效力アリ

2、短延期信管ヲ裝シタルモノハ彈著後跳飛シ〇秒〇五ノ後第二彈道上ニ於テ破裂シ彈著點ノ前方約二十米、高サ約四、五米ニ於テ炸裂スルヲ以テ人馬ニ對スル殺傷威力著大ナリ

三、藥筒内ニハ裝藥(無煙藥)ヲ收メ其底ニ爆管ヲ附ス、即彈藥ヲ裝填シ引鐵ヲ引ケバ擊莖頭ニテ爆管ヲ衝キ發火シ裝藥ニ點火シ一時ニ多量ノ瓦斯ヲ發生シ彈丸ヲ空中ニ拋射スルモノニシテ野砲ハ約二里山



- 砲ハ約一里半ノ射程ヲ有ス
- 四、彈藥ノ取扱ニ就テハ物體ニテ爆管ヲ衝カザル様又彈軸ヲ歪メザル様兩手ニテ取扱フ可シ
- 五、行軍ニ際シテ彈藥匣(箱)内ニテ彈藥ノ動搖セザルコトニ注意シ休止等ノ際檢査シ常ニ彈軸ヲ一致セシメ彈丸ノ離脱弛緩セザル様注意セヨ
- 六、山砲ノ彈藥箱ニハ常ニ吊鎖ヲ懸ケ運動中彈藥ヲ脱落セシメザルコト及降雨ニ際シ濕氣ヲ箱内ニ入ラシメザルコトニ注意セヨ

第九節 乘馬具

- 一、革具ノ日常使用後ノ手入法
  - イ、革具ハ塵埃ヲ除キ馬體ニ觸ル、部分ハ汚垢ヲ拭ヒ、要スレバ堅ク絞ツタ布片デ拭ヒ僅ニ含油セル布片デ摩擦スル

- ロ、鍔、銜等ハ磨粉又ハ藥等デ磨キ後輕ク塗油スル
- ハ、鞍褥、腹帶、鞍下毛布ハ日光デ乾シタ後塵垢ヲ除去スル
- ニ、麥袋、水囊等ハ水洗シテ日光デ乾カス
- 二、革具ノ毎月一回行フ手入法
  - イ、鞴革ハ主トシテ裏面カラ塗油シ表面及騎坐革ハ輕ク含油布片デ摩擦シ表皮ノ乾固及剝離ヲ防グ
  - ロ、鞍褥ハ日光デ乾シ(夏ハ陰乾シ)輕ク叩イテ塵垢ヲ除ク
  - ハ、頭絡、韁、鍔革、縛囊革條、縛具革條及腹帶托革ハ表裏兩面カラ塗油スル
  - ニ、鞍囊ハ其裏面ヲ拭淨シ側革ハ他ノ部分ヨリモ稍々多量ニ給油ス
  - ホ、腹帶ハ刷毛ヲ以テ泥土及汚垢ヲ除去シ、乾燥後ハ之ヲ手揉ミデ柔軟ニスル
  - ヘ、鞍下毛布ハ日光デ乾シ輕打シ塵埃ヲ除ク



武器ノ名稱及取扱手入法

ト、旅囊、馬糧囊、野繫頭絡、野繫韁、蹄鐵囊、麥袋及水囊ハ日光  
 デ乾カシ塵埃ヲ除ケル  
 チ、燈、大勒銜及小勒銜ハ布片又ハ藁デ塵垢ヲ去リ發錆セルトキハ  
 磨粉又ハ木片デ輕ク摩擦シ錆ヲ去リ油ヲ塗ル  
 リ、野繫銜ハ布片ヲ以テ塵垢ヲ去ル

三、乘馬具取扱上ノ注意

イ、馬具ハ使用前各部結合ノ良否及缺損ノ有無ヲ検査スル  
 ロ、馬具ノ附屬品ハ馬具一背毎ニ使用後之ヲ取纏メ、革條類ノ長キ  
 モノハ伸シテ吊ル  
 ハ、鞍ハ床上ニ置クニハ徐口ニ取扱ヒ前橋ヲ下ニスル  
 ニ、野外ノ宿營ニテハ馬具ハ成ルベク掩蔽下ニ置ク、特ニ鞍ハ梁材  
 若クハ藁藁ノ上ニ置キ長キ革具ハ懸垂又ハ平量スル  
 ホ、鞍下毛布ハ常ニ同一面ヲ馬背ニ接スルコトナク、又其折目ハ時

々變ヘル

ヘ、鞍囊、旅囊ニ物品ヲ填實スルトキハ成ルベク左右ノ重量ヲ等シ  
 クシ且ツ一局部ヲ膨起セシメナイコト  
 ト、燈草、腹帶及其他革條類ノ延ビタモノハ速ニ修理シ決シテ之  
 ヲ卷イテ使用シテハイケナイ

第十節 駄馬具

一、名稱 卷尾ノ附圖ヲ見ルベシ

二、手入法

イ、普通手入 乘馬具ノ普通手入ニ準ズル外左ノ如クスベキデアル  
 一、緩喉革、袴革ハ硬化シナイヤウ適度ニ脂油ヲ給スル、但シ主  
 トシテ其馬體ニ觸接シナイ面カラ給油シテ其觸接スル面ハ常ニ  
 柔軟且ツ清淨デ汚垢ヲ殘サナイヤウ、要スレバ含濕布又ハ軟石

武器ノ名稱及取扱手入法



鹼水ヲ含マセタ布片デ之ヲ拭摩スル

精密手入 前ニ準ズル外左ノ通りニスベキデアル

一、革具中ソノ使用頻繁ナタメ、又ハ汗垢等ノタメ不潔トナツタ  
緩喉革、袴革ノ如キモノハ刷毛ニ軟石鹼水ヲ含マセ拭淨シタ後  
蔭乾ニシ其他ノ革具ハ固ク絞ツタ含濕布片ヲ以テ拭摩シテ其面  
ヲ洗淨シ特ニ金屬トノ摩擦ノ爲附著セル黑色汗垢、縫綴部ノ汚  
垢ヲ丁寧ニ拭淨シ、其乾燥シ終ル前ニ脂油ヲ等齊ニ塗布シ、緩  
喉革ハ裏面ヨリ複合革ハ裏面及側面ヨリ給油シ、纖維間ニ滲入  
セシメタ後乾イタ布片デ摩擦シ、剩餘ノ脂油ヲ拭テ除ケルノデ  
アル

2、緩喉革、袴革中ノ附屬革デ鐵ニ連絡シ外方纖維ノ甚シク屈撓  
シ、且ツ十分抗力ニ堪ヘル事ヲ要スルモノハ其ノ部外ニ稍、多  
量ニ給油セネバナラヌ

3、鍍錫ノ剥脫シタ鐵部ニ發錆ノ徵アルモノハ、布片又ハ磨研紙  
ヲ以テ之ヲ除去シ、ワセリン又ハ常用礦油ヲ塗ル

### 第五章 野戰築城教範摘要

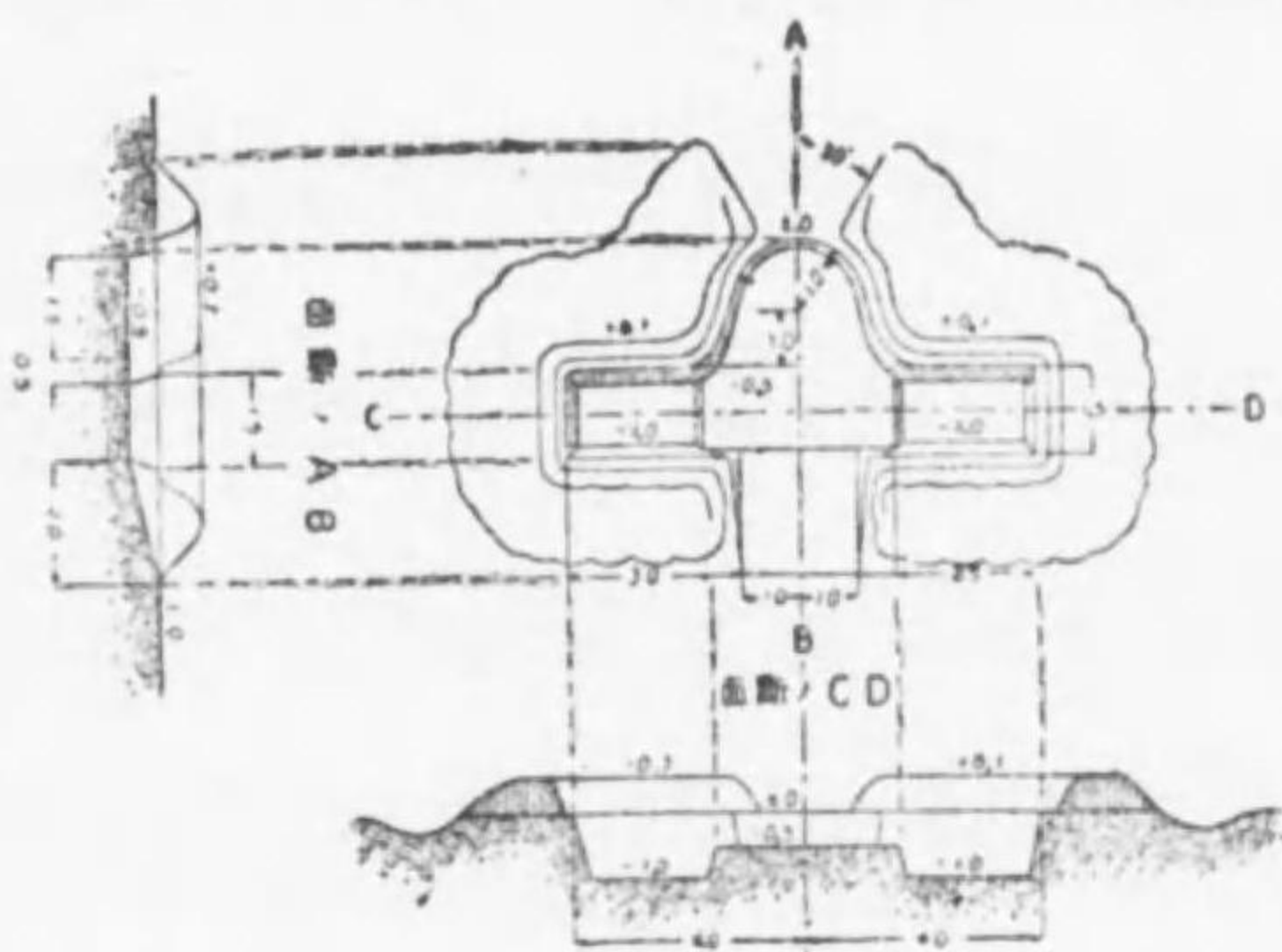
#### 第一節 總則

- 一、野戰築城トハ戰鬪ノタメ必要ノ工事ヲナスコトデ、其目的ハ軍隊  
ノ戰鬪力ヲ増シ軍隊ノ利益ヲ圖ルニアル
- 二、築城ハ之ヲ使用スル軍隊ガ自ラ其作業ヲ實施スルヲ通常トシ、特  
種ノ技術ヲ要スルモノハ工兵ガ當ル
- 三、山砲ハ駄馬ヲ以テ圓匙、十字鍬、鉈、小斧、鋸、卷尺等ノ土工器  
具及繫馬索、繫馬杭、兩頭槌等ノ繫馬具ヲ携行ス

#### 第二節 砲兵ノ掩體



- 一、砲兵ノ掩體ハ通常先ヅ射撃ニ關スル設備ヲ行ヒ、以テ人員彈藥及火砲ノ順序ニ、之ガ掩護ノ設備ヲ爲ス
- 二、砲床ハ通常地面ヲ掘下ゲテ之ヲ設ケル、併シ時間ニ餘裕ナキカ、又ハ土地ノ情況ニヨリテハ之ヲ自然地上ニ設ケル
- 三、砲床ニハ架尾ノ位置及車輪下ニ所要ノ設備ヲ爲ス
- 四、架尾ノ位置ニハ駐鋤溝ヲ穿ツ
- 五、車輪下ニハ爲シ得ル限り厚材、角材等ノ材料ヲ敷ク
- 六、砲兵ノ掩體ハ先ヅ砲彈ノ彈子及破片ニ抵抗シ得ルヲ度トシ出來得



山砲ノ掩體

- 七、レバ更ニ其強度ヲ増加スル  
砲前ニハ土砂ノ飛揚ヲ防グ設備ヲ爲ス

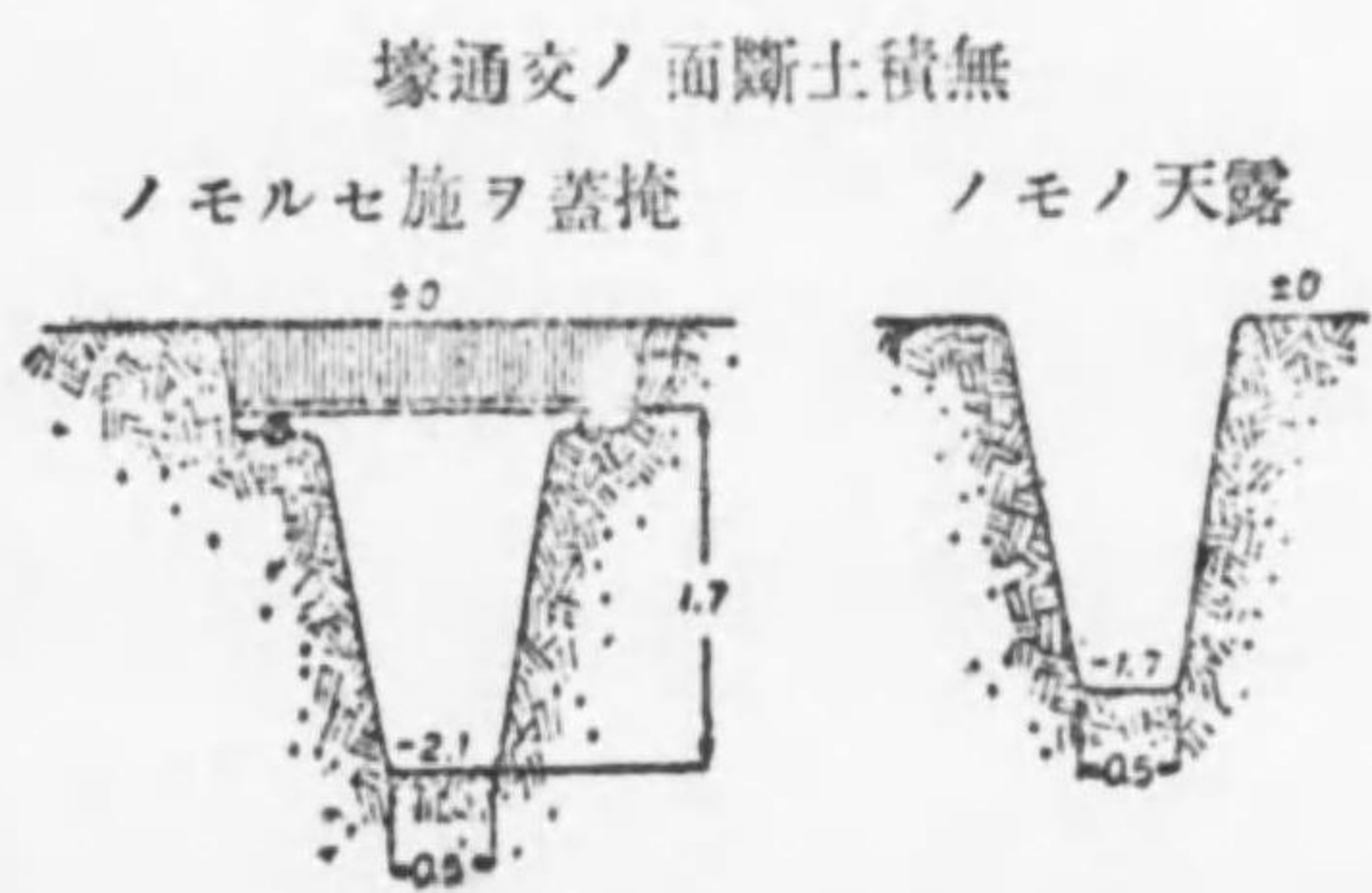
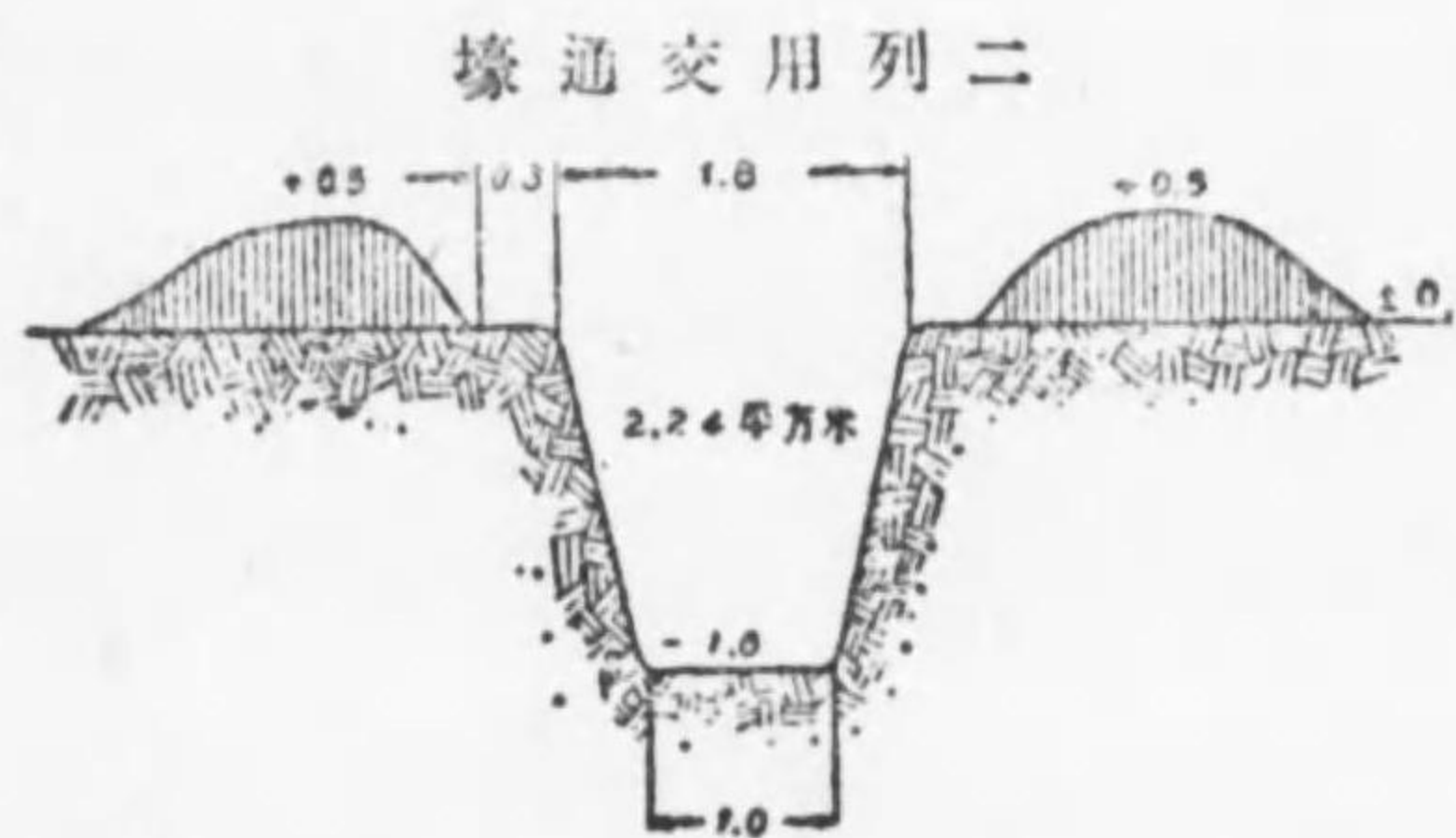
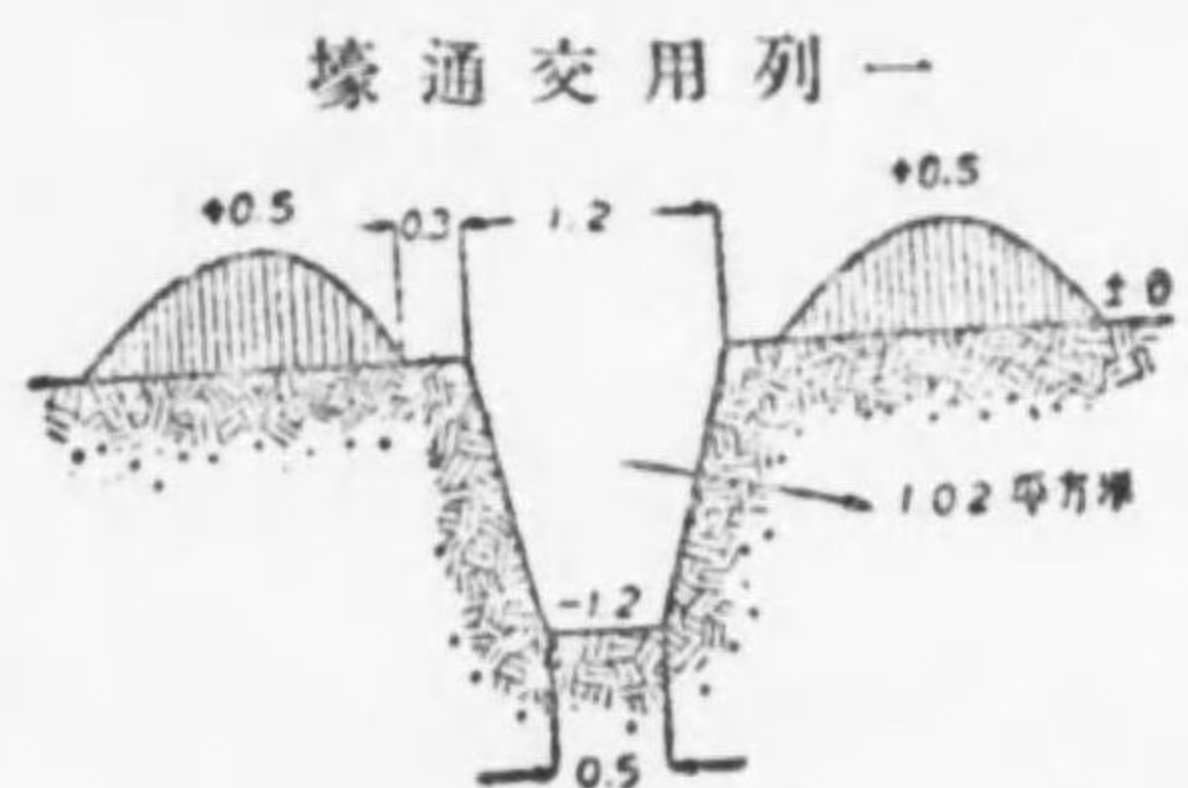
### 第三節 交通壕

- 一、交通壕ハ敵眼ニ遮蔽シ爲シ得ル限り限リ敵彈ニ掩護セラレテ交通シ得ルヤウニ設ケ、遮蔽高ハ少クトモ一米七〇トスル
- 二、交通壕ノ底幅ハ通常一列行進ノタメニハ五〇センチ、二列行進ノタメニハ一米、山砲ハ一米五〇、野砲、野戰重砲ハ二米ヲ標準トスル
- 三、交通壕ニハ電光形、蛇行形、鋸齒形、橫牆形、旋回、橫牆形ノ種類ガアル

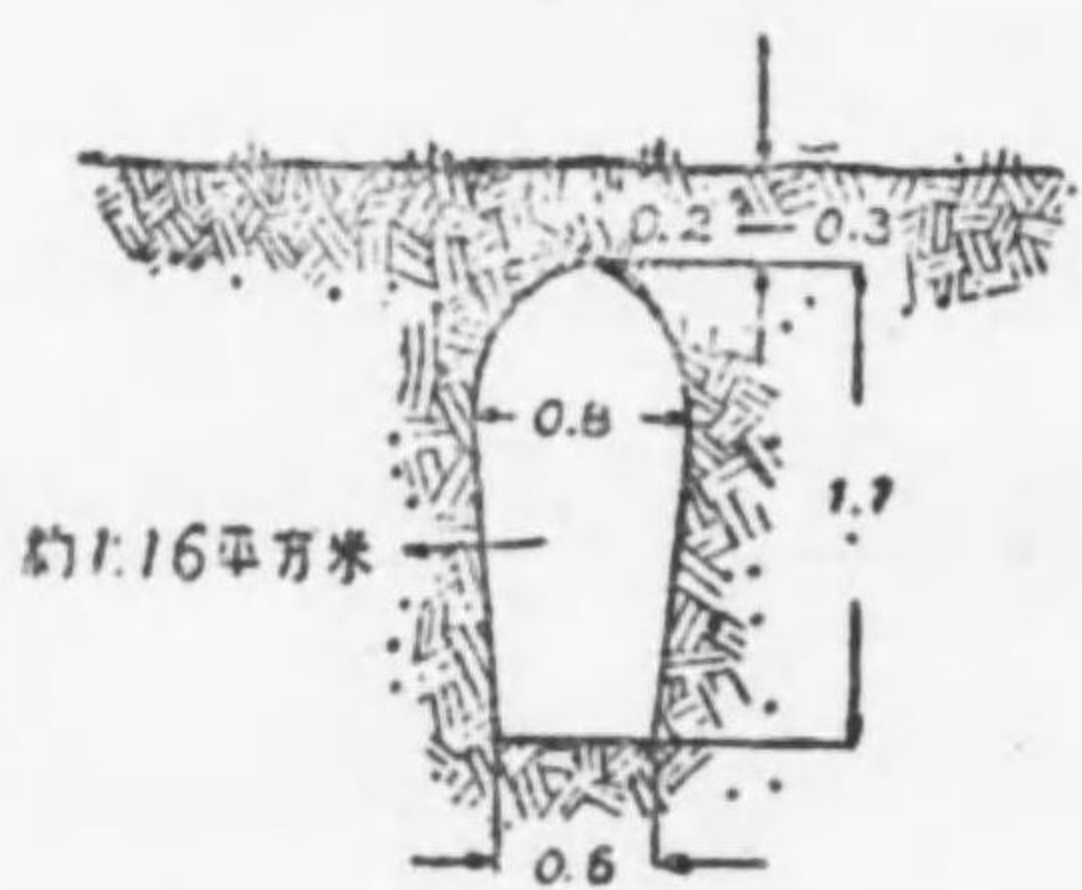
### 第四節 掩壕

- 一、掩壕ハ待機中ノ守兵ヲ掩護スル爲ニ特ニ設ケルモノデ、成ルベク





壕通交ノ面斷窪穹



地形ヲ利用シテ設備スル、時トシテ之ニ射撃設備ヲスル事ガアル

二、掩壕ハ少クモ一米七〇ノ遮蔽高ヲ與ヘ又其ノ掩護ヲ良好ナラシメル爲成ルベク幅ヲ小ニシ且之ニ秘匿ノ處置ヲ講ズル

第五節 掩蔽部

一、掩蔽部ノ目的ハ主トシテ敵砲彈ニ對シ人員兵器及彈藥ヲ掩護スルニ在ル

二、掩蔽部ハ抗力ノ大小ニヨリ輕、中、重ノ三種ニ分ケ之ヲ散兵壕、掩壕又ハ交通壕ニ設ケル

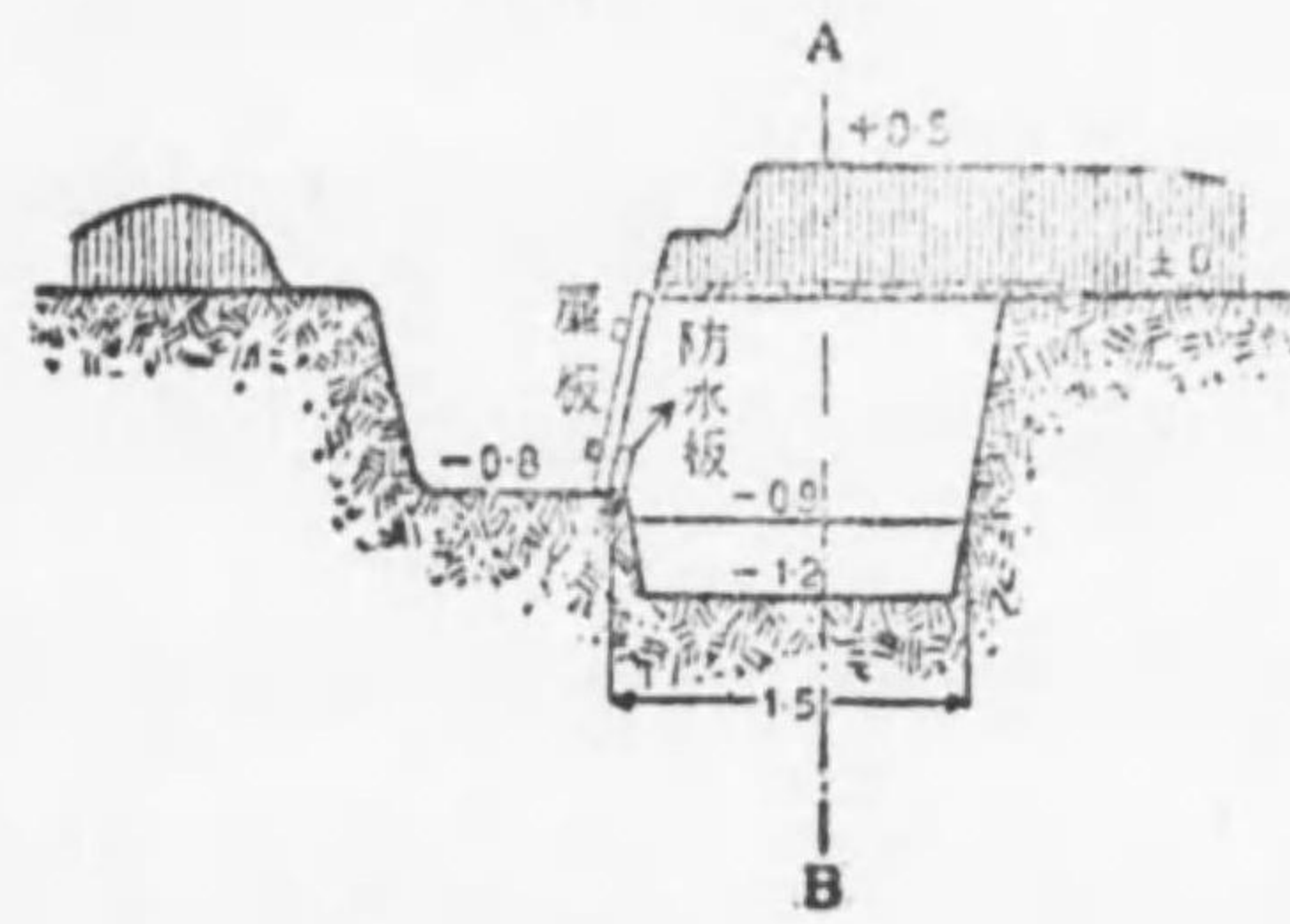
第六節 監視所、觀測所



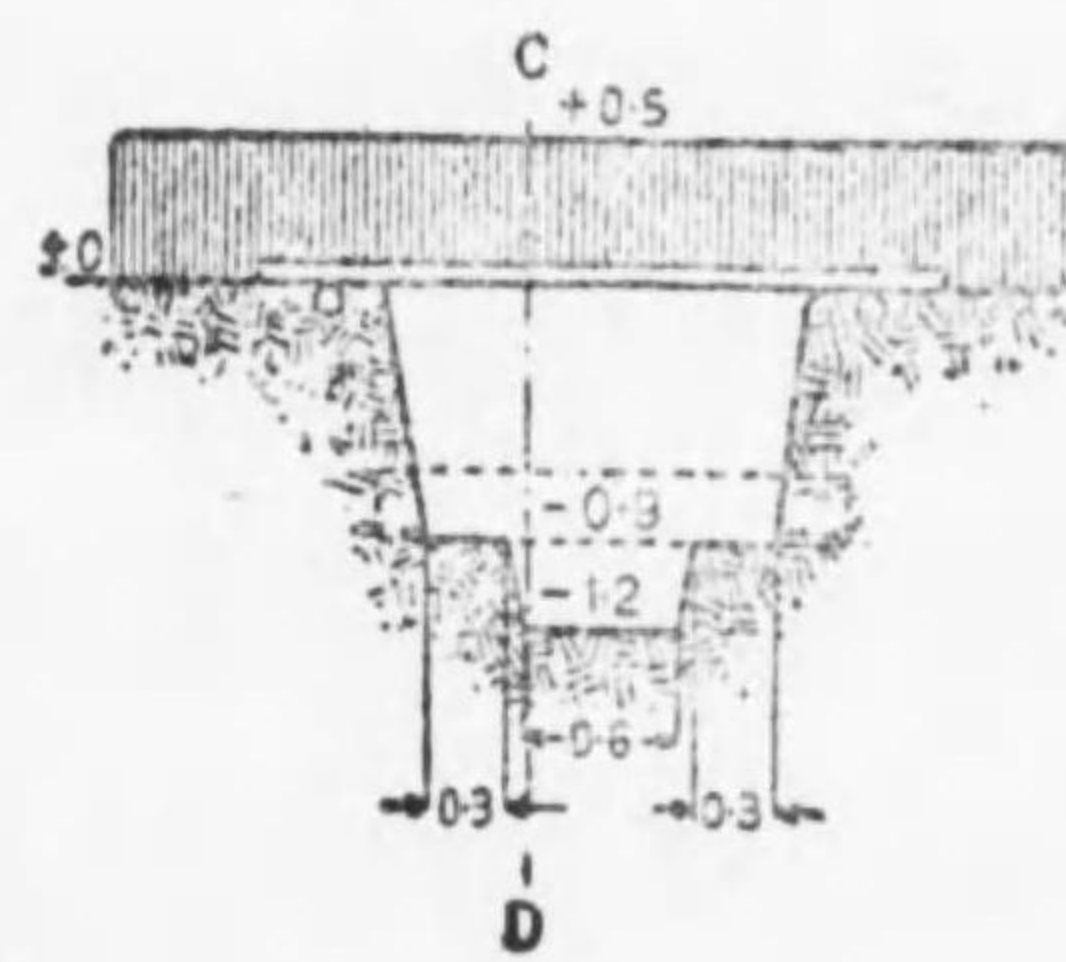
一、監視所ハ狀況又ハ敵情ヲ監視スルタメニ、觀測所ハ射擊指揮用ノタメニ設ケルモノデアアル其大キサハ一、二名ヲ收容スル哨兵用ノ

部蔽掩輕ルス抗ニ片破及子彈

面斷ノC D



面斷ノA B



モノヨリ必要ニ應ジ尙ホ一層大ナルモノニ及ブ

二、立樹又ハ家屋等ヲ利用シテ監視所、觀測所ヲ設クル場合ニハ努メテ目立タザル如クシ、砲彈ノ彈子、破片ニ對スル防護ノ處置ヲ施スモノデアアル

第七節 障礙物

一、障礙物ハ敵ノ前進ヲ阻止シ火力ト相俟ツテ敵ヲ殲滅セシメ又時トシテ敵ノ奇襲ヲ防グ爲ニ設ケル

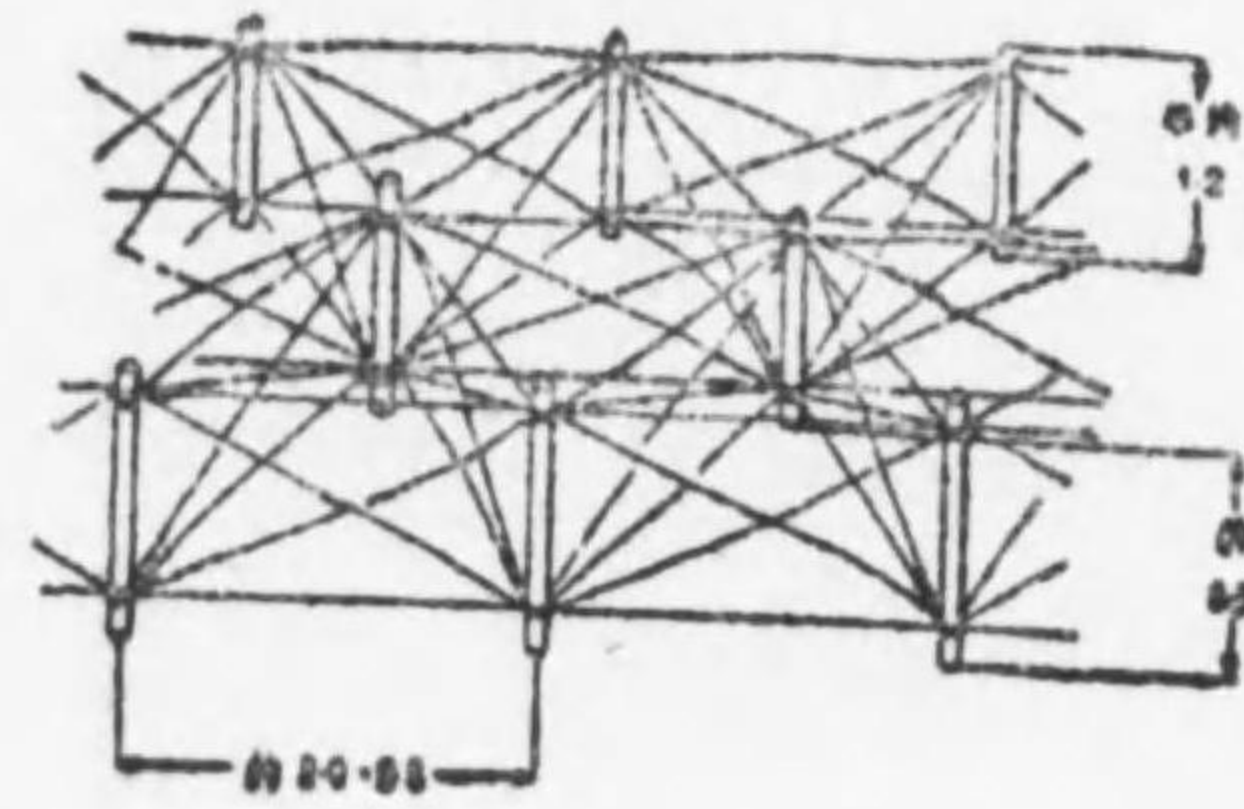
二、障礙物ニハ主トシテ鐵條網及鹿砦ヲ用ヒ其他拒馬、地雷、氾濫、



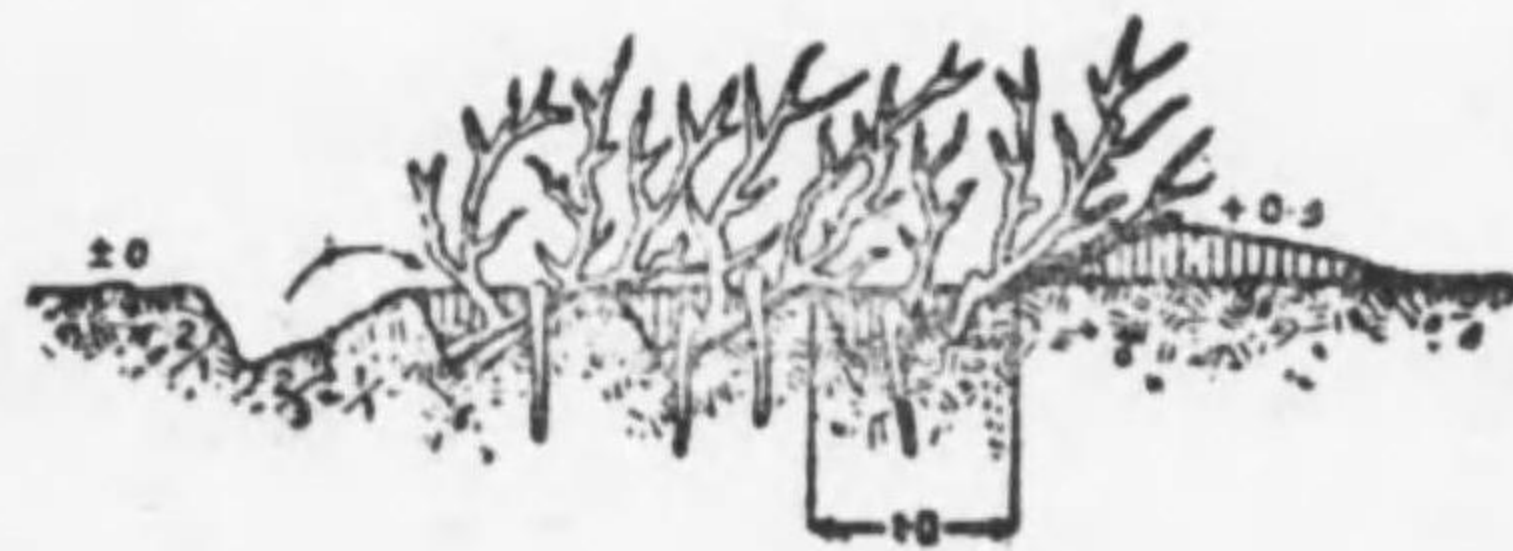
所視監タケ設ニ上樹シ用利ヲ樹立



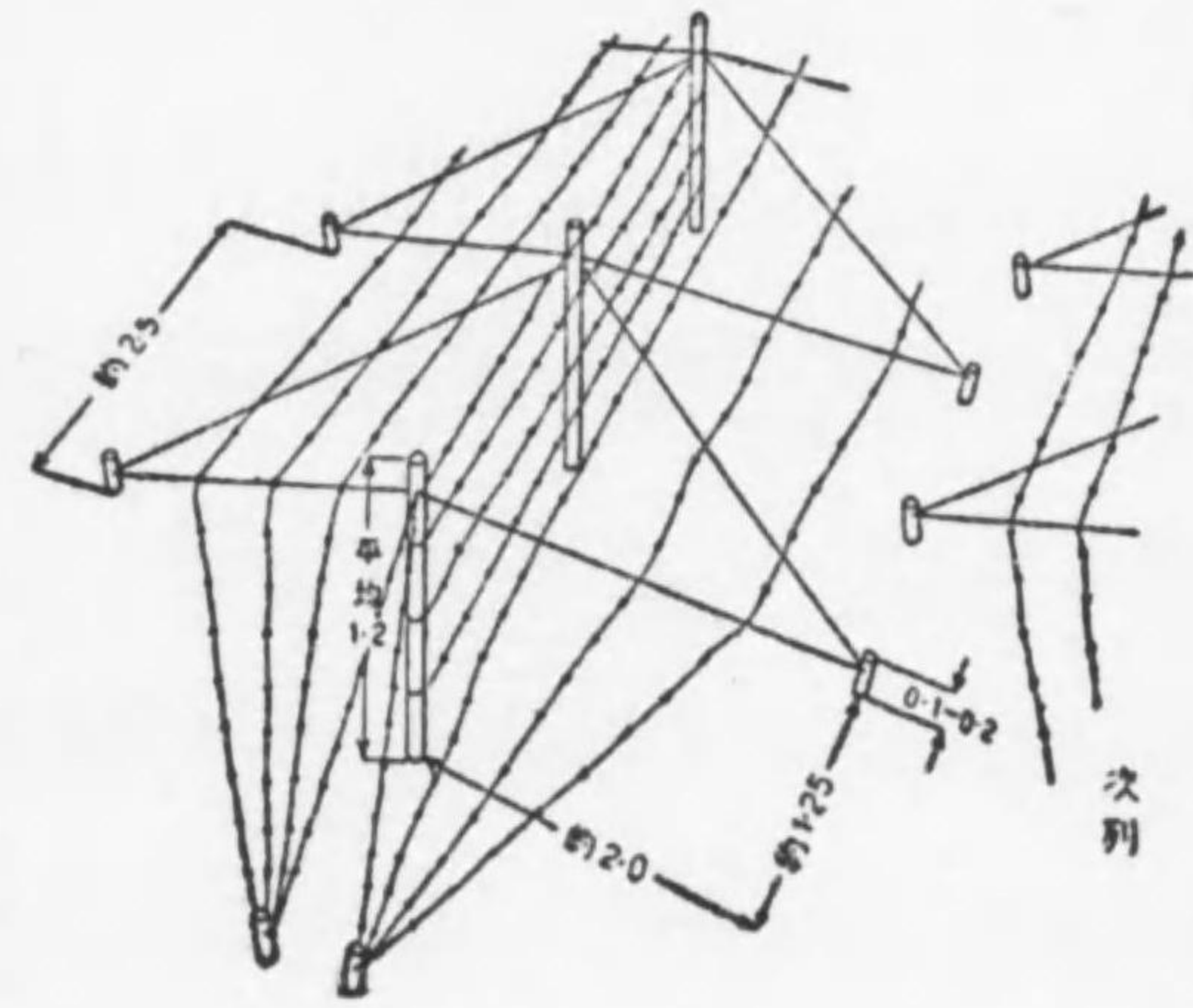
網條鐵形網



樹枝鹿砦



屋形鐵形網條



壕、陷穽等ヲ作クル  
 イ、鐵條網 屋根形及網形  
 ノ二種ガアル、尙折疊式  
 ヲ用ヒル事ガアル  
 ロ、鹿砦 樹枝鹿砦、樹幹  
 鹿砦ノ二種ガアル、樹幹  
 又ハ樹幹ヲ用ヒテ之ヲ數  
 列ニ配置シ又杭或ハ鉤杭  
 ヲ以テ地上ニ固定スル  
 樹枝鹿砦左圖ノ如シ  
 ハ、拒馬 杭ヲ十文字ニ結  
 ビ付ケ鐵線ヲ張ツタモノ  
 デ運搬設置共ニ容易デア



- ニ、地雷 爆發ニヨリ人馬ヲ殺傷シ材料ヲ破壊スルモノデ點火法ニヨリ觸發地雷、視發地雷、自發地雷ニ分カル、又爆發ニヨリ土石ヲ敵方ニ擲出シ之ニ依ツテ損害ヲ與ヘル如ク設備スルモノヲ特ニ擲石地雷ト稱ヘル
- ホ、壕ニハ水壕、乾壕ノ區別ガアル
- ヘ、氾濫ハ水流ヲ阻止シ障礙トスルモノデ、水深多キカ、或ハ土地泥濘ノ時ハ極メテ有效デアアル
- ト、陷穽ハ所謂落穴デ戰車ニ對シテ特ニ效力偉大デアアル

第八節 偽裝

- 一、偽裝ハ上空及地上カラノ敵ノ視察ニ對シ、我が設備、材料及行動ヲ秘匿シ、若シクハ之ヲ誤認セシメルモノデアアル
- 二、偽裝ニハ假裝、遮蔽、偽工事ガアル
  - イ、假裝ハ物體ヲシテ他ノモノト區別ガ困難ナヤウニ裝フモノデアアル
  - ロ、遮蔽ハ運動又ハ所在ヲ障礙スル方法デアアル
  - 以上假裝、遮蔽ノ材料ハ勉メテ天然物ヲ利用スベキデ、人工ニハ主トシテ偽裝網、迷彩ヲ施シタ幕布又ハ迷彩塗料等ヲ用フ
  - ハ、偽工事ハ眞ノ工事ト同一ノ外觀ヲ呈スルヤウニ構設スルモノデ之ガ爲要スレバ之ニ假裝、遮蔽ヲ施シ且ツ擬兵擬砲等ヲ配置スル
- 三、砲口前ニハ樹枝、編條、席、土囊等ヲ敷キ發射ノ際ノ風力ニヨツテ生ズル形跡砂塵ノ飛ブノヲ豫防スル、又偽裝網ヲ以テ其上方ヲ掩ヒ砲煙及火光ヲ蔽フガヨイ



# 第五篇

## 第一章 馬事提要摘要

### 第一節 要旨

一、馬ハ活兵器ナリ又軍ノ原動力デアアル、我砲兵ヲシテ火砲彈藥ヲ戰場ニ致シ能ク射撃ノ威力ヲ逞フスルヲ得セシムルハ實ニ馬ノ力デアアル

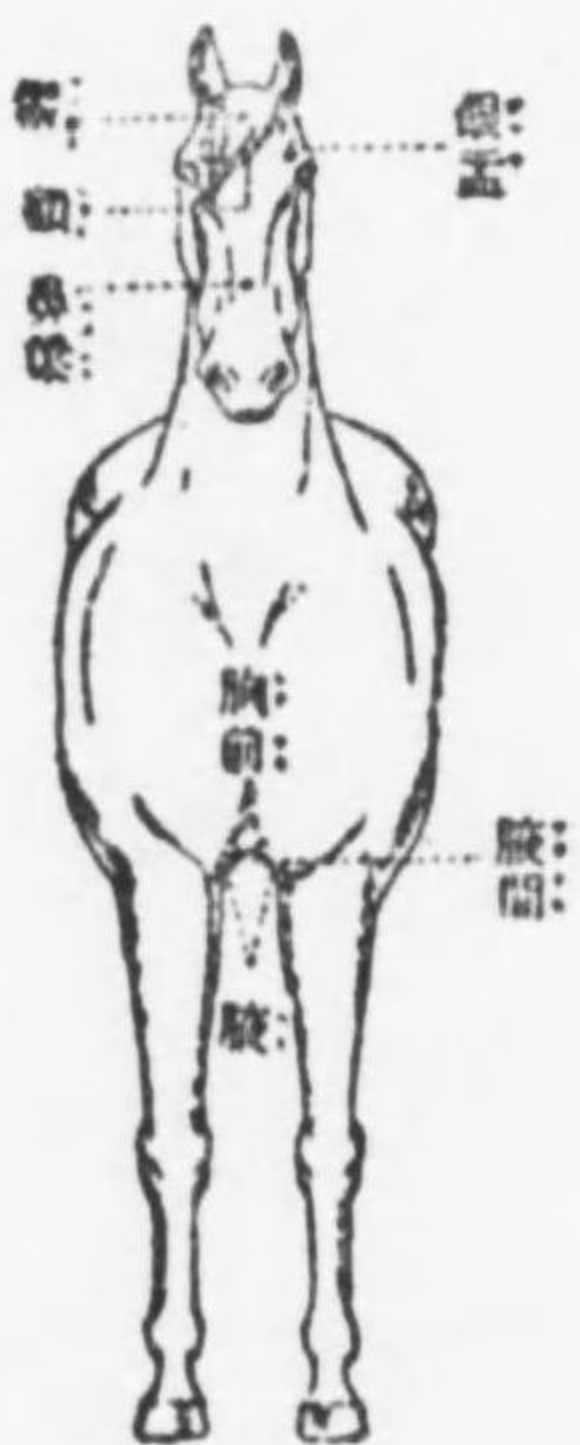
二、夫レ愛馬心ヲ充實シ以テ調教保育ヲ完成シ然ル後始メテ用フルコトガ出來ル、古今名將勇士ノ馬ヲ愛スルヤ其身ヲ愛スルガ如ク、之ヲ養フヤ其子ヲ養フガ如キモノガアル、然ルニ我民俗往々馬ニ親マズ馬事思想頗ル幼稚デアアル、故ニ進ミテ廣ク馬事思想ヲ鼓吹シ國民

一般ノ活模範タルヲ期セネバナラヌ

### 第二節 外貌名稱

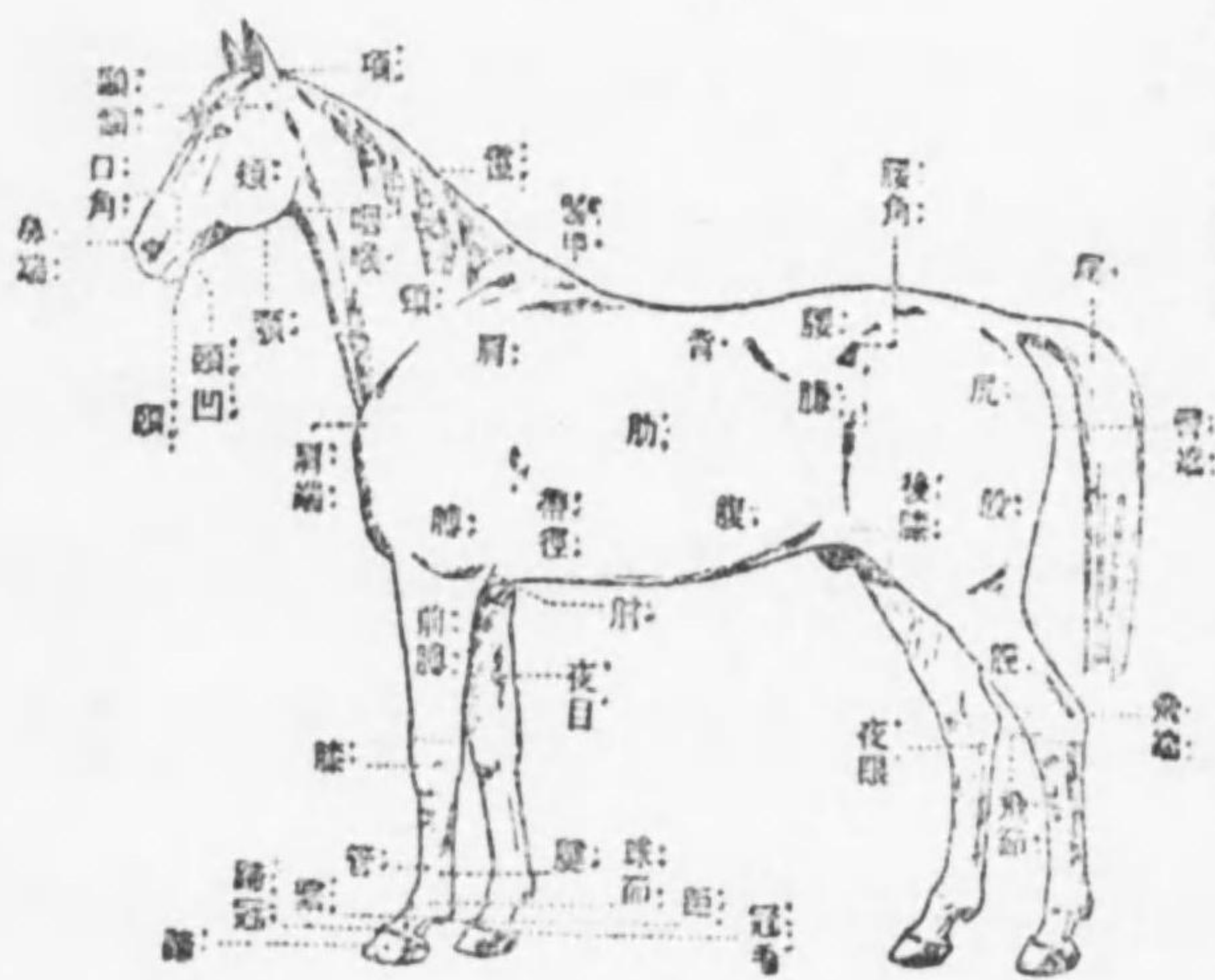
一、馬體ノ外貌名稱ハ左圖ノ如クデアアル

外貌名稱  
其一





外 貌 名 稱  
二 其



第三節 毛色及特徵

一、馬ノ毛色ニハ種々アルモ軍馬トシテハ戰場ニ於テ敵ノ目標トナリ  
 易キ色ヲ忌ム故ニ通常鹿毛、栗毛及青毛ガ多イ

一、鹿毛 全身褐色ナルモ鬃、鬣、尾及四肢下部ノ黒色ナルモ  
 ノデ濃淡種々アリ、特ニ暗褐色ナルモノ又ハ全身殆ド黒色デ唯  
 眼及唇ノ周圍、膝及腹部等ノ褐色ナルヲ黒鹿毛トイフ

二、栗毛 全身赤褐色ナルモノデ濃淡種々アリ、特ニ黒味ヲ帶ビタ  
 ルヲ柘栗毛、鬃、鬣及尾ノ白色ナルヲ尾花栗毛トイフ

三、青毛 全身黒毛ナルモノデ夏ハ眞黒ナルモ、冬ハ褪色スルモノ  
 ガアル

又コノ外ニ蘆毛、月毛、河原毛及毛駁等アルモ此等ノ毛色ノモノハ  
 平時ハ軍隊ニ補充スルコトハ稀デアル、但シ蘆毛ハ有色毛ト白色毛



トノ混生ヨリ成リ、幼齡時ハ有色毛多ク僅ニ白色毛ヲ混生スルニ過ギヌカラ往々軍隊ニモ用ヒルモノデ年齢ヲ加フルニ從ヒ漸次白色ヲ増ス

ニ、特徴ハ各馬ヲ識別スル標徴トナルベキモノデ多クハ生レナガラ有スルモノデ其主ナルモノハ次ノ如シ

- 一、額刺毛 額ニ生ジタ少數ノ白毛ヲ謂フ
- 二、星 額ニアル白斑デ其著シク小ナルモノヲ小星ト謂フ
- 三、流星 星ノ長ク下方ニ延ビタモノヲ謂フ
- 四、鼻白 鼻端ニアル白斑ヲ謂フ
- 五、白 肢ノ下端ニアル白斑デ白斑ノ完全デナイモノヲ半白ト謂フ其部位ニ從ヒ「右後半白」「左前二白」「後二白」「右二白」「右前後三白」「前左後三白」「四白」等ト稱ス
- 六、異毛 局部ニ生ジタ異色毛デ白色又ハ黑色ノモノガ最モ多ク、

生レナガラ有スルモノト創傷ニヨリ生ジタルモノトアリ、其部位ヲ併稱シテ「背異毛」「右頸異毛」等ト稱ス

七、岩陷 筋肉ノ一部窪ミテ皮上ニ陷凹ヲ呈スルモノヲ謂フ、其部位ヲ併稱シテ「左頸岩陷」「右股岩陷」等ト稱ス

八、烙印 皮膚ヲ燒烙シテ印ヲ附シタモノヲ謂ヒ、通常股、肩等ニ之ヲ施シ其產地、所屬等ヲ表ス、其部位ト烙印ノ原形トヲ併稱ス例ハ「新冠牧場産馬ノ「左股N烙印」「青森縣三本木産馬ノ左股S烙印」ノ如シ

右ノ外局所ノ刺毛、裂(截)痕等デ特徴トナルベキモノハ部位ヲ併稱シ、又要スレバ著シク旋毛(毛生ノ旋回又ハ逆生)ノ部位、箇數、形狀等ヲ以テ特徴トナスコトヲ得ル、例ハ「頸下緣旋毛長」「額旋毛三」等ト稱スルガ如シ



### 第四節 榮養

- 一、榮養ノ良否ハ肉附及被毛ノ状態ニヨリ判斷スルコトヲ得、榮養良好ナルトキハ被毛ニ光澤アリ、彈性ヲ有シ、換毛整調ナルモ、不良ノモノハ概ネ之ニ反スル
- 軍馬ノ榮養ハ主トシテ其肉附状態ニヨリ之ヲ甲、乙、丙ニ區分ス
- 甲、堅肥ヲ謂ヒ、筋腱良ク發育シ其鍛鍊適當ナルコトヲ示ス、最も能ク鍛鍊セラレタル筋ハ其筋腹隆起シ筋界明瞭トナリ、特ニ隆起ノ状態ハ乘馬ニ在リテハ比較的長ク輓馬ニ在リテ比較的太ク見ユルヲ例トスル
- 乙、過肥ヲイヒ贅脂肪貯へ、頸、肋、背、腹及尻等ノ皮下ニ脂肪ノ沈著スルモノデ筋ノ彈性ヲ減ジ機敏ナ運動困難トナル持久力減退ス
- 丙、瘦セタルモノヲイヒ多クハ腹部捲縮シ、虛弱デ體力十分ナラズ稀ニ全身瘦削セルニ拘ラズ腹ノミ膨大セルモノガアル、瘦削ノ程度ハ肋、背、尻及股等ノ諸筋ニヨリ觀察ス

### 第五節 性及年齡

- 一、性ハ牡、驢、牝ニ區別シ驢トハ牡ヲ去勢シタモノヲイフ
- 軍馬ハ驢タルコトヲ標準トスルモ已ムヲ得ヌトキハ牝ヲ用フ、又牡ヲ編入シタトキハ六箇月以内ニ去勢スルモノデアアル
- 二、軍馬ノ年齡ハ五歳以上(軍馬補充部保管馬ニ在リテハ二歳以上)デアアル、馬ノ年齡ハ算へ年ニ依リ通常五歳以下ヲ幼齡(幼齡ノ馬ヲ幼駒トイフ)、六歳以上十五六歳迄ヲ壯齡夫レ以上ヲ老齡トス
- 三、實驗上體力最モ旺盛ナルハ概ネ八、九歳ヨリ十二、三歳ノ間デアアル
- 四、十八、九歳以上トナリ尙使役ニ堪フルモノアルモ此ノ年齡ニ達ス

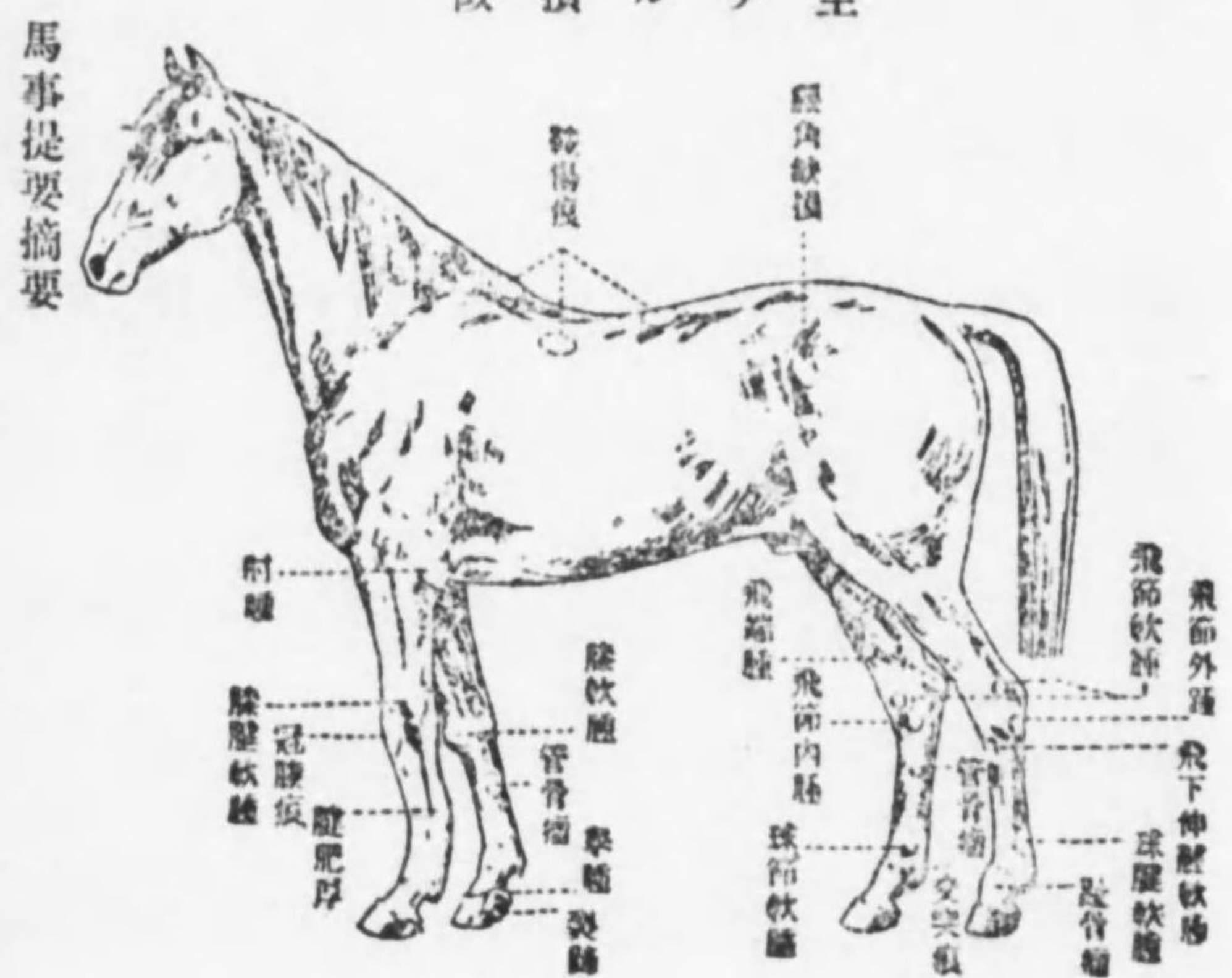


レバ體力衰フルヲ常トス

### 第六節 損徵

- 一、損徵トハ馬體ノ局部的瑕疵ニシテ外部ヨリ觀察シ又ハ觸知シ得ルモノヲ謂ヒ能力及價值ヲ減ズ
- 二、損徵ハ主トシテ四肢ニ發生シ體格ノ缺點特ニ四肢ノ細弱、肢勢ノ不良ニヨルモノ尠カラザルモ使役、調教及裝蹄ノ過失、肢蹄保護ノ不良及外傷等直接之ガ原因ヲナスモノ
- 三、損徵ノ主ナルモノ次ノ如シ

### 主ナル損徵



馬事提要摘要



- 二、骨瘤 過度ノ負重、劇伸及打撲等ニヨリ骨又ハ骨膜ヲ痛メ骨質ノ瘤狀ニ隆起スルモノデ後生部位ニヨリ次ノ如ク區別ス
  - イ、飛節内腫 内側特ニ下方ニ生ジ屢、跛行ノ因ヲナシ能力ヲ減ズルコト最モ大ナリ、其位置前方ニ偏スルニ從ヒ障害ノ度ヲ増加ス
  - ロ、飛節外腫又ハ後腫 飛節外側下方又ハ後方ニ生ス跛癢馬ニ發生スルコト多シ
  - ハ、趾骨瘤 蹄冠ノ上部ニ環狀又ハ瘤狀ニ生ジ、其位置蹄冠ニ接近スルニ從ヒ障害ノ度ヲ増加ス
  - ニ、管骨瘤 管骨ニ生ジ其部位、大小種々アルモ前肢内側上三分ノ一ニ發生スルモノ最モ多シ、其位置屈腱ニ接近スルニ從ヒ障害ノ度ヲ増加ス
- 三、軟腫 關節及腱ノ通路ニ生ズル軟性腫脹ニシテ主トシテ該部ノ過

勞又ハ外傷ニ因ル發生部位ニヨリテ次ノ如ク區別ス

- イ、球節軟腫 球節ノ上側面ニ球形ニ生ズ
- ロ、膝軟腫 膝ノ前面ニ圓形ニ生ズ
- ハ、飛節軟腫 飛節前面ノ上内方及内外兩側ノ三部ニ生ジ相通ズ
- ニ、球腱軟腫 球節ノ上方腱ノ兩側面ニ橢圓形ニ生ズ、往々増大シテ上下ニ延長スルコトアリ
- ホ、飛下伸腱軟腫 飛節ノ直下管ノ前外面ニ圓形ニ生ズ
- ヘ、肘腫、肘ニ生ズ多クハ伏臥ノ際鐵尾ノ壓迫ニ因ル
- ト、飛端腫 飛端ニ生ズ、自ラ他物ヲ蹴リ又ハ顛倒ノ際打撲スルニ因ル
- 四、腱肥厚 腱炎ノ結果腱ノ肥厚ヲ遺スモノデ主トシテ前肢ノ屈腱ニ發シ腱炎ヲ再發シ易イ
- 五、外傷痕 外傷ノ結果瑕痕ヲ遺スモノニシテ腰角缺損、冠膝痕、鞍



六、變蹄 蹄ノ彈性減退ト負重ノ偏リトニヨリ其形質ヲ變ズルモノニシテ主ナルモノハ次ノ如シ  
 イ、蹄腫狹窄、舉腫 前者ハ蹄腫ノ狹窄セルモノ、後者ハ蹄腫ノ狹窄スルト共ニ蹄球ノ舉上セルモノデ前内蹄腫ニ最モ多シ  
 ロ、裂蹄 蹄角ノ分裂セルモノニシテ前蹄内側ニ於テ縦ニ分裂スルモノ最モ多ク蹄冠ニ近キ程障害ニ大ナリ  
 ハ、蕪蹄 蹄底下リ蹄尖部ノ上部凹陷シ、下部凸隆シ蹄腫過高トナレルモノニシテ蹄葉炎ニ繼發スル

第六節 取扱ノ要則

馬ノ心情ヲ判斷シテ之ニ適應スル取扱ヒヲ爲スニハ常ニ能ク其表情ヲ察知スルコトガ必要デアル、今其主ナル表情ヲ掲グレバ次ノ如シ

- 一、耳ヲ立テ之ヲ一定ノ方向ニ向クルハ其方向ニ對シ注意力ヲ集注スル狀ナリ  
 耳ヲ鋭敏ニ動カスハ事物ニ對シ注意シアルモノデ概ネ不安ノ狀デア
- 二、眼ヲ彼此ニ動カスハ不安ノ狀デ一方ノミヲ凝視スルハ注意、警戒ノ狀ナリ
- 三、鼻翼ヲ開キ荒キ呼吸ヲ爲スハ恐怖、不安ノ狀ナリ
- 四、鼻端及上唇ヲ上方ニ縮メルハ概ネ快感ノ狀デア
- 五、前搔キヲナスハ忍耐シ得ザルトキノ狀デ苦痛ヲ訴ヘ又ハ慾望ヲ表スモノデ勞働後又ハ水中ニ在リテハ横臥ノ前兆トシテ之ヲ表スコトガアル
- 六、背ヲ張り尻、尾及後肢ヲ倚スルハ蹴ラントスルノ兆デ盛ニ蹴ルハ



- 七、尾ヲ高く舉ルハ快感ノ狀デ之ヲ股間ニ屈スルハ恐怖、不快ノ狀ナリ
- 八、高く且長ク嘶クハ友ヲ呼ブカ又ハ快感ノ狀ニシテ低ク且短ク嘶クハ通常苦痛、不快ノ狀ナリ

第七節 一般取扱法

一、近接 馬體ニ近接スルニハ常ニ穩ナ音聲ヲ以テ豫知セシメ耳、眼及姿勢ニ注意シ遲疑スルコトナク通常斜前方ヨリ靜ニ其肩側ニ接シ掌デ頸又ハ背ヲ撫テ、或ハ輕ク叩キ之ヲ愛撫スル、馬ガ馬房ニ在ルトキハ通常後方ヨリ近接スルヲ以テ先ヅ音聲デ豫知セシムルコト特ニ必要デアアル

馬若シ騷擾シ蹴リ又ハ咬マントスルトキハ馬體ニ接スルニ先立チ其

ノ眼ヲ凝視シカアル聲ヲ以テ叱責シ、其沈靜スルヲ俟チテ近接シ尙疑懼スルトキハ音響ノ反覆ト愛撫ノ持續トニヨリ之ヲ鎮撫シ、又ハ少量ノ飼料ヲ與フルガ如キ手段ヲ以テ之ヲ馴ス

馬體ニ近接シタ後ハ續テ背ヨリ尻ヲ撫テ肢ニ至リ、頸ヨリ頭ニ及ボシ毛並ニ從テ額、鼻梁及鬃ヲ撫テ、絶エズ穩ナル音響デ馬ヲ慰メ、親和ヲ求メ、以テ馬體各部ノ接觸ニ馴レシム

二、舉肢 左(右)前(後)肢ヲ舉グルニハ馬體ノ左(右)側ニ在リテ後方ニ向ヒ右(左)足ヲ稍、後方ニ引キ、之ニ自己ノ體ヲ支ヘ左(右)手デ馬ノ肩(尻)ヲ輕ク押シ、其體重ヲ舉ゲントスル反對側ノ肢ニ移サシメツ、右(左)手デ管部ヲ前方ヨリ握リ、肢ヲ舉ゲタ後左(右)手デ管部ヲ内方ヨリ握リ、膝ヲ己ノ左(右)股ニ抵テ(飛節ヲ己ノ左(右)腕下ニ抵テ)保持ス、此ノ際若シ蹴ラントスルトキハ速ニ右(左)足ヲ軸トシテ外方ニ旋轉ス



三、**銜換** 勒ヲ装シ又ハ脱スルトキハ馬ノ逸走(放馬)ヲ豫防シ且眼、耳、鼻梁、顎及口角等ヲ強壓シ又ハ**崇** 鬣ヲ纏絡セヌ如ク注意スルコト

口ヲ開カシメシカニ  
口角メシカニ  
領要ム攪ニ



銜ヲ馬口ニ含マシメ  
項紐ヲ裝フニ  
シマ合ニ口馬ヲ銜  
領要ス装ヲ紐メ



装スベキ勒ヲ左臂ニ懸ケタ儘馬頭ノ左側後ニ立チ、左手デ鼻梁ヲ抑へ、右手デ馬頭ヲ顎下ヨリ抱キ、食指ト中指トヲ馬ノ右口角ノ銜受(犬齒ト白齒トノ間ニシ)ニ入レテ口ヲ開カシメツ、口角ヲ確實ニ攪ミ(テ齒ノナキ部分ヲイフ)ニ入レテ装シアル頭絡(勒)ヲ脱シタ後装スベキ勒ノ項紐(革)ヲ持チ

銜ヲ馬口ニ含マシメ之ヲ装シ、次デ右手ヲ抜キテ其長短ヲ修正シ、咽喉(革)ヲ締メル

四、**保持** 馬ヲ保持スルニハ馬頭ノ左側後ニ位置シ、**鞭**ヲ正シク頸ニ懸ケ口角ヨリ概ネ一握半ノ所ニ於テ右手ノ**食指**ヲ兩鞭ノ間ニ入レ**拇指**ト他ノ諸指トノ間ニ兩鞭ヲ保持シ左手ヲ自然ニ垂ル  
馬ヲ駐立保持スルニハ馬頭ノ前ニ馬ト對向シテ位置シ兩手ニ鞭ヲ執リ**拇指**ヲ水(小)勒ノ環ニ近ク鞭上ニ置キ之ヲ保持ス、此ノ際兩肘ヲ輕ク張り兩脚ヲ約半歩開クヲ可トス

五、**牽馬** 馬ヲ牽クニハ鞭ヲ頸ヨリ脱シ馬頭ノ左側後ニ位置シ口角ヨリ概ネ一握半ノ所ニ於テ右手ノ**食指**ヲ兩鞭ノ間ニ入レ**拇指**ト他ノ諸指トノ間ニ兩鞭ヲ握リ、左手ハ鞭ノ端末ヲ握リタルマ、自然ニ垂レ右手ヲ以テ馬ヲ靜ニ導ク  
馬ヲ牽クニ際シテハ鞭ヲ急ニ引キ又ハ銜ニテ強ク口ニ當ルガ如キコ



トガアツテハ不可

馬若シ躊躇シ又ハ駐マラントスルトキハ速ニ側前方ニ進出シ馬ヲ見ルコトナク之ヲ牽キ、又過急ニ行進スルトキハ和カニ韁ヲ控ヘテ之ヲ制シ、逸走又ハ飛躍セントスルトキハ右手ヲ高メ馬頭ヲ上ゲ韁ヲ控ヘ或ハ弛メテ之ヲ制スル、尙狂奔セントスルトキハ一側ノ韁ノミヲ以テ之ヲ制御スル、片韁トスルトキハ馬ハ前進ノ支點ヲ失ヒ保持者ヲ軸トシテ回轉スルニ至ル

六、停止 馬ヲ停止セシムルニハ穩ナル音聲ヲ發シツ、韁ヲ和カニ控ヘ後軀ヲ左右ニ移動セシメヌ如ク行進方向ニ正シク靜ニ停止セシメル、馬若シ之ニ從ハヌトキハ一二歩前進シテ反覆操作ス

七、後退 馬ヲ後退セシメルニハ馬ノ前ニ立チ兩手デ韁ヲ保持シ、先ヅ馬頭ヲ前方ニ導ク如ク韁ヲ操作シ後肢ノ浮イタトキニ於テ韁ヲ押し徐ニ後退セシメル、馬若シ之ヲ嫌フトキハ一、二歩前進セシメ

又ハ手ヲ以テ後軀ヲ轉移セシメ其ノ瞬間ニ後退セシメルガ可イ

八、繫絆 馬房内ニ馬ヲ繫グニハ寢張頭絡ヲ用ヒ、頭絡ハ項、眼及鼻梁ヲ壓セヌ如ク裝シ咽紐ハ呼吸ヲ妨ゲヌ如ク放馬セヌ程度ニ於テ成ルベク緩ク締メ寢張綱又ハ鎖ノ長サハ秣ノ採食及横臥休息自由デ、且隣馬トノ咬蹴及綱傷ヲ豫防シ得ルヲ度トス  
馬繫綱ニテ馬ヲ繫グニハ通常綱ノ中央ヨリ折曲ゲテ二條トシ其ノ屈折部ニ近キ部分ヲ頸ニ卷キ輪形ヲ作り頸ノ下方ニ於テ確實ニ結ンダ後綱ノ兩端ヲ左右ニ分チ各、銜環ヲ通シ杭又ハ樹木ニ繫絆ス

### 第八節 癖馬取扱法

癖馬ハ其習癖ノ種類ニヨリ夫々特別ノ取扱ヲ必要トスルカラ左ニ其取扱ニ關シ特ニ注意スベキ事項ヲ示ス

一、蹴癖 蹴ルコトハ馬ノ本能的防禦手段ノ一ナルヲ以テ、馬ハ自衛



ノ必要ヲ感ゼシメルガ如キ取扱ヲ爲ストキハ之ヲ發作シ、屢、之ヲ反覆スルコトニヨリ終ニハ習性トナルニ至ル、故ニ成ルベク取扱者ヲ一定シ人馬ノ親和及馬添、特ニ後軀集合ノ馴致ヲ圖リ手入、飼付水與等ニ際シ努メテ溫和ニ取扱ヒ、其ノ不安ヲ除去シ蹴ル機會ヲ與ヘヌ如クシ牽馬中蹴ラントスルトキハ馬頭ヲ高ク上ゲテ之ヲ制ス

二、蹴癖ノ甚シキモノニ對シテハ特別ノ手段ヲ講ジ自ラ蹴ルヲ厭フニ至ラシメルコトガアル

三、咬癖 多クハ苛酷、粗暴ナル取扱ニ原因スルヲ以テ溫和ヲ旨トシ飼料ヲ與ヘツ、親和ヲ圖リ前軀ノ集合馴致ヲ勵行シ厩内ニ在ツテハ成ルベク空馬房ヲ隔テ、繋グガ良イ

三、恐怖癖 異様ナ物體、光線及音響等ニ對シ恐怖シ易ク行進中俄ニ停止シ或ハ後退シ或ハ急回轉シテ逃避スルガ如キ癖デ、性質怯懦ナルカ又ハ嘗テ其ノ其物ニ對シ恐怖ヲ感ジタコトアルニ因ル、溫和ヲ

旨トシ恐怖ノ徵候又ハ原因ヲ豫察シタトキハ激勵ト愛撫トヲ以テ安心セシムル如クシ、其恐怖ノ度ニヨリ或ハ停止シテ物體ヲ凝視セシメ或ハ其周圍ヲ遠ク卷乘或ハ牽馬ヲ以テ之ニ近接スル等ノ方法ヲ講ジ漸次恐怖心ヲ除クコトニ努メル

五、狂奔癖 多クハ後方ヨリスル恐怖又ハ嫌忌ニヨリ奔走スル癖デ主トシテ調教ノ過失ニ起因スルモノデアルカラ熱練テ忍耐力ニ富ム者ヲシテ之ガ再調教ヲ爲サシメ、又運動不足ニ陥ラヌヤウニ注意スル

六、後退癖 突然反リ又ハ後退スル癖デ多クハ前方ヨリスル恐怖若ハ頭頸部ニ於ケル苦痛、特ニ項ノ接觸又ハ銜ニヨル口角ノ劇突ヲ免レントスルニヨル、後退ノ際銜傷又ハ舌創ヲ發シ易イ、不意ニ前方ヨリ近接スルヲ避ケ馬ヲ繋グニハ索ヲ成ルベク長クシ又ハ彈力アルモノニ繋ギ或ハ頸輪ニヨリ繋ギ馬房内ニ於テハ通路ニ面シテ繫絆スルカ又ハ放飼トスルガ良イ



後退癖ノ甚ダシキモノニ對シテハ索又ハ帶革ヲ以テ鞅、ヲ連接シ又ハ勒ト鞅トヲ連接シ後退ノ際馬體ノ伸展ヲ困難ナラシメ其癖ヲ矯正スルコトガアル

七、逃癖 馬繫ノ不良、牽馬ノ過失等ニ起因シ運動ノ不足ハ其ノ誘因トナル取扱上注意スベキ主ナル事項次ノ如シ

イ、馬繫 頭絡及寢張綱ノ結著ヲ確實ナラシメル、但シ頭絡殊ニ咽紐ヲ過度ニ緊縮シ又ハ繫索ヲ過短ナラシムルトキハ馬ノ自由ヲ束縛シ苦痛ヲ與ヘ却テ逃走ヲ多カラシメル、頭絡ニ代ヘ頸輪ヲ用フルヲ可トスルコトアリ

ロ、銜換 最モ慎重ニ行ヒ要スレバ二名協力シ又ハ寢張頭絡ノ上ヨリ裝勒シタ後之ヲ脱ス

ハ、牽馬 注意ヲ周密ニシ要スレバ大勒ヲ用フ

八、膠著癖 厩ヨリ牽出サル、ヲ厭ヒ又ハ馬群、地物等ヨリ離別スル

ヲ嫌ヒテ一地ニ膠著スル癖デ群集性本能ニ基キ孤獨ヲ嫌フニ起因スル、牽馬ニ際シテハ韁ヲ長ク保持シ馬ヲ見ルコトナク要スレバ飼料ヲ示シツ、誘導シ尙應ゼザルトキハ前驅ヲ右又ハ左ニ轉移セシメ、或ハ一旦後退セシメタ後前進セシメルガ良イ、又各個乗ヲ勵行シ馬ノ獨立性ヲ養成スルガ肝要ナリ

九、齧癖 切齒デ飼槽、隔木、繫索等ニ支點ヲトリ又ハ支點ヲトルコトナク空氣又ハ空氣ヲ混ズル唾液ヲ吞ミ込ムガ如キ嚙下運動ヲ爲ス癖デ、此時一種ノ音ヲ發シ多クハ胃腸ヲ害シ通常切齒ノ不正磨滅ヲ來ス、無聊、胃ノ異常又ハ摸倣ニ起因ス、他馬ノ摸倣ヲ避クル如ク處置シ日々適度ノ運動ヲ課シ厩内ニテハ屢、少量宛ノ干草ヲ與ヘ、無聊ヲ感ゼザル如クシ寬馬房又ハ柵内ニ放飼スガヨロシイ、其度甚シイモノハ口網又ハ齧癖帶等ヲ裝シ又手術ニヨリ矯正ノ目的ヲ達ス

一〇、熊癖 前肢ヲ開張シ熊が檻内ニテ行フ如ク前驅ヲ左右ニ動搖ス



ル癖テ肢勢、蹄形ヲ不良ナラシメル、無聊又ハ摸倣ニ起因スルヲ以テ前項ノ要領ニヨリ之ヲ癖ケル如クシ、其ノ度甚ダシイモノハ前肢ヲ開張シ得ヌヤウニ之ヲ縛ルコトガアリ

第九節 病馬取扱

- 一、馬ハ自ラ病苦ヲ訴ヘ得ザルガ故ニ常ニ其ノ健否ニ注意シ發病ヲ未然ニ防ギ又早期ニ發見シ診療ノ時期ヲ失セヌ如クセネバナラヌ
- 二、病馬ノ取扱ハ診斷ノ結果ニ基ク指示ニヨルベキモ懇切ナ看護ハ治療ノ效果ヲ速ナラシメ又良好ナ飼養、管理竝適度ノ運動ハ快復力ヲ増進セシメルカラ之ニヨリ快復ノ迅速ヲ圖ラナケレバナラヌ
- 三、傳染病馬ノ取扱ニ關シテハ特ニ周密ナ注意ヲ拂ヒ、防疫上迅速的確ナ處置ヲ講ズルヲ要ス、其注意スベキ要項概ネ次ノ如シ
- イ、早期發見及受診 傳染病若ハ其疑アル病馬ヲ發見スルトキハ直

- ニ診斷ヲ受ケル、傳染病流行シ其ノ慘害ヲ逞シウスルハ發見遅キニ起因スルコトガ多イ
- ロ、交通遮斷及隔離 傳染病ハ單ニ病馬トノ接觸ニヨリ直接ニ傳播スルノミナラズ、人、各種動物、馬具、厩具、飼料及飲水等ノ媒介ニヨリ間接ニ傳播スルモノ多キヲ以テ病馬及疑症馬ハ速ニ隔離シ媒介物ノ交通及運搬ヲ遮斷スル、主ナル傳染病ノ視察期間ハ左ノ如シ
- 炭疽七日、腺疫八日、流行性感冒十日、胸疫、疥癬、禿性匍行疹、加奈陀馬痘十四日、鼻疽、假性皮疽二十五日
- ハ、消毒 病毒ニ汚染シ又ハ汚染ノ疑アル厩、厩具、馬具等ハ總テ之ヲ嚴密ニ消毒シ必要ニ應ジ寢糞、糞等ハ之ヲ燒却シ屍體ハ最モ濃厚ナル病原ヲ保有スルヲ以テ取扱ニ深甚ノ注意ヲ要ス



### 第十節 厩

- 一、厩ノ衛生ニ關シ注意スベキ主ナル事項次ノ如シ
- 一、清潔 厩内外ノ掃除ニ意ヲ用ヒ飼槽ヲ清潔ニシ寢糞ヲ乾シ糞尿ヲ留メズ排尿溝ノ流通ヲ良クス
- 二、乾燥 厩ノ濕潤ハ諸種ノ病因ヲ醸スカラ厩内ノ掃除ニハ妄ニ水ヲ使用セズニ厩内外ノ排水ヲ良クス
- 三、換氣 厩内ノ空氣ハ排泄物カラ生ズル不良瓦斯ニ汚サレ惡臭ヲ生ズルニ至ル故換氣ヲ良クシ絶エズ新鮮ナ空氣ヲ入ル、コトガ必要デアル窓ノ開閉ハ土地ノ狀況ニ應ジ季節、天候ヲ顧慮シ決定スベキモノデ、通常夏季其他溫暖ナ季節ニハ之ヲ開放シ、冬季ニ於テモ亦全ク密閉セヌガ可イ
- 四、氣溫 厩内ノ氣溫高キニ過グレバ體質弛緩シ抵抗力ヲ減ジ、之

- ニ反シ氣溫低キニ失スレバ保溫ノ爲體力ヲ消耗シ榮養ヲ損スルカラ季節ニ應ジ常ニ溫度ノ調節ニ努ムルコトガ肝要デアル、通常氣溫ハ攝氏十五度内外ヲ最モ適度トス
- 二、厩及其ノ附近ニ於テハ火氣ニ注意シ喫煙又ハ裸火ノ使用ヲ戒メル厩又ハ其附近出火ノ爲危險ナトキハ速ニ馬ノ繫絆ヲ解キ、厩外適當ノ場所ニ牽出ス、事急デ其ノ餘裕ナキトキハ寢張綱又ハ頭絡ヲ切斷シ之ヲ救助ス、若シ火ヲ恐レ厩外ニ出ヌトキハ毛布又ハ上衣ヲ以テ馬頭ヲ覆フガ良イ、又救ヒ出シタ馬ハ再ビ火災中ノ厩内ニ復歸スルコトガアルカラ安全ナ場所ニ繫絆又ハ保持セシムルノ要アリ
- 三、寢糞ハ馬ノ寢具ナレバ能ク乾燥シ適度ノ溫度ト柔軟性ヲ保有シ、馬ヲシテ横臥安眠又ハ休息セシメ外傷ヲ豫防シ且糞尿其他ニヨル汚染ヲ防グ
- 寢糞取扱ニ關シ注意スベキ事項次ノ如シ



イ、寢藁ハ保温良好且柔軟デ彈力ニ富ミ、蹄ニ粉碎セラレ、コト少ク又尿ノ滲透容易ナルモノガ良イ、又馬ハ隨時之ヲ採食スルカラ變質、發黴セヌコトガ必要デアアル

ロ、寢藁ハ通常毎夕之ヲ分配シ汚染セルモノト交換スルヲ常トスルモ汚染少キモノハ直ニ棄ツルコトナク能ク乾燥シテ再用シ其保存ヲ良クシ敷量ヲ豊富ナラシメルコトニ努ム

### 第十一節 手入法

- 一、手入具ハ防疫上ノ見地ヨリ各馬毎ニ之ヲ區分シ其混用ヲ避クルヲ可トス
- 一、手入袋ハ「ヅツク」製デ鐵櫛、毛櫛、木櫛、雜巾及鐵篋ヲ收容スル
- 二、鐵櫛ハ皮膚ノ垢ヲ搔キ起シ且毛櫛ニ附著セル垢ヲ除去シ或ハ毛

ノ繩ヲ解クニ使用スルモノデ頭、胸、尻等ノ肉多ク皮膚厚キ部分ニノミ用ヒ、頭、背線、腰角、四肢等骨ノ隆起シ又ハ皮膚薄ク感覺鋭敏ナ部分ニ用キテハナラヌ

- 三、毛櫛ハ鐵櫛デ搔キ起シタ垢ヲ取ルト共ニ馬體ノ全般ニ互リ汚垢ヲ除クニ用フ
- 四、木櫛ハ鬣、尾等ノ長毛ヲ梳ルニ用フ
- 五、鐵篋ハ蹄裏ノ汚物ヲ除クニ用フ
- 六、雜巾ハ眼、鼻、口又ハ肛門等ヲ拭クニ用フ
- 七、蹄洗桶ハ雜巾ヲ濯ギ又ハ蹄ヲ洗フニ用フ

右ノ他蹄油ヲ塗擦スル爲、塗油用布巾其他ノ器具ヲ用ヒ汗、汚垢、濕氣又ハ泥土ヲ除去シ馬體ヲ摩擦スル爲揉藁又ハ束藁ヲ用フ

### 第十二節 護蹄



一、落鐵ハ蹄壁ヲ崩壞シ其ノ儘行動スルガ如キコトアラバ跛行ヲ生ゼシメ遂ニハ直ニ蹄鐵ヲ装スルコトガ出來ヌカラ速ニ裝蹄スルヲ要ス此ノ際脱落セル古蹄鐵ヲ紛失セヌコトニ注意シ直ニ裝蹄シ得ザルトキハ要スレバ藁沓ヲ装スベシ落鐵豫防上注意スベキ主ナル事項次ノ如シ

- 一、改装期ヲ遅延セヌコト
- 二、蹄鐵ノ検査ヲ勵行シ釘蹄ヲ行フコト  
蹄鐵ノ検査ニハ先ヅ蹄ニ附著セル泥土ヲ除キ蹄鐵ノ密著確實デ動搖セザルヤ、蹄鐵ト蹄トノ間ニ間隙ナキヤ、釘頭及釘節ハ落失、折損又ハ浮上セルヤ等ヲ檢ス  
泥濘地、砂地、軌道踏切、林野、河川等通過ノ前後及雨後ニハ特ニ注意スルノ要アリ
- 三、距離間隔ヲ正シクシ遽止急進ヲ避ケ踏掛ケニヨル落鐵ヲ防止ス

ルコト

- 四、前行馬ニ注意シ、又蹄鐵ガユルムトキハ著地ニ際シ一種ノ弛動音ヲ發スルヲ以テ之ニ注意スルコト
- 五、蹄ノ手入ヲ勵行シ蹄質ヲ良好ナラシメルコト
- 二、蹄鐵ニハ尋常蹄鐵及氷上蹄鐵ノ二種ガアル

### 第十三節 蹄ノ手入

- 一、蹄ノ手入ニ關シ注意スベキ主ナル事項次ノ如シ
  - 一、水洗、塗油ヲ勵行シ、適度ノ水分ヲ保タシメ角質ノ韌軟性ヲ維持ス
  - 二、蹄ノ全面特ニ其裏面ヲ清潔ニシ腐爛ヲ豫防シ異物ヲ除去ス
  - 三、蹄鐵ノ保存ニ注意シ落鐵ヲ豫防ス
- 二、蹄ノ手入上注意スベキ細部ノ事項ハ概ネ次ノ如シ



- 一、蹄壁ハ垢ヲ認メズ滑澤デ恰モ竹ノ如キ表面ヲ呈スルガ良イ、然シ其表面ハ蹄漆ト稱スル薄キ膠質膜デ覆ハルルカラ手入ニ方リ固キ物ヲ以テ之ヲ削リ又ハ擦リ取ツテハナラヌ
- 二、蹄冠ハ蹄壁發育ノ根源デ柔軟ナ部分デアルカラ特ニ清潔ニシ垢ヲ留メズ又此ノ部ヲ強擦スベカラズ
- 三、蹄ノ裏面殊ニ蹄又側溝及中溝ニハ汚物ヲ留メ、蹄又ノ腐爛ヲ發シ易イカラ特ニ注意シ、腐爛ノ兆ヲ認メタトキハ直ニ防腐ノ處置ヲ講ズ
- 四、蹄球ハ彈性ニ富ミ柔軟ナルヲ以テ手入粗雜ナトキハ龜裂ヲ生ジ易ク、特ニ蹄又ト蹄支角トノ連接部ハ乾燥ニヨリ裂隙ヲ生ジ易イカラ常ニ該部ノ状態ニ注意ヲ拂ヒ乾燥ヲ豫防スルヲ可トス
- 五、水洗ノ回数ハ季節天候ニヨリ一定シ難キモ一日少クモ一回トシ乾燥シ易キ地方又ハ季節ニ於テハ其回数ヲ増加ス
- 六、塗油ハ主トシテ水分ノ發散ヲ防ギ又外部ヨリ過度ノ水分ヲ吸收スルコトヲ避ケ常ニ蹄ノ角質ヲシテ適度ノ水分ヲ保有セシメ、其乾燥脆弱又ハ濕潤軟化スルヲ防グモノデアル、軍馬ノ蹄ハ一般ニ乾燥シ易イカラ先ヅ水洗ニヨリ清潔ナラシメルト共ニ水分ヲ吸收セシメタ後其表面ガ適度ニ乾クヲ待チテ塗油ヲ行フヲ可トス

### 第十四節 馬糧

一、馬糧ヲ分チテ基本馬糧及代用馬糧ノ二種トシ基本馬糧トハ陸軍給與令ニ定ムル馬糧デ、代用馬糧トハ之ニ代用スルモノヲ謂フ

基本馬糧 大麥、干草、藁、食鹽

代用馬糧

大麥代用 燕麥、高粱、玉蜀黍、大豆、豆粕、裸麥、小麥、麩

米糠、干草、根菜類等



干草代用 牧草、青刈燕麥、藁、生草、粟稈、稗稈等

藥代用 稈類

馬糧ニ適スル野草(良草)別圖(第十九圖)ノ如シ

又生草ハ馬ノ最モ嗜好スルモノナルモ屢々毒草ヲ含有スルコトアリ  
通常馬ハ之ヲ採食セザルモ空腹ノ場合ニハ往々之ヲ食シテ中毒ヲ發  
シ甚ダシキハ死ニ至ルコトアリ注意ヲ要ス、其種類(毒草)別圖(第二  
十圖)ノ如シ

### 第十五節 飼付

一、飼付ハ水與ノ後ニ於テ各馬一齊ニ行フヲ可トス、蓋シ軍馬ノ飼料  
ハ乾燥飼料ナルヲ以テ先ヅ水ヲ與ヘ消化器ヲ濕潤シ渴ヲ醫セシムル  
トキハ採食、消化、吸收ヲ旺盛ナラシメルノ利アルト飼付ヲ一齊ニス  
ルトキハ採食時ニ於ケル馬ノ騷擾、咬蹴ヲ豫防シ得ルノデア

一頁(草食圖九十種)



馬糧

一一三



(二其)草良圖九十第

馬  
糧

一  
四

唇形科

ヤマハクカ



繖形科

ウツロミソバ



菊科

ヨモギ



イヌカワシユ



サ  
ハシロハシロ



ヨメナ



(一其)物植毒有圖十二第

馬  
糧

一  
三

アウセンアサガホ



アサビ



トクモリ



ドクウツギ



キンポウヤ



オハシロハシロ



トリカブト



フヤシソバ



マヤシソバ







馬糞

一一三

- 二、甚シキ空腹時、直ニ飼付スルトキハ採食ヲ急ギ咀嚼不完全デ消化十分ナラヌカラ先ヅ干草ヲ與ヘタ後穀類ヲ與フルヲ可トス
- 三、採食中ハ安靜ニシ咀嚼ヲ完カラシメ飼料ヲ散逸セズ採食ニ方リ、穀類ヲ飼槽外ニ落シ或ハ秣ヲ糞床上ニ散亂スル馬ニ對シテハ適當ノ設備ヲ施シテ之ヲ豫防シ其糞床上ニ散亂シタルモノモ成ルベク再ビ採食セシメルコトニ努メルコト
- 四、飼付直後ノ劇働ハ消化ヲ害スルノミナラズ時トシテ疝痛ノ原因ヲナシ胃破裂ヲ招クコトアル故ニ飼付後一時間以内ハ劇働ヲ避クヲ可トス
- 五、空腹ハ疲勞ノ原因ナルヲ以テ演習行軍等ニハ殘飼ヲ携行シ時機ヲ得ル毎ニ給與スルコト必要ナリ
- 六、飼槽ハ常ニ清潔ナルヲ要ス、特ニ夏季及煉飼ヲ給スル場合ニ於テ然リトス飼槽ニ飼料ヲ殘セルモノアルトキハ之ヲ清掃シタル後新シ

馬事提要摘要

三九七



キモノヲ與フ  
 七、干草ハ穀類ノ飼付前又ハ其中間ニ於テ與フルヲ可トス、干草ノ飼付ハ動モスレバ粗漫ニ流レ或ハ其量區々トナリ或ハ一時馬房ニ不在ナル馬ニ對シテ其飼付ヲ等閑ニセラル、コトアリ、干草給與ノ不足ハ骨軟症ノ如キ病ノ誘因トナルヲ以テ之ガ給與ニハ深キ注意ヲ要ス  
 八、食鹽及切藁ハ常ニ能ク穀類ニ混和シテ與フルヲ要ス、殊ニ干草ノ少キトキニハ切藁ヲ増シ勞働ノ激シキトキハ食鹽ヲ増加スルヲ有利トス、食鹽及切藁ト穀類トノ混合ヲ良好ナラシメル爲ニハ、切藁ヲ豫メ水又ハ鹽水ヲ以テ浸潤シ置クヲ可トス

第十六節 馬具及馬裝

主要ナ馬具ニ付部具ノ名稱並構造ノ概要ヲ示セバ概ネ次ノ如クデアル  
 一、三十年式乘馬具 左ノ部具ヨリ成ル

- イ、乘鞍
- ロ、附隨品 勒、鐙、鐙革、腹帶、鞍囊、蹄鐵囊、鞍下毛布
- ハ、屬品 膝覆、旅囊、馬糧囊、麥袋、水囊、野繫勒、縛具革條

二、砲兵輓馬具

- 左ノ部具ヨリ成ル
- 一、服馬具
- イ、服馬鞍 三十年式乘馬鞍ニ同ジ
- ロ、附隨品 同右ニ付セル蹄鐵匣内ニ收容スルニ依ル
- ハ、輓具 前馬頸上革、後馬頸上革、首革、緩喉革、平長革、擔鈎、輓革、輓索、補助索、輓鎖、輓革控革、輓革鈎革、袴革、袴革鈎革、鞅、鞅袴革、束索革條
- ニ、屬品 驂馬鞭、韁、駐環、頸當革、膝覆、馬糧囊、麥袋、水囊



野繫勒、縛具革條

- 2、 駿馬具
- イ、 駿馬鞍
- ロ、 附隨品 駿馬勒、腹帶、鞍下毛布
- ハ、 輓具 輓具ニ同ジ
- ニ、 屬品 駿馬旅囊、馬糧囊、麥袋、水囊、野繫勒

第十七節 外傷

- 一、 外傷ハ最モ多キ疾病ナルモ各自ノ注意ニヨリ大ニ減少シ得ベキモノ少カラズ
- 二、 蹴傷 他馬ノ蹴踢ニヨリ生ズル創傷デ脛及前膊就中其ノ内側ニ發スルコト多シ
- 三、 冠膝 馬ノ蹉キ倒ル、ニヨリ膝ノ前面ニ生ズル創傷デ瑕痕ヲ遺シ

四肢ヲ弱ムルニ至ル、直接ノ原因ハ騎手ノ不注意ニヨルコトガ多イ

四、 綱傷 綱又ハ索等ヲ繫部ニ掛ケ繫凹ヲ摩擦スルニヨリテ生ズ

五、 挫創、挫傷、擦傷、刺創、裂創等ハ主トシテ厩修繕、馬繫場選定

及馬取扱等ノ不良ニ因ル

六、 鞍傷 鞍ノ壓迫又ハ摩擦ニヨリ背部、髻甲等ニ生ズル創傷デ演習、行軍時ニ多發ス

通常鞍及鞍下毛布ノ不良、裝鞍、駄載及騎乘法ノ不正、背部ノ手入及脱鞍後ノ處置不良、長時ニ互ル裝鞍ノ持續等ヲ主因トシ瘦削、銳髻甲、凸背及平肋等ノ馬ニ生ジ易イ

馬事提要摘要

豫防ノ爲ニハ先ヅ馬背受鞍部ノ皮膚抵抗力ヲ増進スル如ク日常之ニ注意シ鞍及毛布ノ保存手入並其ノ適合、脱鞍休止、馬背ノ手入及按摩ヲ勵行シ特ニ罹リ易キ馬ニハ豫メ海藻、蘆等ノ副鞍褥ヲ用ヒ又ハ鞍下毛布ヲ増加スル等適宜ノ處置ヲ講ズルガ良イ又各馬常ニ一定ノ



- 七、鞍<sup>くら</sup>ヲ用フルコトガ必要ナリ
- 七、帶<sup>おび</sup>傷<sup>や</sup> 腹<sup>はら</sup>帶<sup>おび</sup>ノ壓<sup>おさ</sup>迫<sup>せ</sup>、摩<sup>こ</sup>擦<sup>す</sup>ニヨリ帶<sup>おび</sup>徑<sup>けい</sup>部<sup>ぶ</sup>ニ生<sup>おこ</sup>ズル創<sup>くわ</sup>傷<sup>や</sup>デ腹<sup>はら</sup>帶<sup>おび</sup>ノ不<sup>ふ</sup>潔<sup>けつ</sup>硬<sup>こう</sup>化<sup>か</sup>、帶<sup>おび</sup>徑<sup>けい</sup>部<sup>ぶ</sup>ノ手<sup>て</sup>入<sup>い</sup>不<sup>ふ</sup>良<sup>りょう</sup>、腹<sup>はら</sup>帶<sup>おび</sup>ノ變<sup>へん</sup>位<sup>い</sup>及<sup>お</sup>緊<sup>きん</sup>縛<sup>ばく</sup>過<sup>か</sup>度<sup>ど</sup>等<sup>ら</sup>ヲ主<sup>しゅ</sup>因<sup>いん</sup>トスル特<sup>とく</sup>ニ罹<sup>か</sup>リ易<sup>い</sup>キ馬<sup>ば</sup>ニハ豫<sup>よ</sup>メ柔<sup>やわ</sup>軟<sup>らん</sup>ナ布<sup>ふ</sup>、ゴム片<sup>ぺん</sup>、蘆<sup>あ</sup>又<sup>また</sup>ハ昆<sup>こん</sup>布<sup>ふ</sup>等<sup>ら</sup>ヲ腹<sup>はら</sup>帶<sup>おび</sup>ニ纏<sup>まと</sup>フヲ可<sup>べ</sup>トス
- 八、胸<sup>け</sup>革<sup>かく</sup>傷<sup>や</sup>及<sup>お</sup>頸<sup>けい</sup>革<sup>かく</sup>傷<sup>や</sup> 輓<sup>はん</sup>具<sup>ぐ</sup>傷<sup>や</sup>中<sup>ちゆう</sup>主<sup>しゅ</sup>要<sup>やう</sup>ナモノデ前<sup>ぜん</sup>者<sup>しや</sup>ハ緩<sup>くわん</sup>喉<sup>くわい</sup>革<sup>かく</sup>、後<sup>ご</sup>者<sup>しや</sup>ハ頸<sup>けい</sup>上<sup>じやう</sup>革<sup>かく</sup>ノ壓<sup>おさ</sup>迫<sup>せ</sup>、摩<sup>こ</sup>擦<sup>す</sup>ニヨリテ生<sup>おこ</sup>ズル創<sup>くわ</sup>傷<sup>や</sup>デ裝<sup>さう</sup>法<sup>ぽう</sup>ノ不<sup>ふ</sup>正<sup>せう</sup>、革<sup>かく</sup>具<sup>ぐ</sup>及<sup>お</sup>其<sup>その</sup>接<sup>せつ</sup>觸<sup>とく</sup>部<sup>ぶ</sup>ノ手<sup>て</sup>入<sup>い</sup>不<sup>ふ</sup>良<sup>りょう</sup>、不<sup>ふ</sup>齊<sup>せい</sup>地<sup>ち</sup>ノ使<sup>し</sup>役<sup>やく</sup>等<sup>ら</sup>ニ原<sup>げん</sup>因<sup>いん</sup>シ瘦<sup>しゆ</sup>セタモノハ之<sup>これ</sup>ニ罹<sup>か</sup>リ易<sup>い</sup>イ特<sup>とく</sup>ニ罹<sup>か</sup>リ易<sup>い</sup>イ馬<sup>ば</sup>ニハ豫<sup>よ</sup>メ帶<sup>おび</sup>傷<sup>や</sup>豫<sup>よ</sup>防<sup>ぼう</sup>ト同<sup>どう</sup>様<sup>じやう</sup>ノ處<sup>ちよ</sup>置<sup>ち</sup>ヲ講<sup>かう</sup>ズルヲ可<sup>べ</sup>トス

第十八節 傳染病

- 一、馬<sup>ば</sup>ノ傳<sup>でん</sup>染<sup>せん</sup>病<sup>びやう</sup>ハ種<sup>しゆ</sup>類<sup>るい</sup>多<sup>おほ</sup>キモ概<sup>がい</sup>ネ次<sup>じ</sup>ノ如<sup>ごと</sup>シ
- 二、炭<sup>たん</sup>疽<sup>そ</sup> 各<sup>かく</sup>家<sup>か</sup>畜<sup>しよく</sup>特<sup>とく</sup>ニ馬<sup>ば</sup>ハ罹<sup>か</sup>リ易<sup>い</sup>ク人<sup>にん</sup>モ亦<sup>また</sup>感<sup>かん</sup>染<sup>せん</sup>シ病<sup>びやう</sup>原<sup>げん</sup>タル炭<sup>たん</sup>疽<sup>そ</sup>菌<sup>きん</sup>ハ通

- 常<sup>じょう</sup>土<sup>ど</sup>壤<sup>らう</sup>中<sup>ちゆう</sup>ニ存<sup>ぞん</sup>シ飼<sup>き</sup>料<sup>りょう</sup> 寢<sup>ね</sup>藁<sup>ごう</sup>又<sup>また</sup>ハ飲<sup>いん</sup>水<sup>すい</sup>等<sup>ら</sup>ノ媒<sup>ばい</sup>介<sup>かい</sup>ニヨリ感<sup>かん</sup>染<sup>せん</sup>スル病<sup>びやう</sup>馬<sup>ば</sup>ノ排<sup>はい</sup>泄<sup>せつ</sup>物<sup>ぶつ</sup>及<sup>お</sup>屍<sup>し</sup>體<sup>たい</sup>ニハ病<sup>びやう</sup>原<sup>げん</sup>ヲ含<sup>くわん</sup>ムカラ頗<sup>ひん</sup>ル危<sup>き</sup>險<sup>けん</sup>デア<sup>れ</sup>ル人<sup>にん</sup>ハ創<sup>くわ</sup>傷<sup>や</sup>ヨリ感<sup>かん</sup>染<sup>せん</sup>スル場<sup>ばう</sup>合<sup>ごう</sup>ガ多<sup>おほ</sup>イ
- 三、鼻<sup>び</sup>疽<sup>そ</sup> 馬<sup>ば</sup>、驢<sup>ろ</sup>、騾<sup>ろ</sup>及<sup>お</sup>人<sup>にん</sup>ニ感<sup>かん</sup>染<sup>せん</sup>シ病<sup>びやう</sup>原<sup>げん</sup>タル鼻<sup>び</sup>疽<sup>そ</sup>菌<sup>きん</sup>ハ患<sup>わん</sup>部<sup>ぶ</sup>ノ滲<sup>しん</sup>出<sup>しゅつ</sup>物<sup>ぶつ</sup>及<sup>お</sup>鼻<sup>び</sup>漏<sup>ろう</sup>中<sup>ちゆう</sup>ニ存<sup>ぞん</sup>シ病<sup>びやう</sup>馬<sup>ば</sup>トノ接<sup>せつ</sup>觸<sup>とく</sup>、既<sup>すで</sup>具<sup>ぐ</sup>、馬<sup>ば</sup>具<sup>ぐ</sup>及<sup>お</sup>馬<sup>ば</sup>糧<sup>りやう</sup>等<sup>ら</sup>ノ媒<sup>ばい</sup>介<sup>かい</sup>ニヨリ感<sup>かん</sup>染<sup>せん</sup>スル
- 四、胸<sup>け</sup>疫<sup>えき</sup> 傳<sup>でん</sup>染<sup>せん</sup>性<sup>じやう</sup>胸<sup>け</sup>膜<sup>まく</sup>肺<sup>はい</sup>炎<sup>えん</sup>デ傳<sup>でん</sup>播<sup>ぱ</sup>シ易<sup>い</sup>ク馬<sup>ば</sup>群<sup>ぐん</sup>ノ全<sup>ぜん</sup>部<sup>ぶ</sup>ヲ侵<sup>お</sup>カスコトアリ
- 五、疥<sup>けい</sup>癬<sup>せん</sup> 疥<sup>けい</sup>癬<sup>せん</sup>蟲<sup>ちゆう</sup>ノ寄<sup>き</sup>生<sup>せい</sup>ニヨル、病<sup>びやう</sup>馬<sup>ば</sup>トノ接<sup>せつ</sup>觸<sup>とく</sup>、手<sup>て</sup>入<sup>い</sup>具<sup>ぐ</sup>、馬<sup>ば</sup>具<sup>ぐ</sup>、寢<sup>ね</sup>藁<sup>ごう</sup>等<sup>ら</sup>ノ媒<sup>ばい</sup>介<sup>かい</sup>ニヨリ傳<sup>でん</sup>播<sup>ぱ</sup>シ手<sup>て</sup>入<sup>い</sup>不<sup>ふ</sup>良<sup>りょう</sup>ハ其<sup>その</sup>發<sup>はつ</sup>生<sup>せい</sup>ヲ容<sup>よう</sup>易<sup>い</sup>ナラシム

第十八節 戰傷

- 一、戰<sup>せん</sup>傷<sup>やう</sup>トハ敵<sup>てき</sup>ニ因<sup>いん</sup>ル傷<sup>やう</sup>病<sup>びやう</sup>ニシテ、主<sup>しゅ</sup>ナルモノハ火<sup>か</sup>器<sup>き</sup>ニヨルモノ(射<sup>しや</sup>創<sup>じやう</sup>ト謂<sup>い</sup>フ)、白<sup>はく</sup>兵<sup>へい</sup>器<sup>き</sup>ニヨルモノ(白<sup>はく</sup>兵<sup>へい</sup>創<sup>じやう</sup>ト謂<sup>い</sup>フ)及<sup>お</sup>化<sup>か</sup>學<sup>がく</sup>兵<sup>へい</sup>器<sup>き</sup>ニヨルモノ(化<sup>か</sup>兵<sup>へい</sup>症<sup>じやう</sup>ト謂<sup>い</sup>フ)ナリ



- イ、射創 銃彈ニヨルモノ(銃創ト)、砲彈ニヨルモノ(砲創ト)其他ノ爆撃ニヨルモノ(爆傷ト)アリ
- ロ、白兵創 刀、劍、槍等ニ因ルモノニシテ切創、刺創ヲ主トシ挫創、裂創等之ニ次グ
- ハ、化兵症 瓦斯ノ種類、濃淡及作用、時間ノ長短ニヨリ差異アリ

## 第六篇

### 第一章 陣中要務令摘要

#### 第一節 傳令

- 一、傳令ノ傳達スル通信ハ命令、報告、通報ノ三種類トス  
傳達ノ方法ハ其時ニ依ツテ或ハ口上ヲ以テ傳ヘ或ハ筆記又ハ印刷シタ書簡ヲ以テス
- 二、傳令ハ出發前ニ必ズ左ノ事項ヲ能ク承知スルコト
  - イ、受信者及其所在地
  - ロ、經路
  - ハ、步度(要スレバ到著時刻)



ニ、傳達後ノ處置

ホ、其他必要ノ注意

又敵ニ關シ特ニ注意スベキ事項ハ上官カラ指示サレル

三、口上ヲ以テ傳達スルトキハ傳令ハ出發前竝ニ歸著後其事項ノ全部

又ハ要旨ニ就テ之ヲ復唱スベシ

傳令ハ能ク上官カラ言ハレルコトヲ聞キトリ其意味ヲ十分ニ了解シ

タ後ニ出發セネバナラヌ若シ不明ノ點ガアレバ之ヲ問ウテ明ニシ誤

リノナイヤウニ注意スベシ

四、服裝ハ輕裝デ必要ノモノバカリヲ携行スル

傳令ハ上官カラ命ゼラレタ速度デ行進スベキモノデアル、陸軍規定

ノ封筒ヲ用フル時ハ裏ニ記載シアル並、急、至急ノ中指定サレタ速

度ヲ用フ其速度ハイロノ事情デ差異ガアルガ概ネ次ノ通りデア

ル

第二節 傳令ノ速度

一、徒歩

並 一時間約五キロ米 (概ネ速歩ヲ用ヒル)

急 一時間約六キロ米 (駈歩ト速歩トヲ混用スル)

至急 唯近距離バカリニ用ヒルモノデ體力ノ耐ヘルカギリ

成ルベク早く駈歩スル

二、乘馬

並 一時間約八軒 (概ネ三分ノ一ノ步度即チ常歩二、速歩

一ノ割合)

急 一時間約十軒 (概ネ三分ノ二ノ步度即チ常歩一、速歩

二ノ割合)

至急 馬力ノ耐フルニ應ジ成ルベク迅速ナル速度ヲ用ヒ約

二十軒以内ノ距離ニノミ應用スル

三、傳令ハ途中テ上官ニ遇フテモ其步度ヲ變ズルコトナク「傳令」ト呼



ビテ通過ス急グ場合ニハ敬禮ヲ行フニ及バヌ  
傳令ハ若經路ヲ上官カラ示サレナイ時ハ安全ノ近道ヲ選ム要スレバ  
假ヒ迂路デアツテモ安全ノトコロヲ選ム方が有利ノコトアリ

- 四、口上ノ傳令ガ傳達スベキ上官ノ許ニ達シタ時ハ先ヅ第一ニ何官殿  
何官命令又ハ何官報告(例ヘバ聯隊長命令、大隊長報告ノ如キ)ヲ  
云ツタ後直チニ其命令報告ヲ陳ベル又何官殿トイハナイデモ明瞭デ  
間違ノナイ場合ハ單ニ何官命令又ハ報告ト唱ヘルモ妨ナイ  
書簡ヲ送致スル傳令ガ傳達スベキ上官ノ許ニ達シタ時ハ直ニ其書簡  
ヲ上官ノ許ニ差出シ其封筒ニ受領ノ證ヲ受ケ且其上官ノ返事ヲ受ケ  
ル、通常書簡ノ封筒ニ捺印、署名シテ返サレル  
傳令ハ傳達ヲ終ツテ歸途ニツク時ニ連絡ノ爲要件ハナイカ否カタ先  
方ノ上官ニ能ク尋ネ確メタ後出發スルガヨイ
- 五、傳令ガ歸來シタ時ハ最初命ゼラレタ上官ノ許ニ直ニ行キ口上ヲ以

テスル時ハ其要旨若クハ全部ヲ復唱シ書簡ヲ以テスル時ハ受領證ヲ  
差出シ尙先方カラノ返事アレバ之ヲ申述ベ又ハ其書簡ヲ差出スベキ  
デアアル

傳令ガ途中敵ニ携帶シタ書簡ヲ奪ハレル恐ノアル場合ハ出發前之ヲ  
靴下ノ中、衣ノ裏ニ縫込ム等ノ處置ヲナシ、タトヒ途中デ之ヲ破毀、  
消滅、飲下スルトモ決シテ敵手ニ渡シテハナラヌ

此ノ如キ場合ニハ豫メ書簡ノ要旨ヲ出發前ニ示サレルモノデアアル

### 第三節 遞傳哨

- 一、遞傳哨トハ甲、乙、丙、丁……等各地ニ通常兵三乃至六、外ニ長  
トシテ下士官一ヲ置キ命令、報告等ヲ傳達スルニ甲地ヨリ乙地ノ者  
ニ傳ヘ更ニ乙地ノ者ハ丙地ノ者ニ、丙地ノ者ハ丁地ノ者ニト云フヤ  
ウニ順次ニ傳フル方法デ各地ニ居ル者ヲ遞傳哨ト稱シ左ノ三種アリ



- イ、遞歩哨 徒歩者ノミノモノ
- ロ、遞騎哨 乘馬者ノミノモノ
- ハ、遞自轉車哨 自轉車ニ乗レル者ノ集リ

第四節 斥候

- 一、砲兵ノ斥候ノ任務ハ極メテ重要デアツテ兵ト雖モ拔群ノ功ヲ奏スル機會ガ多イ故ニ之ニ從事スル者ハ機敏ト熱心テ又沈著ト剛膽ニ動作ヲシテ非常ノ困厄ニ耐ヘ克ツコトガ必要デアル
- 二、斥候ノ種類左ノ如シ
  - イ、地形斥候 地形ヲ偵察シ部隊ノ運動ヲ容易ナラシムルヲ任トス
  - ロ、警戒斥候 行軍及戰鬪間不意ノ敵襲ニ對シテ警戒ニ任ズ
  - ハ、觀測斥候 戰鬪前若ハ戰鬪間目標偵察及我射彈ノ景況ヲ觀測シ其效力ヲ知ルコトニ任ズ

三、斥候ノ注意スベキ要件

- イ、能ク地形ヲ暗記シ通過シタル道路ニハ標識又ハ木ノ枝ヲ折り或ハ夜間ニアリテハ紙片ナドヲ散布スル等ノ手段ヲツクシ要スレバ
- ロ、敵襲ニ際シテ已ムヲ得ズ離レタトキハ所定ノ場所ニ集合スルカ又ハ本隊ニ歸還スルコト

第五節 對空監視哨

- 一、對空監視哨ノ任務左ノ如シ
  - 駐軍間ニ在リテハ前哨區又ハ舍營(露營)區毎ニ之ヲ設クルモノニシテ一哨所毎ニ下士官又ハ上等兵ヲ長トセル五名乃至八名(内一名ハ喇叭手)ヨリ成リ通常一名又ハ二名ヲ以テ監視ニ任ゼシメ殘餘ハ交代兵トシテ適宜ノ位置ニ在ラシム



二、對空監視哨ノ位置

駐軍間ニ於ケル位置ハ地上ノ敵ニ對シ掩蔽セラレ且上空ニ對スル視界廣濶ニシテ附近ハ特ニ靜肅ナルヲ要ス

三、一般守則次ノ如シ

イ、對空監視ハ常ニ四周ノ上空ヲ監視シ又ハ音響ニ注意シ若シ飛行機、氣球等ヲ發見セバ監視ヲ中絶スルコトナク直ニ其情況ヲ指揮官ニ報告スベシ

ロ、發見シタル飛行機ガ敵ノモノタルカ或ハ疑ハシキモノニシテ我ニ近接シ來ルトキハ直ニ示サレタル防空部隊ニ通報スベシ

ハ、敵飛行機全ク我視界ヲ去ラバ之ヲ指揮官ニ報告スベシ

ニ、其他ハ概ネ騎哨ノ動作ニ準ズ

四、特別守則次ノ如シ

イ、監視哨ノ名稱

ロ、彼我飛行機ノ識別法

ハ、必要ナル道路、地點等ノ名稱

ニ、要スレバ特ニ監視スベキ方向

ホ、連絡スベキ防空部隊ノ位置

ヘ、報告又ハ通報ノ手段

第六節 警戒勤務

一、行軍ノ警戒

一、行軍間ニ於ケル警戒ハ 前衛、側衛又ハ後衛ヲ以テスル

二、行軍間ニ於ケル警戒隊ノ任務ハ 不意ノ敵襲ヲ豫防シ敵ノ視察ヲ妨ゲ且本隊ノ行進ヲシテ滯滞ナカラシメルノデアアル

三、前衛ノ兵種ハ 歩兵、騎兵、野戰砲兵、工兵、衛生隊等ヨリ成ル

四、前衛ノ區分ハ 通常前衛本隊、前兵及前衛騎兵ニ區分シ小ナル部



- 隊ニアリテハ單ニ尖兵歩兵中隊若ハ尖兵ノミヲ出スコトアリ
- 五、前兵ノ兵力兵種ハ前衛歩兵ノ四分ノ一乃至三分ノ一及必要ノ騎兵ヨリ成リ又要スレバ工兵ヲ屬セラル
- 六、連絡兵ハ行軍縱隊ニ於テ區分セラレタル兩部隊相互ノ連絡ニ任ズルモノデアアル
- 七、連絡兵ノ動作ハ連絡兵ハ道路ノ分歧點、交叉點又ハ曲折部等ニテ一時停止シ前後ノ連絡ヲ失ハザル様ニシテ常ニ前後兩部隊ニ注意シ一方ノ部隊ノ動作即チ停止、發進、步度變換等ヲ直ニ他方ノ部隊ニ記號シ時トシテ音聲ヲ以テ告知スルモノデアアル

二、前哨

- 一、前哨ノ任務ハ敵情ヲ搜索シ其企圖ヲ察知シテ之ニ備ヘ以テ休止ノ軍隊ヲ警戒スルノヲ任務トスル

- 二、前哨ハ警戒ノ爲通常小哨、下士哨又ハ複哨ヲ分遣配置スルモノデアアル
- 三、小哨ノ兵力及警戒法左ノ如シ
  - イ、將校又ハ下士官之ガ長トナリ其兵力ハ一小隊以下デアアル
  - ロ、警戒ノ爲所要ニ應ジ下士官哨又ハ複哨ヲ出シテ監視セシメ尙要スレバ小哨直接ノ警戒ノタメ銃前哨ヲ出ス
- 四、巡察ハ哨線内ヲ巡察シ各哨所ヲ監視シ且哨兵ヲ配置セザル土地ヲ搜索シ比隣哨所ト連絡ヲ通シ尙警戒線ニ於テ射擊或ハ喧噪セシトキ其事實ヲ確カメ哨兵ノ援助ニ任ズルモノデアアル

第七節 行軍

- 一、行軍 軍隊ノ一地ヨリ一地ニ移ル運動ヲ謂フノデアアル
- 二、行軍ノ價值 行軍ハ凡テ戰鬥ノ基礎トナルモノデ其行軍力ノ強弱



- ハ直ニ戦闘ノ勝敗ニ關係ヲ及ボスモノデアアル
- 三、行軍力ヲ保持増進セシメンガ爲ニハ、行軍軍紀ヲ嚴守シ人馬ノ衛生特ニ馬匹ノ鞍傷及四肢ノ疾病ニ注意シナケレバナラヌ
- 四、行軍ノ種類ハ、之ヲ大別シテ旅次行軍、戰備行軍ノ二トス  
尙實施ノ方法時期等ニ依リ急行軍、強行軍、夜行軍ノ名稱モアル
- 五、旅次行軍ハ、敵ニ出會スル虞ナキトキニ行フモノニシテ主トシテ軍隊ヲ休養スルコトヲ願慮シ通常警戒隊ヲ設ケザルモノデアアル
- 六、戰備行軍ハ、敵ニ出會スル虞アルトキ警戒隊ヲ設ケテ行軍スルモノデアアル
- 七、急行軍、強行軍トハ、急行軍トハ速度ヲ速メタルモノヲ云ヒ、強行軍トハ一日ノ行程ヲ増大ニシタルモノヲ云フ、二者共ニ大差ナキモノニシテ何レモ行軍間ノ休日ヲ廢シ且其行程ヲ増大シ或ハ爲シ得ル限り休憩時間ヲ減少シ尙夜間ニ於テモ行軍ヲ繼續スルコトアリ

- 八、夜行軍ヲ行フ場合概ネ左ノ如シ
  - イ、敵ニ對シ我行動ヲ秘匿セントスルトキ
  - ロ、狀況ニ依リ急行、強行ヲ要スルトキ
  - ハ、炎熱時ニ於テ晝間ノ行軍ニ代ヘテ施行スルトキ
- 九、行軍出發前ハ、武裝、馬裝特ニ蹄鐵ニ注意セネバナラヌ
- 一〇、行軍間嚴守スベキ件左ノ如シ
  - イ、勉メテ前後ニ重リ著シク間隔距離ヲトラヌコト
  - ロ、「休メ」ヲ命ゼラレタトキハ特別ノ時（途中高貴高官ニ出遇ヒタル時等）ヲ除ク外ハ談話喫煙ハ許サレナイガ市街内ヲ通過ノ際ニハ特ニ態度、姿勢等ニ注意セネバナラヌ
  - ハ、各人恣ニ服裝ヲ亂スベカラズ
  - ニ、許可ナク隊列ヲ離レナイコト若シ用便等ノ爲メ已ムヲ得ズ隊列ヲ離レントスル時ハ小隊長若ハ分隊長ノ許可ヲ受クルコト



- ホ、道路ノ一側ハ必ズ明ケテ置クコト
- 一、夜行軍ニ於テ注意スベキ件左ノ如シ
  - イ、靜肅ナルコト
  - ロ、相互ノ連絡ヲ失ハナイコト
  - ハ、距離、間隔ヲ開カナイコト
  - ニ、濫ニ隊列ヲ離レナイコト
- ホ、許可ナクシテ談話シタリ又ハ喫煙シテハナラヌ
- ヘ、居眠リシ或ハ騎坐及韁ノ保持ヲ忽ニシテ馬ヲ顛倒セシメザルコト
- 二、徒涉場通過ノ際ニ於ケル注意左ノ如シ
  - イ、水深〇米八〇以下ナレバ徒涉シ得ルモノナリ
  - ロ、流レ速ナルトキハ水面ヲ諦視セザルコト
  - ハ、常ニ馬頭ヲ上流ノ方ヘ向ケ高ク保持スルコト

- 三、軍橋通過ノ際ニ於ケル注意左ノ如シ
  - イ、乗馬ノマ、命ゼラレタ隊形ニテ橋梁ノ中央ヲ通過スルノデアアル
  - ロ、軍橋ニ達スル前若干距離ヲ常歩ニテ行進シテ馬ヲ沈靜サセルコト
  - ハ、各馬間示サレタル距離ヲ保チ馬ノ騷擾等ノ爲隊列ヲ亂シ軍橋ノ破損ヲ招クコトナキ様注意スル
  - ニ、距離ヲ失フコトアルモ軍橋上ニ於テ之ヲ回復スルコトナキ様ニスベシ
- 四、休憩間ニ於ケル馭者ノ動作左ノ如シ
  - イ、先ヅ蹄鐵ヲ檢シ次ニ四肢ヲ摩擦スルコト
  - ロ、休憩中ハ上官ニ對シ敬禮ヲ行フコトナシ
  - ハ、道路ヲ塞ギ他隊或ハ傳騎ノ往來ヲ妨ゲヌコト
  - ニ、兩便ハ休憩後成ルベク速ニ爲スコト



ホ、装具ノ不具合ナル點アラバ速ニ之ヲ修正スル  
 ヘ、馬ヲ眞直ニ示サレタル方向ニ置キ亦放逸セシメザルコト  
 ト、水飼ヲ十分ニナシ残水ヲ無意味ニ捨テズシテ戰友ニ要否ヲ尋ヌルコト

第八節 斥候ノ報告

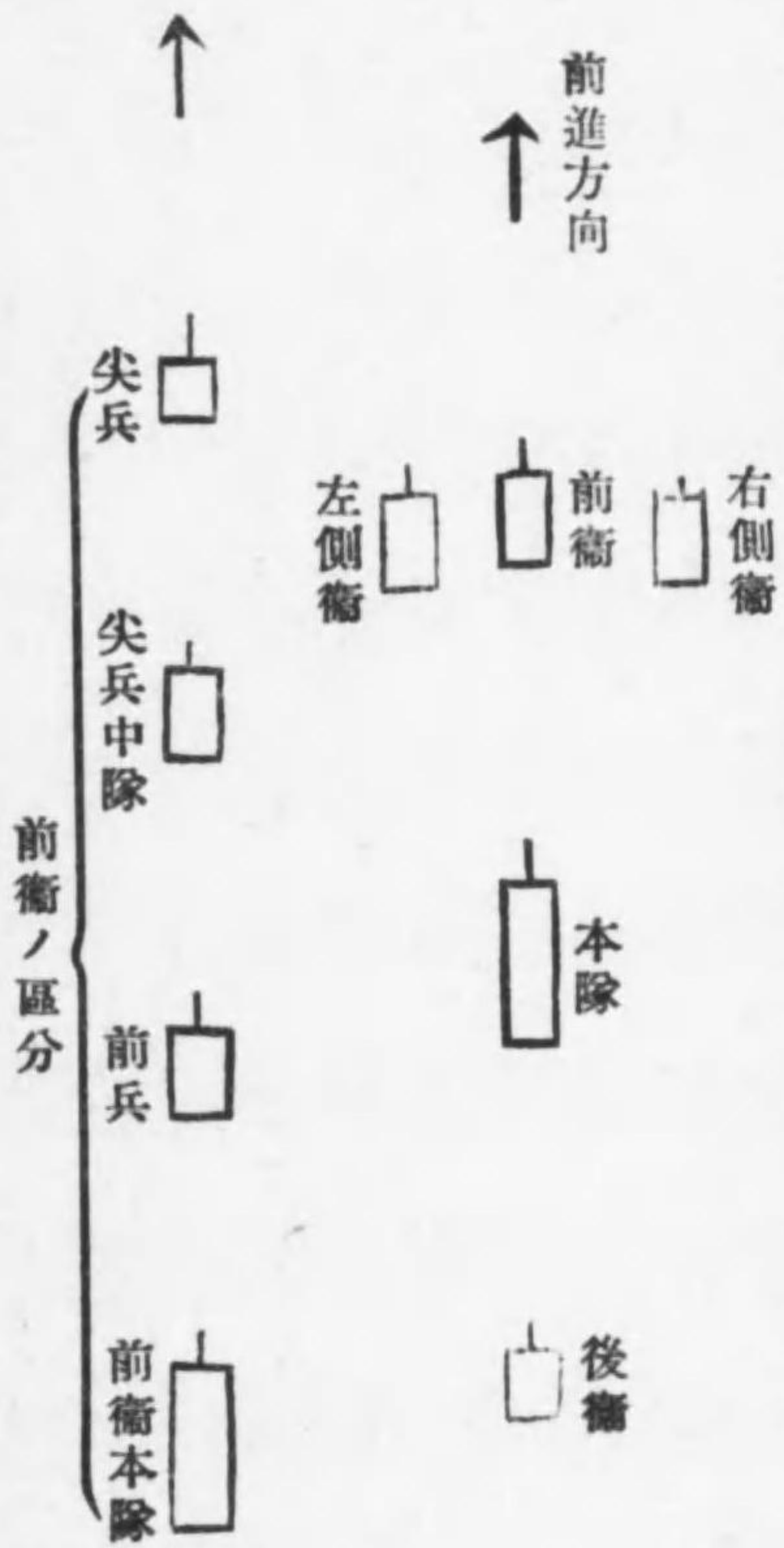
一、斥候ハ敵ニ關シ知り得タ情況ヲ機ヲ失セズニ報告セネバナラナイ如何ニ適切ナ搜索ノ結果ヲ得テモ報告ガ時機ニオクレルト何ノ役ニモナラヌ  
 報告ハ筆記ト口頭トデ行フ別ガアルガ其要領ハ略同ジデアアル其注意スベキ事項ハ左ノ如シ  
 イ、先ヅ誰レカラ出サレタ報告デアアルカヲ明ニスル之レガタメニハ最初ニ例ヘバ「山田斥候報告」、「第二斥候報告」ノ如ク述ベル

ロ、敵ニ關スル報告ハ日時、場所、兵種、員數、動作等ノ順序ニ述ベルコトガ必要デアアル例ヘバ一日午前三時何處デ敵ノ何兵ノ幾何が何々ヲシテ居リシト云フ様ニ述ベル又斥候ノ爾後爲サウトスルコトヲ附ケ加ヘルノガ必要デアアル  
 ハ、總テ報告ハ實際ヲ見タマ、ヲ其儘報告セネバナラヌ戰時ニ於テ若シ僞リノ報告ヲスルト嚴罰ニ處セラレルノミナラズ延テ全軍ノ大ナル不幸ヲヒキオコスコトガアル之レガタメ特ニ明ニ區別スルコト次ノ如シ  
 一、報告者ノ自ラ見タコト  
 二、他人ノ實見シタコト  
 三、他人ノ聞知シタコト（他人ガ更ニ他ノ者カラ聞イタコト）  
 四、報告者ノ推察ニカ、ルコト（其理由ヲ附ケ加ヘルコト）  
 二、行軍間ノ斥候（前衛カラノ斥候）



陣中要務令摘要

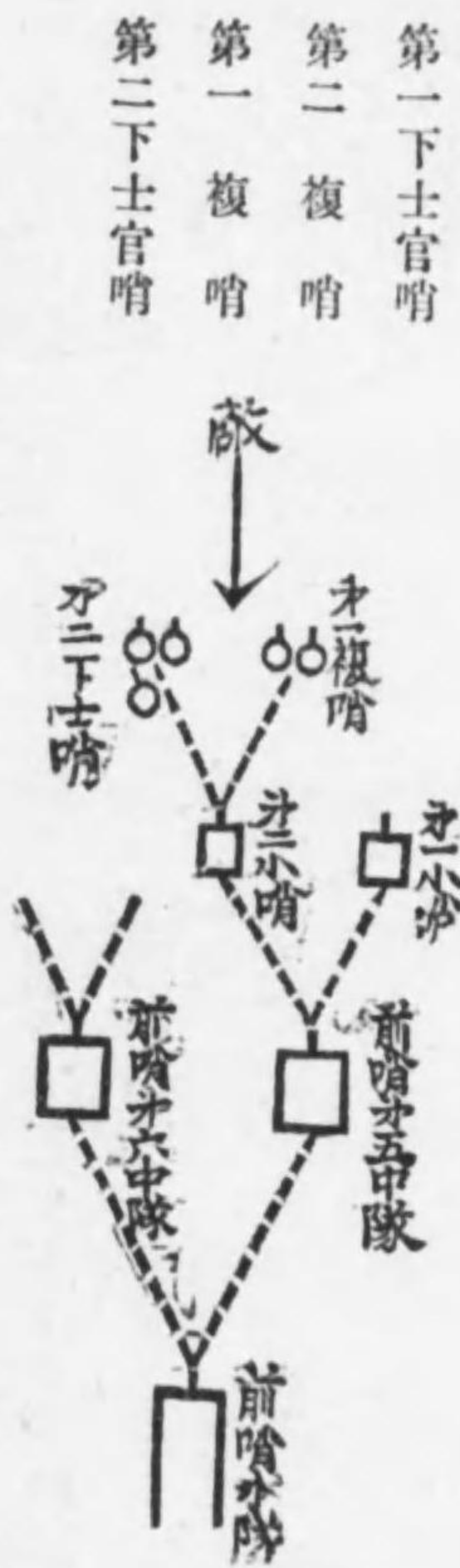
軍隊敵ニ向ヒ行軍スル時ハ前方其他必要ニ應ジ側方、後方等ニ各々警戒ノタメノ部隊即チ前衛、側衛、後衛等ヲ出ス左圖ノ如シ



第九節 歩哨

一、軍隊ガ行軍間警戒ノタメ前方ニ出ス隊ヲ前衛トイヒ夜間駐止間前方ニ出ス警戒隊ヲ前哨トイフ、前衛ハ主ニ斥候ヲ出シ敵ヲ搜索シツ、警戒シ前哨ハ主ニ歩哨ヲ出シテ警戒スルト共ニ斥候ヲ出シテ敵ヲ搜索スルノデアル

前哨ニハ左圖ノ如ク前哨本隊、前哨中隊、小哨ノ諸隊ニ區分サレ小哨カラ歩哨ヲ出ス歩哨ニハ單哨(一人ノ歩哨)、複哨(二人、三人、四人ノ歩哨)ノ區別ガアル



陣中要務令摘要



二、歩哨ノ守則ニハ一般守則ト特別守則トノ二ツガアル一般守則ハ歩哨ガ何レノ場合デモ守ルベキモノ即チ左ノ如シ

イ、監視

1、歩哨ハ絶エズ敵ノ方ヲ見張ル

2、疑ハシイ徴候ニヨク注意スル

ロ、報告

1、敵ニ關シ發見シタ事ハ速ニ歩哨ノ一人ガ小哨長ニ報告スル

2、若シ少シデモ後レルト危険ニ陥ル時ハ急速ナ射撃又ハ信號(タトヘバ烽火)デ警報シ且其一人ハ速ニ小哨ニ到リ報告スル

ハ、徴敵

敵ノ一人ヤ二、三人ノ斥候ハ之ヲ殺スカ又ハ生捕ルガヨイ

ニ、出入者

1、晝間ハ味方ノ將校、部隊、斥候巡察及ビ傳令ニハ歩哨線ノ出

入ヲ許ス其他ノ者ノ出入ニツイテハ小哨長ノ指示ヲ受ケル

2、歩哨ノ命ニ從ハナイ者ガアツタラ之レヲ殺スカ又ハ生捕ニスル

3、自動車ハ停止ヲ命シテ取調ベル

ホ、夜間

1、夜間歩哨ニ近ヅク者ガアツタラ銃ヲ構ヘテ「誰カ」ト問ヒ呼ブコト三回ニ及ンデモ答ヘナイトキハ殺ス他ハ晝間ト同ジ

ヘ、軍使、降人

1、白旗ヲ立テ遠方カラ軍使デアルコトヲ示シテ來ル者又ハ降參人ハ敵トシテ取扱ハズ歩哨線外デ敵方ニ向ケ止メオキ小哨長ニ報告ス但シ敵ニ欺カレナイ様注意ヲ要ス

2、降參人武器ヲ持ツ時ハ之ヲ棄テサセルト、自己ノ注意



- 1、歩哨ハ煙草ヲ吸フテハイカヌ
  - 2、銃ヲ手カラハナサズ又命令ナク坐臥シテハナラヌ
  - 3、晝間ハ立銃、腕ニ銃（銃口ヲ前ニシ脇下ニダク）
  - 4、夜間ハ擔銃、提銃（右手ニ提ゲル）又ハ腕ニ銃ヲスル
  - 5、上官ト問答スル時デモ敵方ヲ向ヒナガラスル
- チ、協同  
 歩哨線ヲ出發スル斥候ニ其任務、經路、歸來ノ時刻、場所等ノ概要ヲ聞キ自己ノ見聞シタ情況ヲ告ゲ又歸來シタ斥候カラ其見聞シタ事ヲ聞ク  
 特別守則トハ其服務スル時ニ特別ニ小哨長カラ授ケラレル必要ナ守則デ其項目次ノ通り  
 イ、自己  
 其歩哨ノ番號

ロ、前方

- 1、敵情及前方ニアル我部隊又ハ斥候ノ情況
- 2、必要ナ道、町村、地物等ノ名
- 3、特ニ監視スベキ要點
- ハ、側方  
 右左隣歩哨ノ位置、番號及之トノ連絡法
- ニ、後方  
 小哨並ニ中隊ノ位置及此ニ通ズル近道
- ホ、敵襲  
 敵襲ニ際シ取ルベキ處置及歩哨ノ人員ニ應ズル監視法

第二章 兵語

第一節 戦闘ニ關スルモノ



兵語ノ必要ナルモノ左ノ如シ

横隊 左右ニ併ンダ隊形  
 縦隊 前後ニ重ナツタ隊形  
 正面 部隊ノ第一列ノ向ツタ面  
 背面 部隊ノ第一列ノ後ノ面  
 側面 部隊ノ側方ノ面  
 右翼 敵ニ對シ部隊ノ右端及之ニ近キ部分  
 左翼 右翼ノ反對  
 先頭 行進方向ニ對シ部隊ノ前  
 後尾 行進方向ニ對シ部隊ノ後  
 端

距離 前後ノ距離  
 間隔 左右ノ隔リ  
 援隊 小隊散兵線ノ後方ニ在ル  
 豫備隊 中隊以上ノ隊ガ展開セ  
 ルトキ其後方ニ在ル密集  
 隊  
 展開 軍隊ニ戰鬪ノ任務ヲ與ヘ  
 縱横ニ配置スルコト  
 散開 密集隊ガ戰鬪行爲ニ移ル  
 爲若干ノ間隔ヲ取り一列  
 ノ横隊隊形トナルコト  
 疎開 敵火ノ下ヲ前進スルトキ

其損害ヲ避クル爲密集部  
 隊カラ疎散ノ隊形ニ開ク  
 コト  
 散兵 散開セル隊ノ一兵  
 戰況 戰ヒノ有様  
 前進 前ニ進ムコト  
 退却 退クコト  
 攻撃 敵ヲ攻ムルコト  
 防禦 敵ヲ防グコト  
 突撃 敵ニ向ヒ銃劍ヲ振ヒ突キ  
 込ムコト  
 襲撃 騎兵ガ刀ヲ振ヒ敵ヲ襲フ  
 コト

追撃 逃ゲル敵ヲ追ヒ撃ツコト  
 逆襲 防戰中敵ガ最近距離ニ來  
 タ時反對ニ突進スルコト  
 敵襲 敵ガ襲ヒ來ルコト  
 夜襲 夜不意ニ襲フコト  
 搜索 敵ノ居ル所ヲ搜ルコト  
 警戒 不意ニ敵ニ襲ハレヌヤウ  
 ニ備テスルコト  
 監視 敵ヲ見張ルコト  
 連絡 味方ト味方ノ間ガ離レテ  
 居テモ互ニ様子ガワカル  
 ヤウニスルコト  
 迂回 遠廻リスルコト



捷路 近カ道  
 掩護 或他隊ヲ安全ナラシムル  
 爲庇フコト  
 占領 軍隊ガ土地ヲ自分ノモノ  
 ニスルコト

脅威 威シ脅ヤカスコト  
 包圍 圍ムコト  
 徵發 命令ノ下ニ物品ヲ地方カ  
 ラ集メルコト

第二節 地形ニ關スルモノ

高地 山  
 巔頂 頂キ  
 山腹 山ノ中腹  
 斜面 高地ノ勾配ヲナセル所  
 麓 山ノ裾  
 鞍部 峠

頂界線(防界線) 斜面ト頂キト  
 ナ界スル線  
 丘阜 小高キ土地(ヲカ)  
 右岸 河ノ流レニ向テ右ノ方  
 左岸 河ノ流レニ向テ左ノ方  
 徒涉場 河ノ中ヲ徒歩テ通レル

所  
 渡船場 船渡シノ所  
 橋梁 橋  
 村落 村ノコト  
 家屋 家  
 獨立家屋 一軒屋  
 集團家屋 數軒一ツ所ニ纏ツタ  
 家屋  
 十字路 道路ノ十字形ヲナセル  
 所  
 丁字路 道路ノ丁字形ヲナセル  
 所  
 三叉路 道路ガ三ツ不正ニ集マ  
 レル所

隘路 兩側ノ通り難キ路即チ水  
 田間ノ道、橋梁道等  
 林縁 森林ノ縁  
 獨立樹 一本松トカ一本杉ノ如  
 キモノ  
 抽出樹 他ノ樹木ヨリ目立チテ  
 高ク抽キ出タ木  
 水田 水ノアル田  
 乾田 水ノナキ田  
 蔭蔽地 森林ヤ村落等ニテ見通  
 シ出來ヌ土地  
 開豁地 遠ク見通シノ出來ル土  
 地  
 前岸 向フ岸  
 後岸 我方ノ岸



### 第三節 方位ノ判定

- 一、磁針ニヨル法
- 二、太陽ト時計トニヨル法  
 小桿ヲ時計ノ軸上ニ立テ短針ト十二時トノ成ス角ヲ二等分スル如ク  
 時計ヲ回ハシテ影ヲ導クトキハ十二時ノアル方ハ北ナリ
- 三、北斗星ニヨル法  
 北斗星ハ常ニ北方ニ在リ



### 第三章 宿營

#### 第一節

- 一、宿營ハ舍營、露營、村落露營ノ三ツニ分タレテアル
- 二、舍營トハ、人家内ニ宿泊休憩スルモノデ休養上最モ便利ナル方法ナリ
- 三、露營トハ、天幕ニ用ヒ又ハ森林等ヲ利用シテ露天ニ宿ルモノヲ云フ
- 四、村落露營トハ一部ハ露營シ一部ハ舍營スルヲ謂ヒ敵ニ關スル顧慮又ハ人家少キ爲全隊舍營シ能ハザルトキニ行フモノデアアル
- 五、舍營ニ於ケル注意左ノ如シ
  - イ、武器、被服、裝具、馬具ノ手入ヲ爲シ常ニ一ツ所ニ整備シ置クベシ



- ロ、衛生上ノ注意殊ニ馬ノ手入ヲ充分ニ爲スコト
- ハ、舍主ニハ溫和ヲ旨トシ家人ヲ使役スルコトナカレ
- ニ、翌日ノ集合時刻及場所ヲ承知シ置クベシ
- 六、緊急舍營トハ、警備上必要アルトキ行フモノデ勉メテ中隊若クハ小隊毎ニ一家屋ニ舍營シ服装ヲ整へ武器、装具ヲ身邊ニ置キ眠臥シ窓戸ヲ開キ各家屋ニ少クモ兵一名點燈シテ警戒シ馬匹モ亦之ニ準ジ直チニ乗馬シ得ル如ク準備シ置クモノデアル
- 七、警報ノ種類、非常警報、飛行機警報及瓦斯警報ノ三アリ、號音或ハ信號ヲ以テス
- 八、非常警報ノトキノ動作左ノ如シ
  - イ、舍營ハ武装ヲ整備シ先ヅ小隊(分隊)毎ニ集合シ後馬繫場ニ至ル
  - ロ、露營ハ武装ヲ整へ乗馬シテ中隊ノ集合場ニ至ル
- 九、飛行機警報アルトキハ、特別任務アルモノ、外ハ直ニ所在ノ掩蔽

- 物ヲ利用シ、夜間ハ特ニ火光ニ注意シ上空ニ對シ遮蔽ス
- 一〇、瓦斯警報アルトキハ、防毒面ヲ裝シ別命アル迄之ヲ繼續ス
- 一一、敵兵舍營地内ニ急襲シ來ルトキハ所屬部隊ニ合スル能ハザル者ハ其位置ニ於テ協力シテ敵ニ當ルベシ
- 一二、舍營衛兵ノ任務ハ、敵及住民ニ對スル舍營區ノ直接警戒、隣接宿營地トノ連絡、居民ノ行動ノ監視、舍營區内ノ安寧秩序ノ維持ニ任ズ

### 第二節 行李

- 一、大行李ハ軍隊宿營間必要ノ物品即チ炊具、糧秣、豫備被服、將校行李、公用行李等ヲ駄載シタル車輛若クハ駄馬ヨリ成ルモノデアル

### 第三節 給養



- 一、携帶口糧ハ軍隊屯營ヲ出發スルトキヨリ各自ガ携帶スル所ノ豫備糧秣ヲ終始必ズ携帶スルモノデアル、而シテ此携帶口糧ハ非常ノ場合ト全ク他ニ給養ノ方法ナク已ムヲ得ザルトキノミ上官ヨリ命令アリタル上ニテ之ヲ用フ
- 二、携帶口糧ハ次ノ如ク二日分ヲ携帶ス
  - イ、精米及副食物若干一日分
  - ロ、乾麵包及副食物若干一日分
- 三、携帶口糧ハ之ヲ背囊若シクハ鞍囊ニ收容ス、若シ背負袋ヲ用フルトキハ之ニ入ル

第四節 衛生勤務

- 一、各人ハ總テ其上衣ノ左裾裏ニ繻帶包ヲ納ル、モノトス
- 二、各中隊ノ兵中擔架術ノ教育ヲ受ケタル者ハ戦闘間中隊ノ列中ニ在

- リト雖假繻帶所ヲ開設スルトキハ補助擔架兵ヲ命ゼラル、モノトス
- 三、補助擔架兵ハ其銃ト背囊トヲ隊繻帶所ニ置キ白布ヲ右ノ上膊ニ縛シ擔架及繻帶囊ヲ携ヘ戦線ニ前進シ傷者ノ救急及運搬ニ従事ス
- 四、隊繻帶所及繻帶所ハ赤十字ノ標旗ト國旗トヲ併セ立テ其位置ヲ標ス、夜間ハ更ニ赤色ノ燈ヲ掲グ
- 五、戦線ニ於テ戦友負傷スルトキ殊ニ衛生人員其地ニ在ラザルトキ趨テ之ヲ救助セントスルハ人情ナリ、然レドモ斯ノ如キハ戦闘線ヲ薄弱ナラシメ危殆ヲ招クコトアリ、故ニ列中ニ在ル兵ハ將校ノ命令ニアラザレバ傷者ヲ送ルベカラズ、又命令ヲ受ケ之ヲ送り届ケタルトキハ直ニ戦線ニ歸リ其命ヲ受ケタル上官ニ報告スベシ
- 六、輕傷者ハ附近ニ在ル將校ノ許可ヲ受ケテ其彈藥ヲ戦友ニ交付シ銃ヲ携ヘテ單獨ニ退クベシ
- 七、白地ニ赤十字ヲ畫ケルモノハ中立ノ徽章デアアル



第五節 鐵道輸送

- 一、無蓋貨車ニハ通常一輛半分有蓋貨車ニハ馬六頭ヲ積載シ人員ハ客車又ハ有蓋貨車(已ムヲ得ザレバ無蓋貨車)ニ乗ルモノデア
- 二、運行中下士官兵ノ守ルベキ件左ノ如シ
  - イ、濫ニ其位置ヲ離レザルコト
  - ロ、車輛ノ扉或ハ側板上ニ踞セザルコト
  - ハ、車窓ノ外ニ赤旗或ハ赤物ヲ出シ又ハ手腕ヲ振ル様ナ動作ヲ爲サザルコト
- 三、馬及材料ニハ看守兵ヲ附ケル、此ノ看守兵ハ喫煙又ハ擅ニ點火シ或ハ側板ニ腰ヲ掛ケテハナラン
- 四、材料看守ノ兵ノ任務
  - イ、汽罐車カラ火粉ノ落チテ來ルトキハ直ニ之ヲ消スコト

五、馬看守兵ノ任務

- ロ、車ノ震動ニ依リ索繩、枕木等ノ緩マナイ様ニ注意スル
- イ、汽笛ノ聲又ハ他ノ列車ト行遇フトキ及發車並停止等ニ方ツテハ溫聲ヲ以テ馬ヲ慰撫シ沈聲セシムルコト
- ロ、初ハ兩側入口ノ戸ヲ鎖シ馬ガ稍と沈靜スルニ至レバ徐ロニ一方ノ戸ヲ僅カニ開ク
- ハ、運行中ハ時々馬ニ干草ヲ與ヘ停車ノトキ其量ヲ報告スル

第六節 船舶輸送

- 一、船舶ニ積載スルニハ棧橋ナキトキハ人馬材料ヲハシケニテ本船ニ輸送シ材料ハ結束シ馬ハ頭絡ヲ裝シ起重機ヲ以テ本船ニ移スモノトス
- 二、船内ノ禁令左ノ如シ



イ、「マツチ」等ノ如キ發火シ易イ物ヲ持ツテハナラヌ  
 ロ、喫煙、飲食、洗面等ハ所定場所及規定ノ時間外ニ於テシテハナ  
 ラン、又船室船内ヲ汚スベカラズ  
 ハ、清水ヲ濫用セザルコト  
 ニ、機關室、庖厨、舵室ニ入り羅針盤ノ周圍及階梯ノ近傍及船員ノ  
 妨ゲトナル場所ニ立寄ラザルコト  
 ホ、私ニ燈火ヲ點シ又ハ所定ノ燈火ヲ他ニ持チ行カヌコト

第七節 陸戰條規ノ摘要

一、本條規ハ戰爭ノ作法ヲ明治三十二年(西曆千八百九十九年)海牙ニ  
 開カレタ萬國平和會議デ議決サレタモノデ、其條規中兵ニ必要ノコ  
 トヲ舉グレバ左ノ如クデアル  
 イ、負傷セル敵、兵器ヲ棄テ、降伏シタ敵、敵ノ患者ヲ捕ヘタ時ハ

之ニ危害ヲ與フルコトナク直ニ上官ニ差出サネバナラヌ  
 俘虜ニ對シテハ侮辱ヲ加フルコトナク相當ノ禮儀ヲ以テ待遇シ  
 武士ノ情ヲ施サネバナラヌ  
 ハ、俘虜ガ暴力ヲ以テ抵抗シ或ハ逃走ヲ企テ他ニ防止ノ手段ナキト  
 キハ之ヲ射擊シテ差間ガナイ  
 ニ、俘虜ガ訊問ノ際其氏名階級ヲ偽リ兵ト答ヘタナレバ縱令將校タ  
 ルコト疑ヒナキ場合デモ兵トシテ待遇シテ差間ナイ  
 ホ、敵ノ死者ヲ侮辱シテハナラヌ、尙ホ認識票、貴重品、金錢、證  
 券書狀等ガアレバ之ヲ收メ直ニ上官ニ差出サネバナラヌ  
 ヘ、敵國人民ニ對スル處置  
 危害ヲ加ヘテハナラヌ侮辱シテハナラヌ、私有物ヲ奪フテハナラ  
 ヌ、命令ナクシテ居家ニ入ツテハナラヌ、生業若ハ交通ノ自由ヲ  
 妨ゲテハナラヌ



ト、間諜ノ疑アル者ハ捕ヘテ上官ニ差出サネバナラヌ  
チ、敵地ニアル神社、佛閣、學校、病院等公共ノ學術、美術或ハ歴  
史上ノ建物及財産ハ戰鬪上已ムヲ得ヌ時ノ外決シテ毀損シテハナ  
ラヌ

リ、軍使、軍旗、國旗、軍用ノ標章、敵兵ノ制服、赤十字記章等ハ  
濫リニ使用シテハナラヌ  
ヌ、休戦中ハ敵ニ危害ヲ與ヘテハナラヌ、但シ油斷スルコトナク何  
時開戦ノ命アルモ差閫ナキ様用意シアルコトハ肝要デアアル

#### 第四章 天幕使用法

一、天幕ヲ使用スルニ就テノ一般ノ注意ハ次ノ通りデアアル  
イ、一人用ノ幕舎ハ天幕一枚で良イケレドモ二人用以上デハ其收容  
スル人員ニ應ジテ夫レ々天幕ヲ數枚ニ組ミ合セテ使用スルモノ

デアアル

幕布ヲ接ギ合ハセルニハ幕布ノ縁紐ノアル一邊ト他ノ幕布ノ鳩目  
ノアル一邊トヲ合セテ各コノ縁紐ヲ順々ニ鳩目ニ通シテ接ギ合ハ  
セ支柱ヲ柱トシ地中ニ打チ込ダ控杭又ハ附近ノ地物ニ張綱ヲ以  
テ結著スルノデアアル

ロ、幕舎ノ入口ハ風ト反對ノ方向ニ向ケテ建設スル

ハ、幕布ヲ接ギ合ハセル時ニ接ギ目カラ雨風ノ這入ラヌ様ニ天井ノ  
天幕ハ兩壁ノ天幕ノ上側ニ風ノ來ル方向ノ天幕ハ反對ノ方向ノ天  
幕ノ上ニ接ギ合ハセル

ニ、幕舎ノ内デ火ヲ焚ク場合ニハ天井ノ中央ニ煙出口ヲ開クガヨイ  
通氣ガ十分出來ナイノニ火ヲ焚ク時ハ炭酸瓦斯ニ冒サレルコトガ  
アルカラ特ニ注意シナケレバナラヌ

ホ、控杭ヲ支持スル力ノ弱イ時ハ其上ニ石塊カ或ハ土ヲ載セテ其力



ヲ増スヤウニスルガヨイ  
へ、風ノ強イ時ハ風ノ吹イテ來ル方向へ幕舎カラ張綱ヲスル  
ト、張綱ヲ交通ヲ妨ゲヌ様ニシ又夜間ハ張綱ニツマヅクコトガアル  
カラ之ヲ防グタメ紙片、白布片等ヲ綱ニ結び付ケル  
チ、控杭ハ張綱又ハ縁紐ト直角ニナル様ニ地中ニ打込ムト支持スル  
力ガ強クテ確實デアアル  
リ、幕舎ノ内ニ風ノ透入スル時ハ周圍ニ木葉、草等ヲ多ク積ミ又ハ  
土ヲ以テ堤ヲ造ル  
ヌ、雨天ノ場合ハ周圍ニ溝ヲ掘リ低イ土地ノ方向ニ雨水ヲ流ス工夫  
ヲスル  
ル、晝間風ノナイ時ハ縁紐ヲ延シテ杭ヲ打チ幕舎ノ内ノ換氣ヲ圖ル  
チ、天幕材料等ハ燃燒シ易イカラ火氣ニ對シテハ十分ニ注意スルガ  
ヨイ

ワ、凡テ作業ハ靜肅ニシテ且ツ迅速ニスベキデアアル  
カ、支柱ノ下端ヲ地中ニ埋没セヌヤウニ其ノ基部ニ木片若クハ石塊  
ヲ置ク

二、一人用幕舎ノ構造法

一、幕布デ一人用ノ幕舎ヲ造ルニハ幕ノ對角ニ筒所ヲ控杭デ固定シ其  
一隅ヲ揚ゲ樹幹等デ結束スルモノデアアル(第一圖)

三、二人用幕舎ノ構造法

第二圖ノ通りニスルモノデアアル、但支柱控杭ニハ應用材料ヲ用ヒル  
モノデアアル

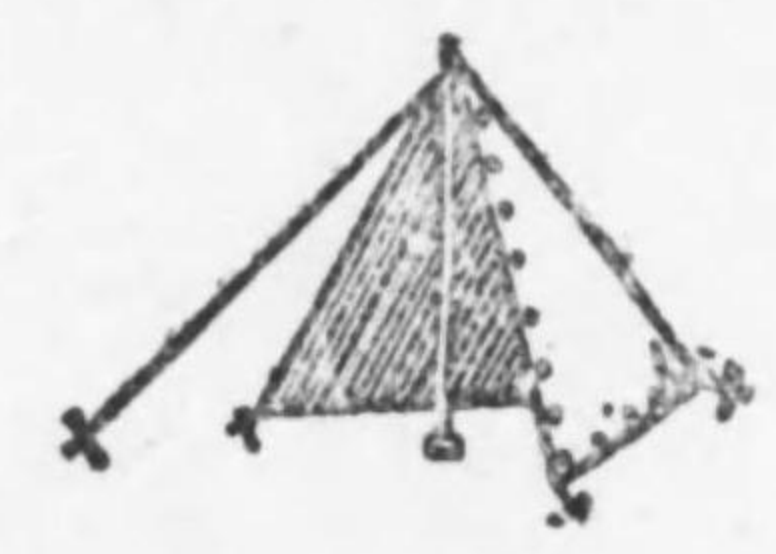
四、三人用幕舎ノ構造法

三幕布デ三人用ノ幕舎ヲ造ルニハ第三圖ノ様ニスルガヨイ、但イ部  
ハ成ルベク銳角トシテ風ノ來ル方ニ對向サセルモノデアアル

五、四人用幕舎ノ構造法



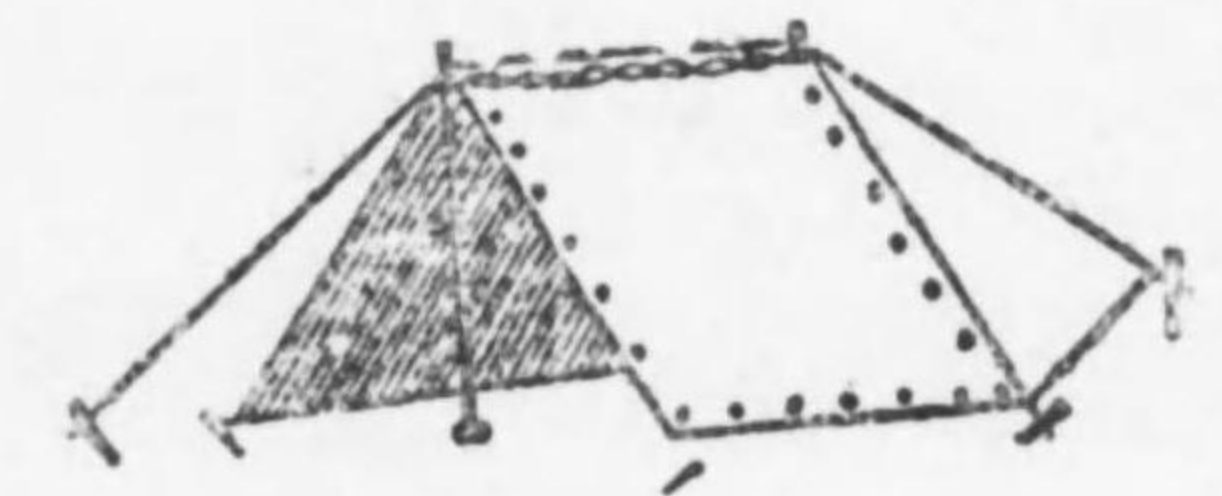
圖一第



一人幕舍

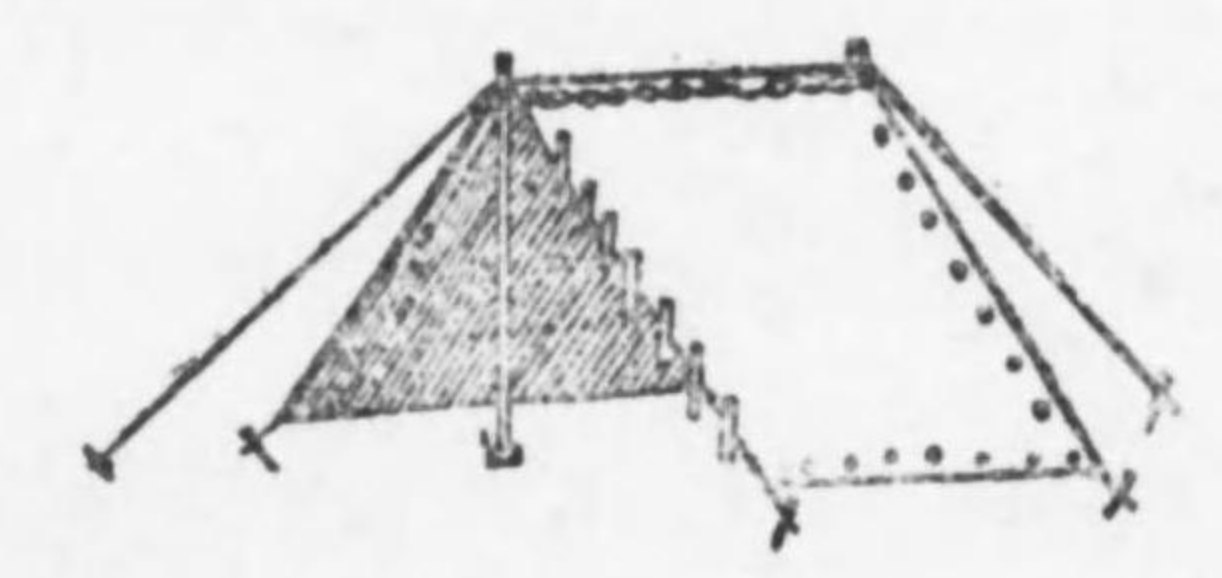
二人幕舍

圖二第

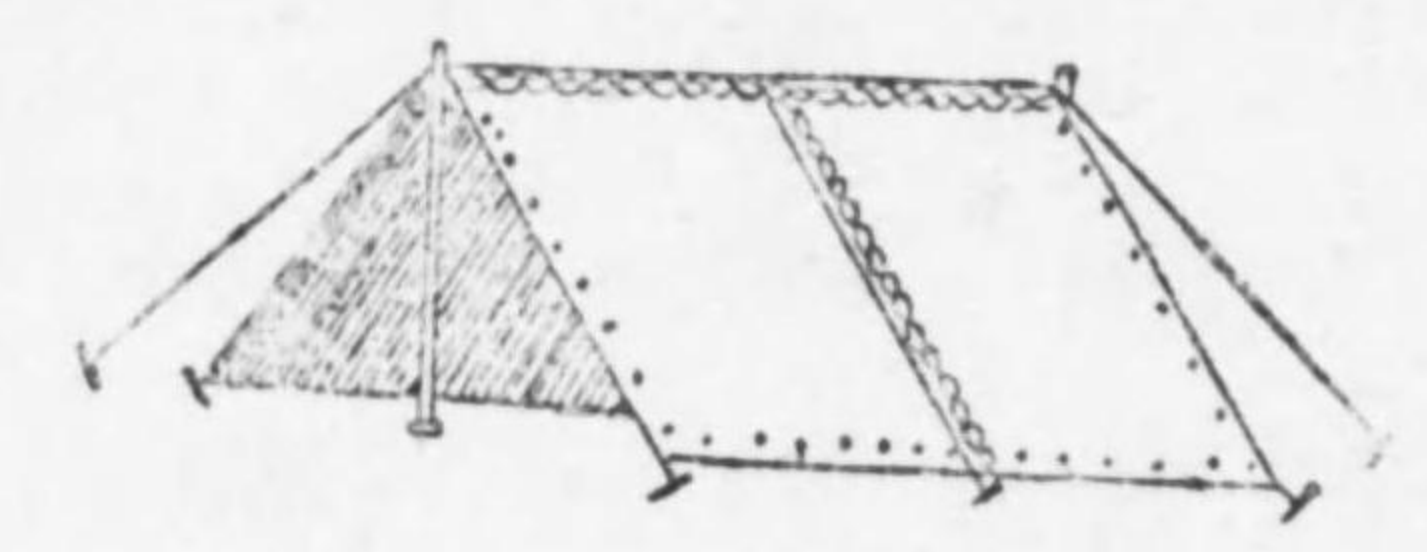


三人幕舍

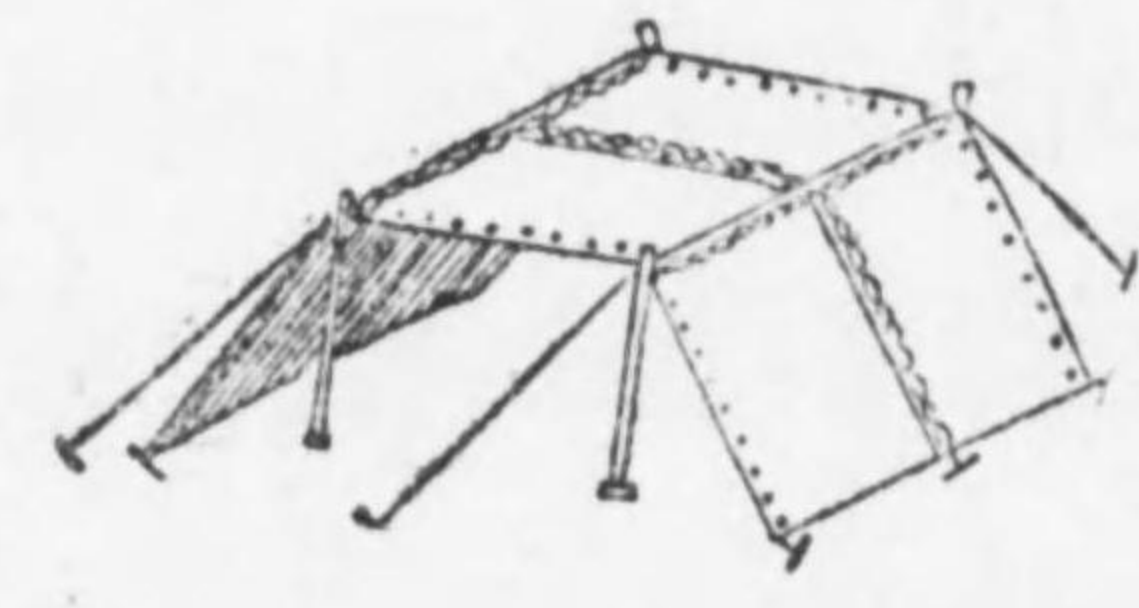
圖三第



圖四第

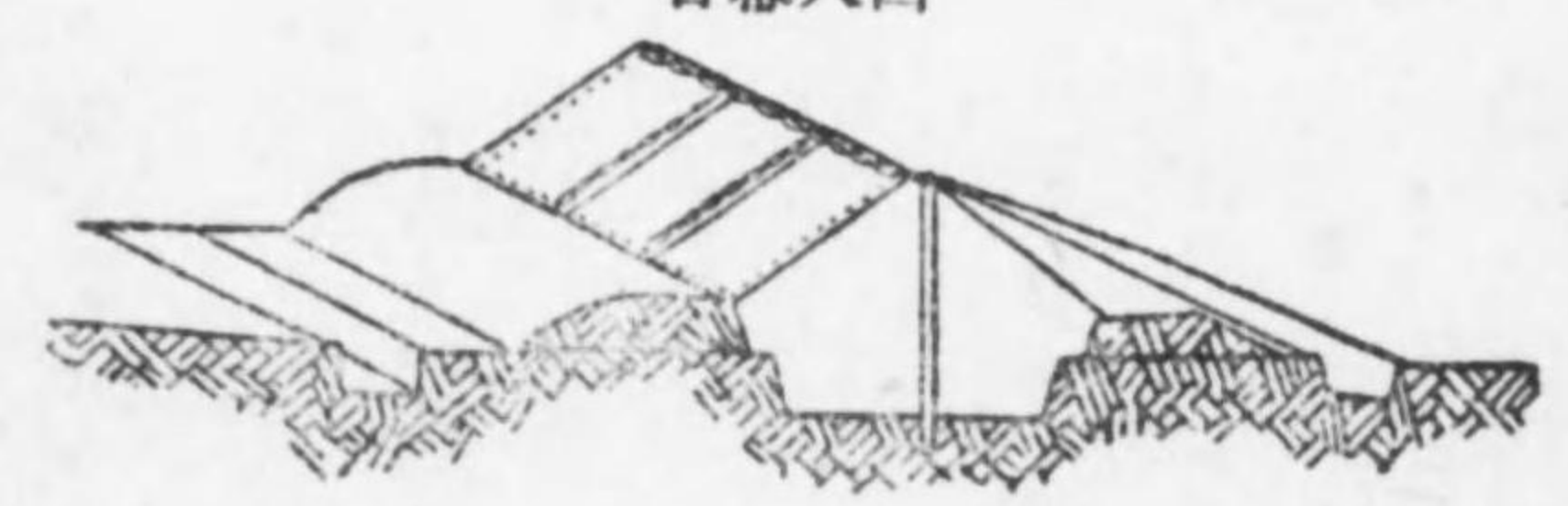


圖五第



圖六第

舍幕人四





第四圖ノ通りニスルモノデアル、此ノ構造ハ夏季炎暑ノ際ニ用ヒル  
ノガ有利デアル

六、六人用幕舎ノ構造法

第六圖ハ六人用幕舎ノ構造デアツテ六枚ノ天幕ヲ接ギ合セ之レヲ以  
テ二個ノ傾斜シタ庇蓋ヲ成形スル、幕舎ノ一側ニハ階段ヲツケタ出  
入口ヲ設ケテ其反對ノ側ハ藁、草等デフサグ

第五章 飯盒炊爨法

軍隊デハ必要ノ場合兵ノ背囊ニ附著シテ携行スル「飯盒」ヲ用ヒテ野外  
炊事ヲスル、飯盒ハ蓋、掛子、體ノ三部カラ成ル、蓋ハ元來ノ蓋ニ使用  
スル外、湯、汁等ヲ入レル用ヲナシ、掛子ハ副食物ヲ入レル外、米、  
麥ノ分量ヲ量リ、又副食物ヲ煮ルニ用ヒル、之ニ一杯入レ、バ二合デ  
アル、體ハ飯ヲ入レ又飯其他ノ食品ヲ炊クニ用ヒル、體ノ内側面ニハ  
二條ノ線ガ刻ンデアル、之ヲ水量線ト云ヒ下方ノモノハ二合、上方ノ  
モノハ四合ノ飯ヲ炊クトキニ必要ナ水量ヲ示スモノデアル  
炊事ヲナスニハ通常二人共同シ一個ノ飯盒デ四合ノ飯ヲ炊キ他ノ一個  
ノ飯盒デ副食物ヲ煮テ二人ノ一食分ノ飯ト副食物トヲ作ル（兵一人一  
食二合ヲ定規ノ分量トスル）

第六章 陸軍演習令摘要

第一節 演習ノ種類

- 一、諸兵連合演習 諸兵ヲ連合シ諸兵種協同ノ戰鬪諸原則ヲ演練ス
- 二、師團秋季演習 師團ノ隸下軍隊ヲ適宜編合區分シ對抗又ハ假設敵  
ニ對スル演習ヲ行ハシメ且假設敵ニ對スル師團ノ演習ヲ行ヒ以テ軍  
隊年度教育ノ完成ヲ期スルモノナリ
- 三、師團對抗演習 二個ノ師團及其他ノ部隊ヲ適宜ニ區分編組シテ相



對抗セシムル演習ナリ

- 四、特別大演習 天皇親ラ之ヲ統監シ二個以上ノ師團及其他ノ部隊ヲ適宜ニ區分編組シテ相對抗セシムル演習ナリ
- 五、各兵特別演習 特別騎兵演習、特別砲兵演習、特別工兵演習、特別航空兵演習、特別輜重兵演習ヲ總稱ス
- 六、特種演習 特別陣地攻防演習、衛生隊演習ヲ總稱ス

第二節 演習指導上ノ信號

- 一、信號ニハ號音ト煙火トヲ併用シ又單ニ號音ノミヲ用フルコトアリ
- 二、號音及煙火ノ信號左ノ如シ
  - イ、演習中止、「氣ヲ著ケ」止レ」號音
  - 車色風船ニ赤色旗ヲ吊下ス(夜間ハ赤色ノ連光ヲ發ス)ル煙火信號
  - ロ、休憩演習中止後「休メ」號音

八、演習再興「氣ヲ著ケ」前へ」號音

青色風船ニ青色旗ヲ吊下ス(夜間ハ青色ノ連光ヲ發ス)煙火信號

ニ、解散「解レ」號音

三、演習中止ニ對スル動作左ノ如シ

演習中止ノ信號アルトキハ演習部隊ハ單獨ノ斥候及散兵等ニ至ル迄現在ノ姿勢ト隊形トヲ變更スルコトナク嚴ニ其位置ニ停止ス可シ、而シテ別命ナクシテ其儘休憩スルコトヲ得但シ水中ニ停止スル等衛生上有害ノ状態ニ在ル者若ハ道路上ニ停止スル等一般交通ヲ妨碍スルモノニ限リ戰術上差支ナキ範圍内ニ於テ若干其位置ヲ變更スルコトヲ得、此ノ場合ニ在リテハ之ヲ附近ノ審判官ニ届出スルヲ要ス

四、休憩信號 休憩ノ信號アルトキハ徒歩兵ハ又銃シ乘馬兵ハ下馬シ其位置ニ在リテ休憩スルモノトス、而シテ散兵ニ在リテハ分隊毎ニ併合スルコトヲ得



第三節 禁制及注意

- 一、變裝シテ敵線内ニ潜入シ或ハ地方吏民ニ就テ敵情ヲ探知スルコトヲ禁ズ
- 二、空包發火上ノ注意左ノ如シ
  - イ、空包發火ヲ爲スニ方リテハ左ノ諸件ヲ嚴守スベシ
    - 敵ヲ距ルコト小銃ハ五十米、輕機關銃、機關銃ハ百米、火炮（歩兵砲ヲ含ムハ二百米以内ニ於テ發火スベカラズ）
    - ロ、航空機ヲ距ルコト小銃ハ百米、輕機關銃、機關銃ハ二百米、火炮（歩兵砲ヲ含ム）ハ三百米以内ニ於テ發火スベカラズ
    - ハ、前二項以内ノ距離ニ於テ射撃スルトキハ單ニ其動作ノミニ止メ空包ヲ用フベカラズ、但シ小銃、輕機關銃、機關銃ニ在リテハ警報ノ爲又ハ夜間等ニシテ止ムヲ得ズ規定以内ニ於テ發火セントス

ルトキハ十分銃口ヲ天空ニ向ケ發射スルモノトス、之ガ爲輕機關銃、機關銃ニ在リテハ要スレバ三十度以上ノ射角ヲ採リ得ル如ク所要ノ設備ヲ爲スモノトス

- 三、突撃又ハ襲撃ハ、兩軍二十米以内ニ近接スルヲ禁ズ、但シ堅固ナル陣地ノ攻防等特種ノ演習ニ限リ統監ノ規定ニ依リ此距離以内ニ近接セシムルコトアリ、而シテ此制限距離ニ接近シ審判官其場ニアラザルトキ兩軍ハ停止シ近傍ニ在ル審判官ニ届告シ其判決ヲ待ツベシ審判ヲ待タンガ爲戰鬪ヲ中止セル部隊ニ對シ突撃又ハ襲撃ヲ行フベカラズ
- 四、夜間對抗演習ヲ行フニ方リ特ニ規定セル場合ノ外著（起）劍ヲ禁ズ
- 五、前三項ノ外危害ヲ豫防スル爲左ノ諸件ヲ遵守スベシ
  - イ、航空機及航空用建築物ヲ距ル百米以内其他總テ火災ノ虞アル場所附近ニ於テ設備シタルトキノ外發火若ハ喫咽スベカラズ



- 五、飛行場及氣球陣地ニハ危險區域ヲ定メ統監部職員及航空關係者以外ノモノハ妄ニ其區域内ニ入ルベカラズ
- ハ、飛行實施中ハ何人ト雖警戒係ノ許可ナクシテ飛行場ヲ横斷スベカラズ
- ニ、飛行機ニ對スル照明ハ一度敵機ヲ發見シタル後ハ連續追究照明スベガラズ
- ホ、移動式無線電信所開設中ハ通信所ニ必要アルモノノ外其附近ニ接近スベカラズ
- 六、飛行機不時著陸 不時ニ著陸セントスル狀態ヲ示シタル場合ハ其近傍ニ在ル軍隊ハ爲シ得ル限り著陸ノ爲空地ヲ設クルニ勉ムベシ、之ガ爲軍隊若シ著陸ニ適スル土地ニ位置スル場合ニハ速カニ退避スルカ最寄ノ地物(樹木、家屋、堤防、籬牆等)ニ近接スベシ、特ニ著陸方向ニ位置セザル如ク注意スルヲ要ス、若シ之ヲ避クルニ違ナキ

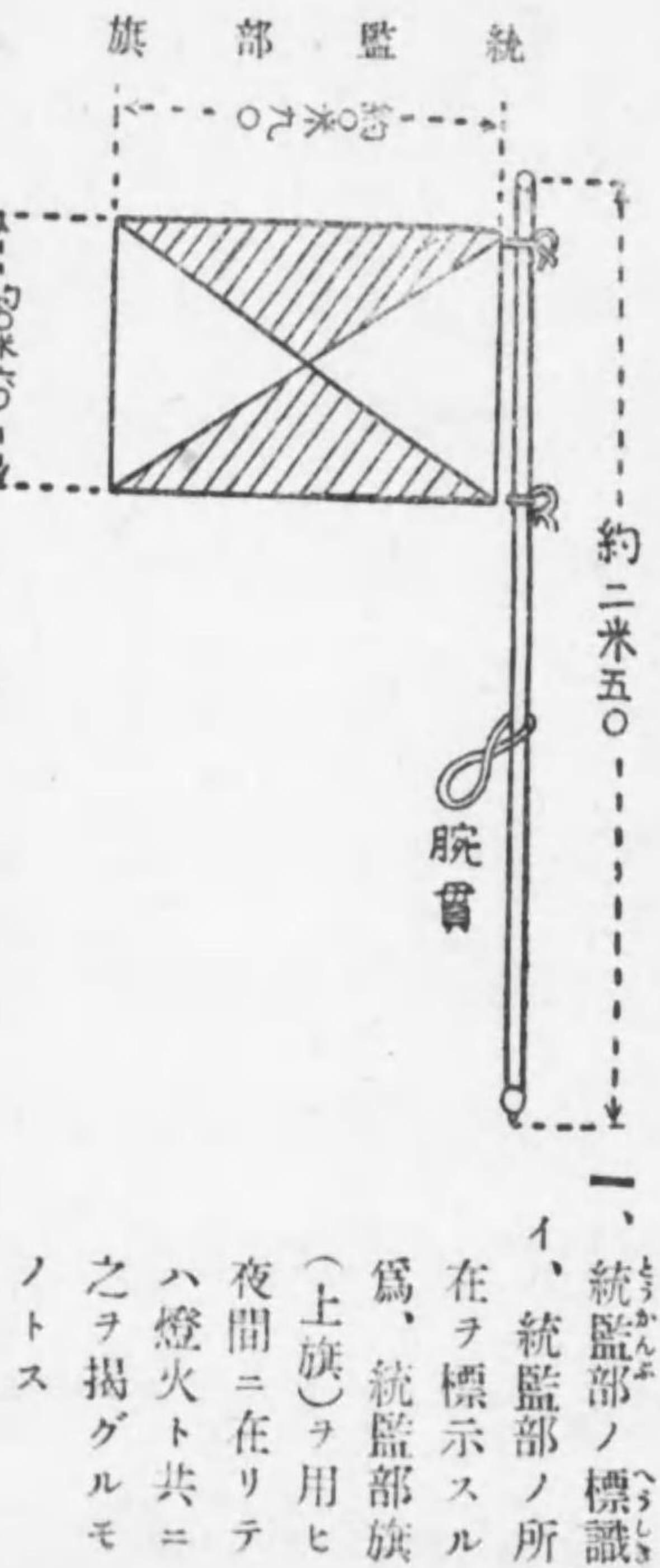
- トキカ或ハ空地ヲ設クルノ餘地ナキトキハ直チニ伏臥シ混亂四散スルガ如キコトナキヲ要ス
- 飛行機著陸ハ概ネ左ノ飛行狀態ニ依リテ之ヲ豫知スルコトヲ得ベシ
- イ、發動機ノ爆音不規則ナルトキ又ハ全ク停止スルトキ
- ロ、螺旋機緩除ニ回轉スルトキ又ハ止マルトキ
- 若シ疑シキ場合ニハ著陸ト看做シテ處置スベシ
- 著陸後飛行機ガ全然停止スル迄ハ其近傍ニ立寄ルベカラズ
- 七、社寺及墓地ノ境域ハ之ヲ尊重シ又苗圃砂防工事、植林セル稚樹及果樹園等ハ特ニ之ガ保護ニ注意スベシ、又道路、橋梁、建築物、堤防、牆壁等ノ破壊及貴重ナル樹木ノ伐截、牆壁ノ改造等ハ之ヲ實施スルヲ禁ズ
- 八、鐵道線路、鐵道線路ハ踏切以外ニ於テ之ヲ横斷シ又ハ線路上ヲ通行スルコトヲ禁ズ



- 九、鐵道沿線ト手旗トニ就テ、鐵道沿線殊ニ停車場附近ニ於テ假設旗手旗及小笛等ヲ使用スル場合ニ在リテハ之ガ爲鐵道業務ヲ防碍セザルコトニ注意スベシ
- 一〇、軍用諸材料ニ對スル取扱、凡テ軍用諸材料ハ敵軍ニ屬スルト雖其破壊ヲ實施スルヲ禁ズ
- 一一、捕獲、敵兵ヲ捕獲シ命令、通報、報告等ヲ略取シ又ハ馬具器材ヲ奪取スルヲ禁ズ
- 一二、地方交通機關ノ利用ニ就テ、特ニ統監(特別大演習ニ在テハ參謀總長)ヨリ許可セラレタルトキニ在ラザレバ鐵道、船舶、地方ノ自動車、自轉車其他ノ運搬具及在來ノ電信、電話等ヲ作戰上ノ目的ノ爲ニ使用スルヲ禁ズ、又統監部用及在來ノ各種電線路ニ演習部隊ノ電線ヲ添架スルコトヲ禁ズ
- 一三、癡馬ニ對スル處置、演習ニ出場スル馬匹中咬癡馬ハ繫ニ、癡

蹠馬ハ尾毛ニ白布ヲ結著スルモノトス

第四節 標識



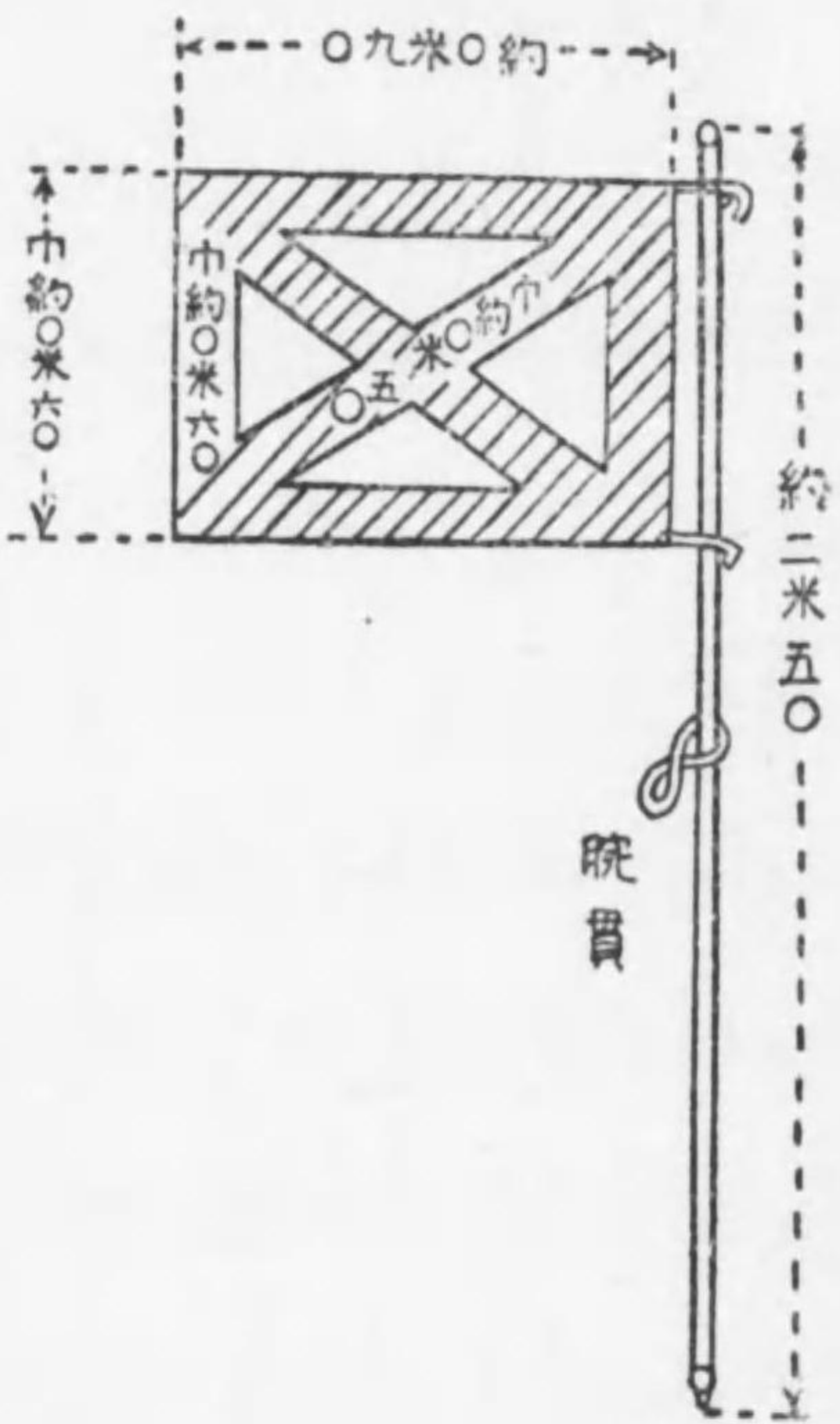
備考 地質ハ白色布ニシテ暈滯ヲ施セル部分ハ赤色トス

陣中要務令摘要



- ロ、統監部員、統監部ニ屬スルモノハ幅約十糎ノ白布ヲ左腕ニ纏フ但シ雨覆ヲ著シタルトキハ幅約十糎長サ約二十糎ノ白布ヲ其外面左腕相當部ニ附スルモノトス
- ハ、戰場審判官旗、高級戰場審判官ノ位置又ハ宿舍ヲ標示スル爲戰場審判官旗(左旗)ヲ用ヒ夜間ニ在リテハ燈火ト共ニ之ヲ掲グルモノトス
- ニ、統監部用通信所、統監部用通信所ニハ白地ニ赤色ノ日ノ符號ヲ畫セル標旗ヲ植立シ、夜間ハ適宜ノ燈火ヲ併用ス
- 二、中立者及陪觀者ノ標識、中立者ハ黃色陪觀者ハ赤色ノ幅約十糎ノ布片ヲ左腕ニ纏フ、但シ雨覆ヲ著シタルトキハ幅約十糎長サ約二十糎ノ同色布ヲ其外面左腕相當部ニ附スルモノトス
- 三、兩軍及戰鬪外部隊ノ識別竝假設部隊ニ關スル標識
- イ、兩軍ノ標識、演習ニ際シテハ一方軍ハ白帶ヲ以テ帽ノ鉢卷ヲ覆

戰場審判官旗



備考

- 一、地質ハ白色布ニシテ暈滲ヲ施セル部分ハ赤色トス
- 二、戰場審判官ヲ數班ニ分チタルトキハ約二十糎平方ノ白色布片ノ中央ニ亞刺比亞數字ニテ班ノ番號ヲ赤書シタルモノヲ旗竿ニ近キ旗ノ下隅兩面ニ縫著ス

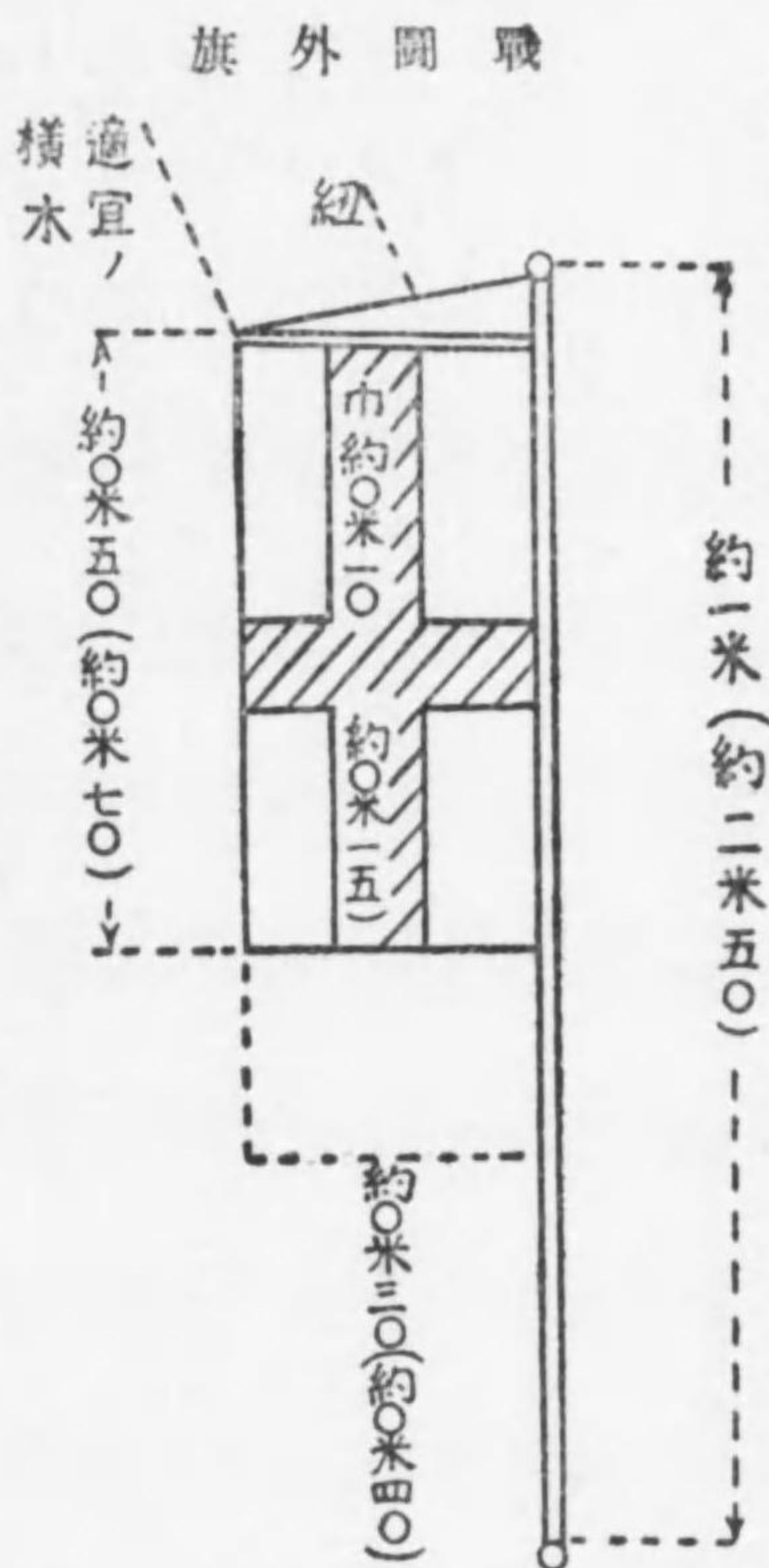
陣中要務令摘要



陣中要務令摘要

四六〇

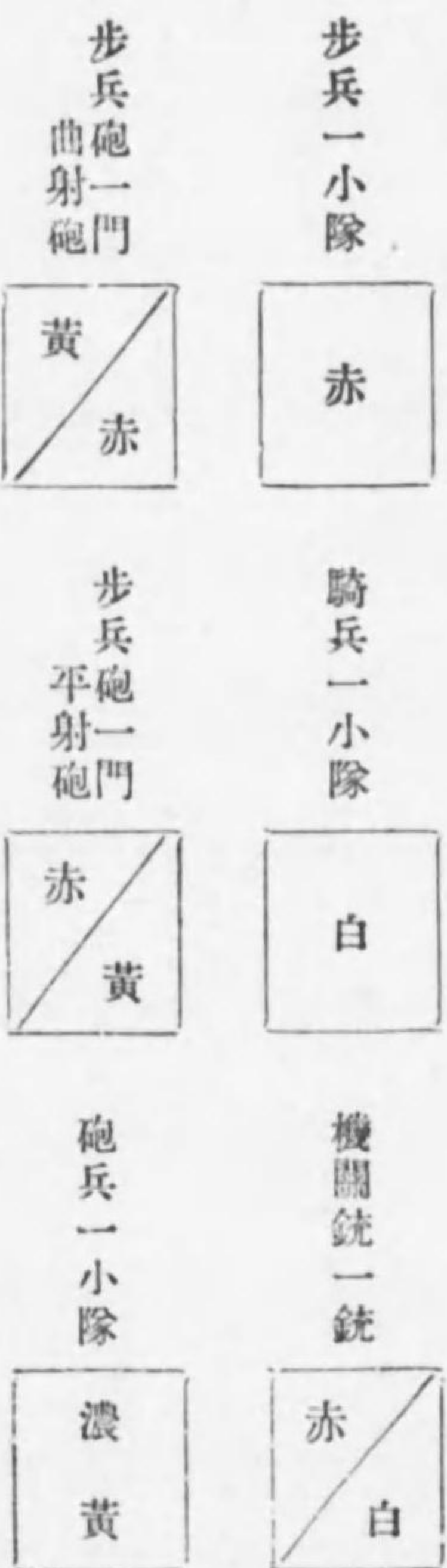
フモノトス、演習ニ出場スル將校以下ハ白帶ヲ携行スルモノトス  
 口、戰鬪外旗、審判官ヨリ戰鬪外ヲ命ゼラレタル部隊ハ直ニ其場ニ



- 備考
- 一、地質ニハ白色布トス
  - 二、暈滯ヲ施セル部分ハ黑色トス
  - 三、括弧内ハ砲兵隊用ノモノヲ示ス

於テ低キ姿勢ヲ探リ(乗馬シアルトキハ下馬スルノミ)戰鬪外旗ヲ植立ス

ハ、假設部隊標識、假設部隊ヲ標示スル爲ニハ標旗ヲ用フ、此標旗ハ約六十糎平方ノ布片ヲ長サ約二米ノ桿ニ附著スルモノニツテ布片ハ左ノ色別ヲ以テ兵種ヲ標示スルモノトス



砲兵段列ヲ假設スルニハ左記ニ示セル標旗ヲ用フ

陣中要務令摘要

四六一







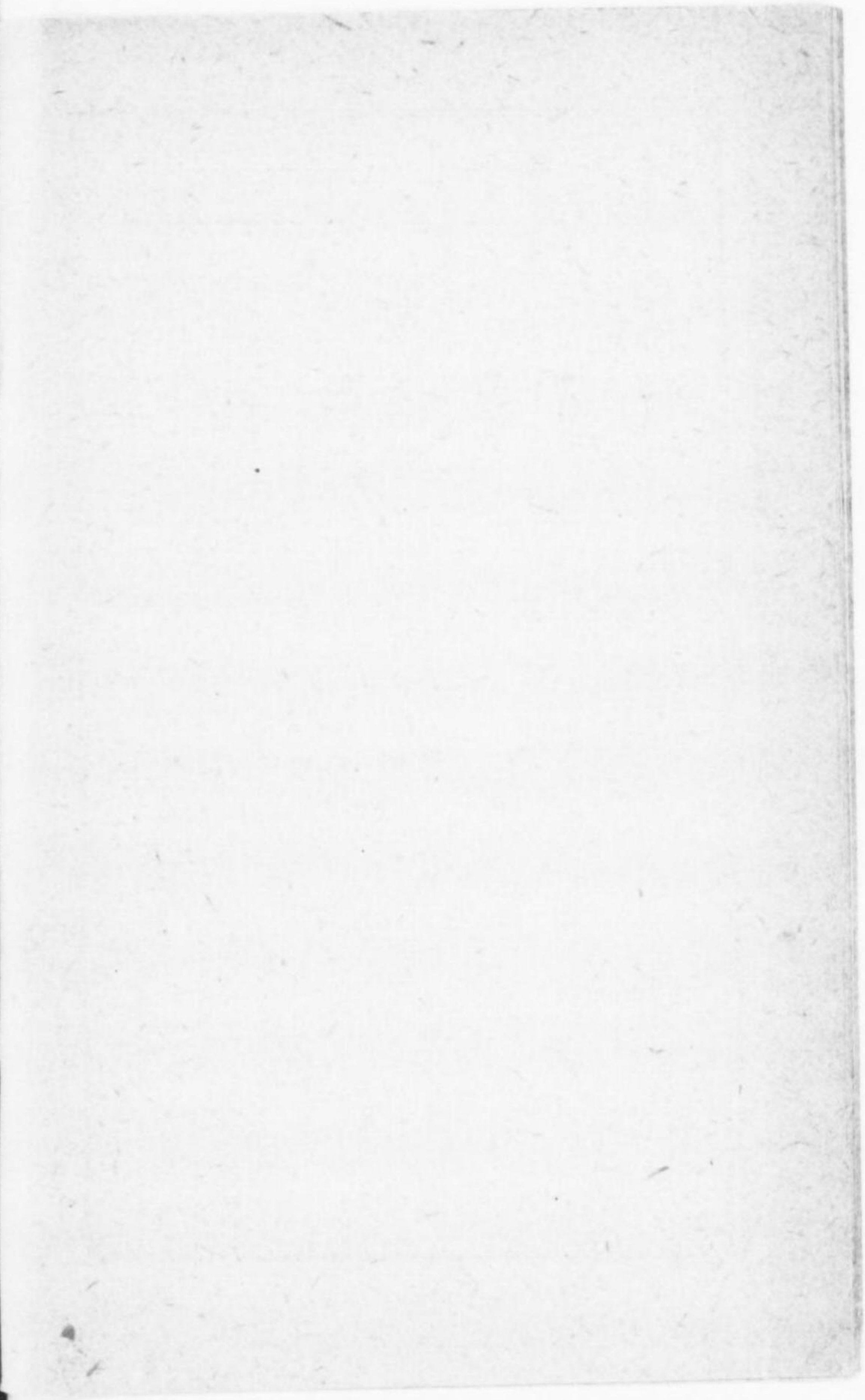
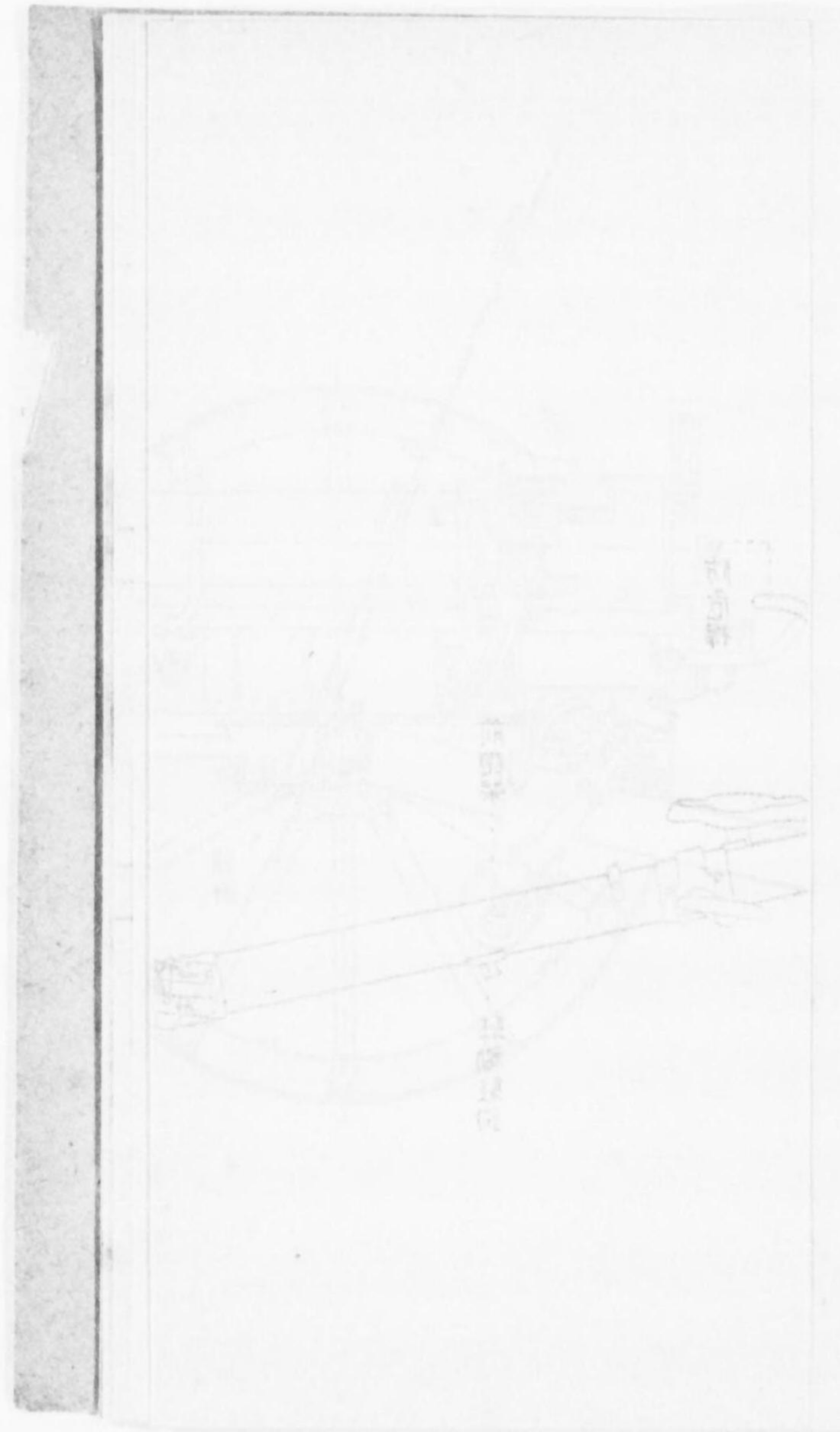
<p><b>第四十師</b> (宮城守)</p> <p>步兵第二十七旅團(子官宮) 步兵第二十八旅團(高崎)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 十十十十十 四四四四四 大大大大大 隊隊隊隊隊 (宇水宇水宇水) 都都都都都 本本本本本</p>	<p><b>第二十師</b> (米留久)</p> <p>步兵第十二旅團(編田) 步兵第二十四旅團(久留米)</p> <p>野野野野野 砲砲砲砲砲 (小倉)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 四四四四四 八八八八八 大大大大大 隊隊隊隊隊 (太下太下太下) 刀刀刀刀刀 洗洗洗洗洗</p>	
<p><b>第十二師</b> (山)</p> <p>步兵第三十九旅團(平塚) 步兵第四十旅團(龍山)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 八八八八八 大大大大大 隊隊隊隊隊 (馬山馬山馬山) 同同同同同</p>	<p><b>第九十師</b> (南)</p> <p>步兵第三十七旅團(成田) 步兵第三十八旅團(南)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 七十七十七 大大大大大 隊隊隊隊隊 (會同會同會同)</p>	<p><b>第六十師</b> (都)</p> <p>步兵第十九旅團(京都) 步兵第三十旅團(津)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 三十三十三 大大大大大 隊隊隊隊隊 (會同會同會同)</p>

<p><b>第七師</b> (川)</p> <p>步兵第十三旅團(旭川) 步兵第十四旅團(同)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 二二二二二 大大大大大 隊隊隊隊隊 (館川館川館川)</p>	<p><b>第六師</b> (本)</p> <p>步兵第十一旅團(熊本) 步兵第三十六旅團(身見島)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 二二二二二 大大大大大 隊隊隊隊隊 (館川館川館川)</p>	<p><b>第五師</b> (島)</p> <p>步兵第九旅團(廣島) 步兵第二十一旅團(山口)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 二二二二二 大大大大大 隊隊隊隊隊 (館川館川館川)</p>	<p><b>第四師</b> (大)</p> <p>步兵第七旅團(大) 步兵第三十二旅團(新山)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 二二二二二 大大大大大 隊隊隊隊隊 (館川館川館川)</p>
<p><b>第十一師</b> (寺)</p> <p>步兵第十旅團(普通寺) 步兵第二十二旅團(鳥)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 二二二二二 大大大大大 隊隊隊隊隊 (同同同同同)</p>	<p><b>第十師</b> (路)</p> <p>步兵第八旅團(飯) 步兵第三十三旅團(同)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 二二二二二 大大大大大 隊隊隊隊隊 (同同同同同)</p>	<p><b>第九師</b> (津)</p> <p>步兵第六旅團(金澤) 步兵第十八旅團(教習)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 二二二二二 大大大大大 隊隊隊隊隊 (同同同同同)</p>	<p><b>第八師</b> (前)</p> <p>步兵第四旅團(弘前) 步兵第十六旅團(秋田) 騎兵第三旅團(津田)</p> <p>工野騎歩歩歩 兵兵兵兵兵 第第第第第 二二二二二 大大大大大 隊隊隊隊隊 (同同同同同)</p>



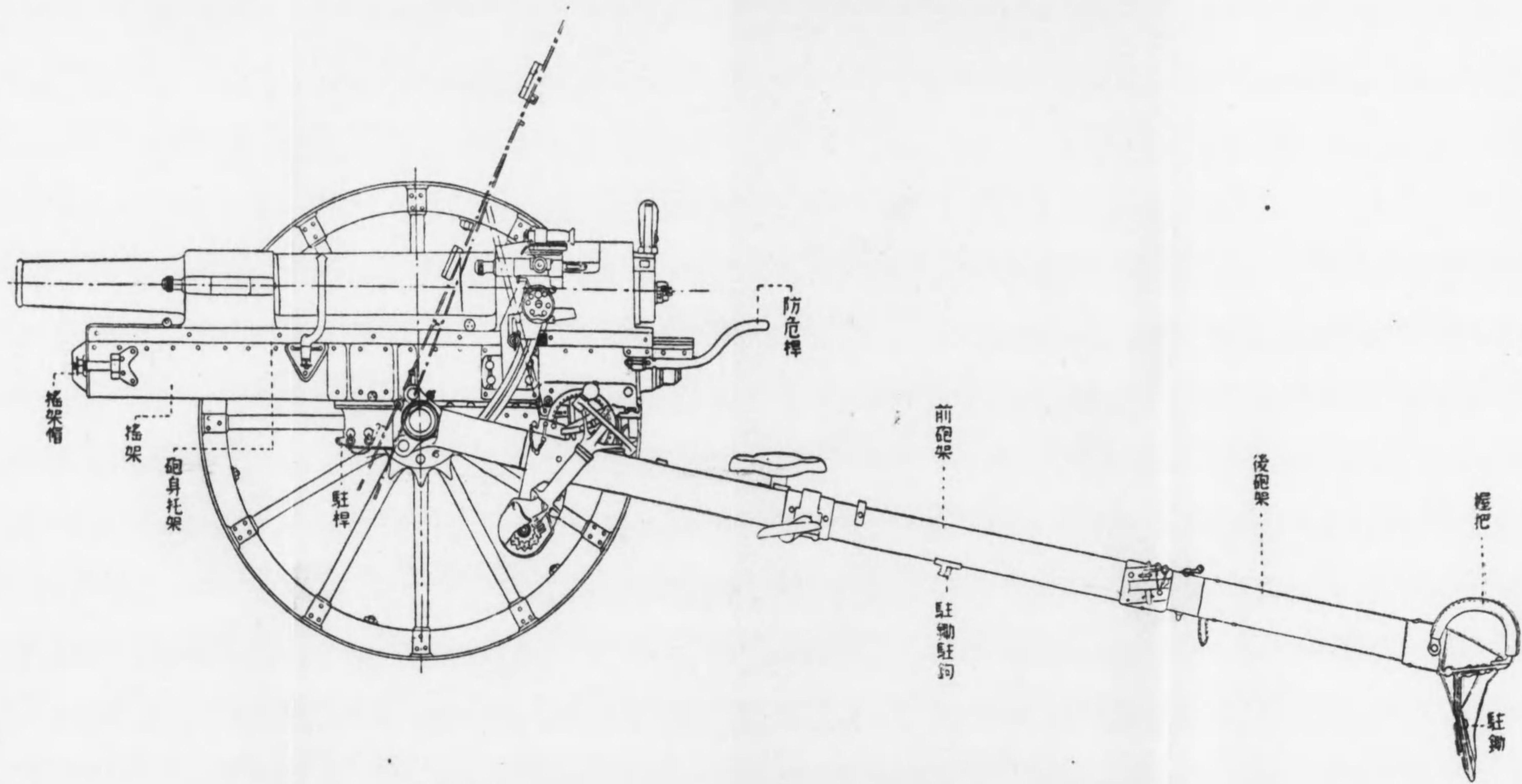




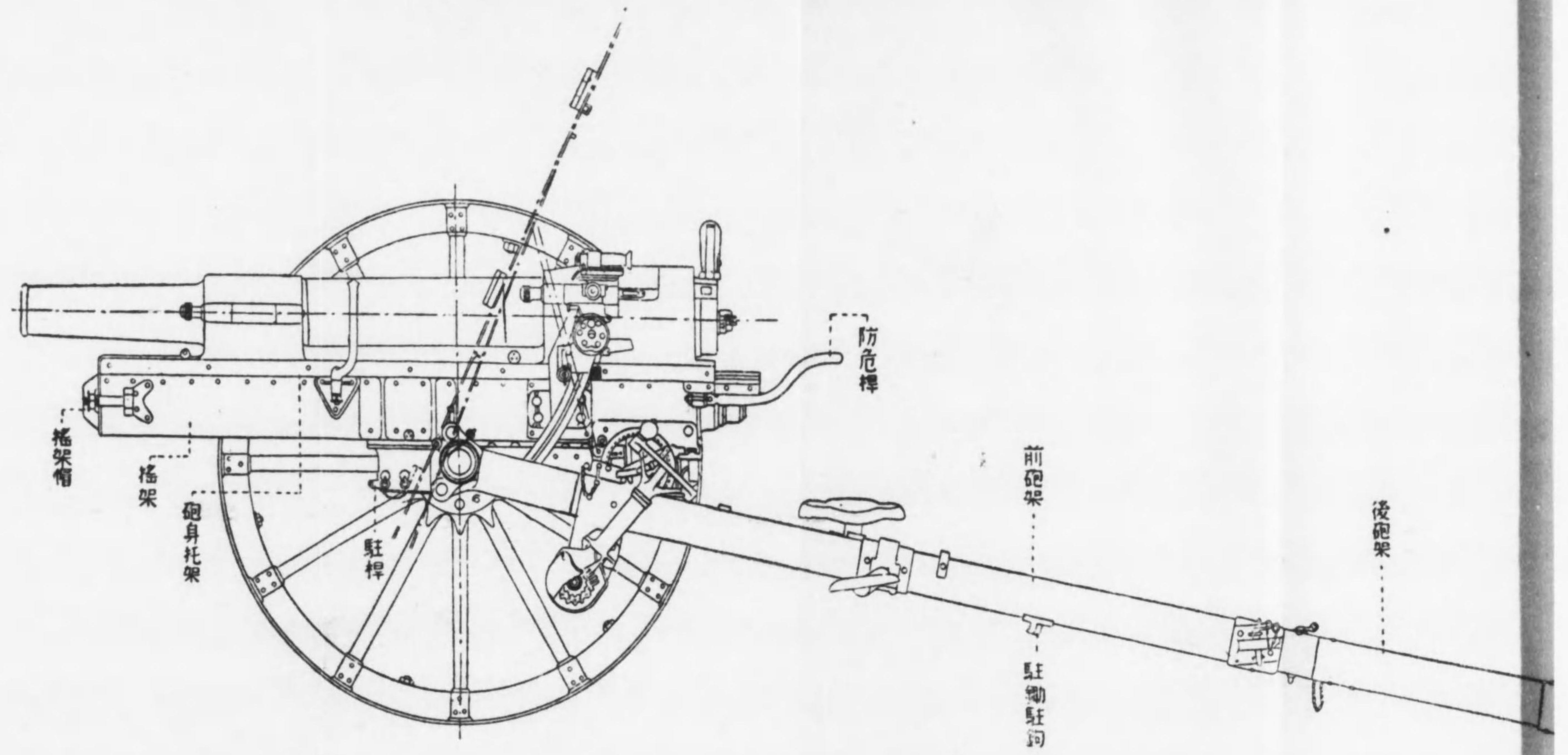




附圖第一



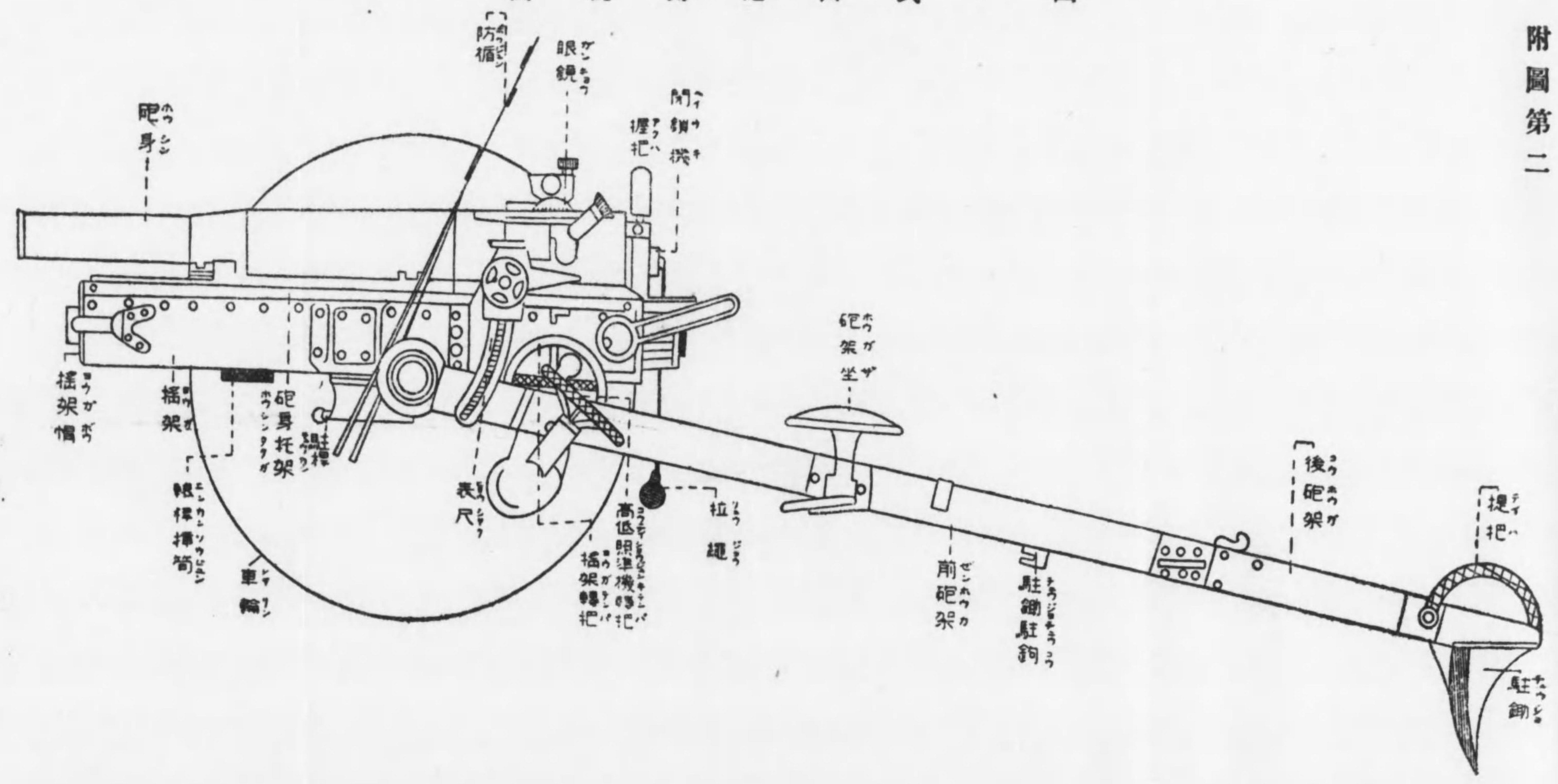






附圖第二

圖視側砲山式一四





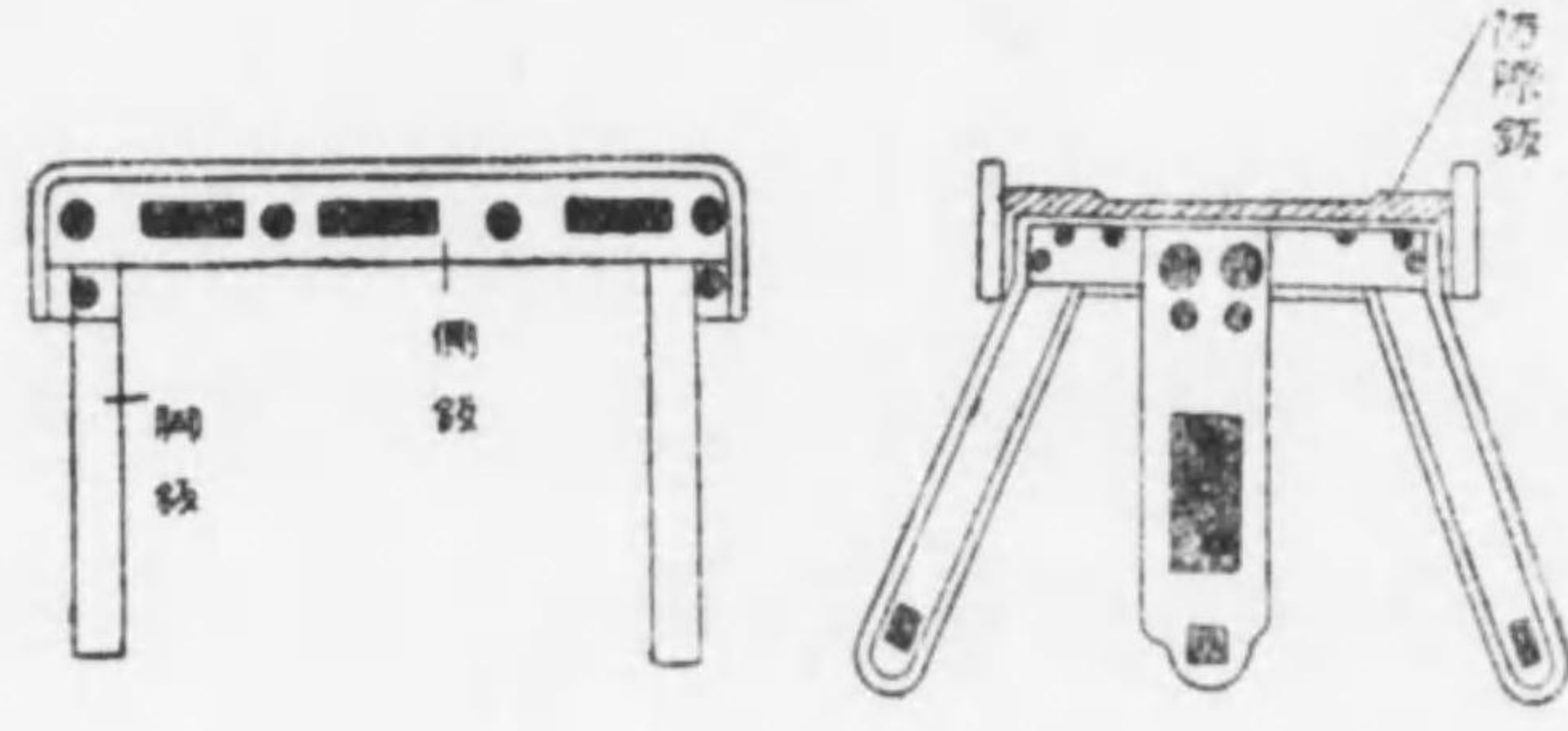




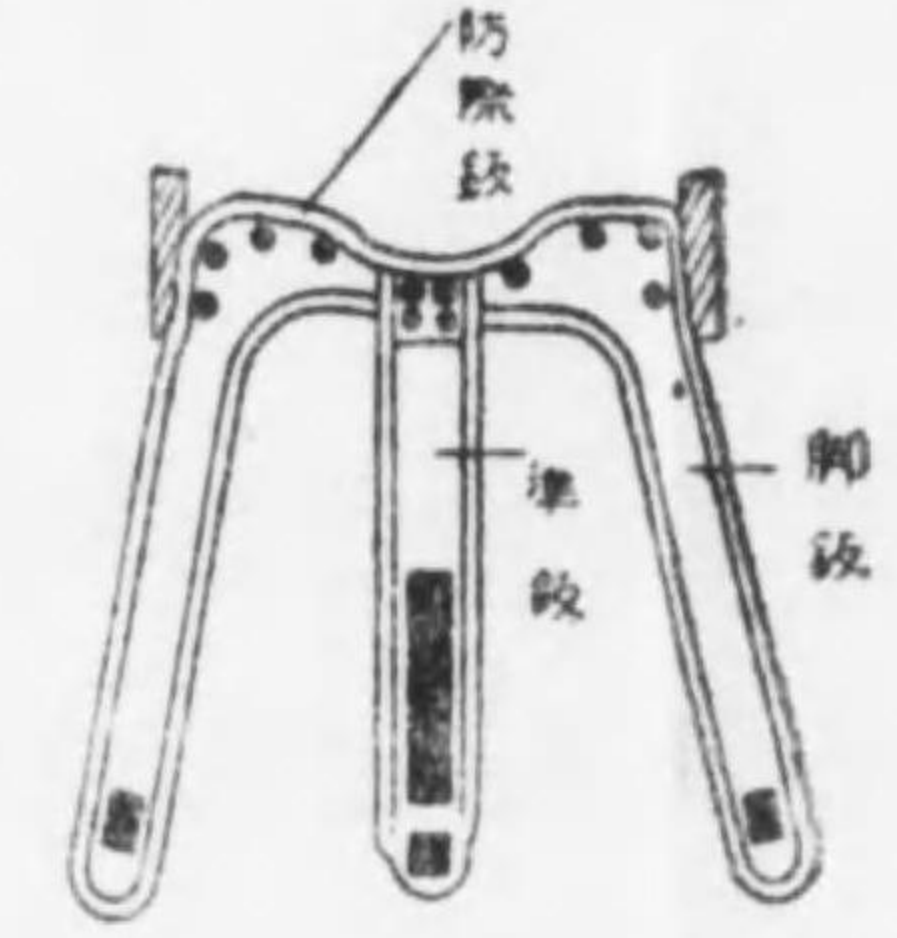
稱名ノ體極及匡架砲山式一四

附圖第四

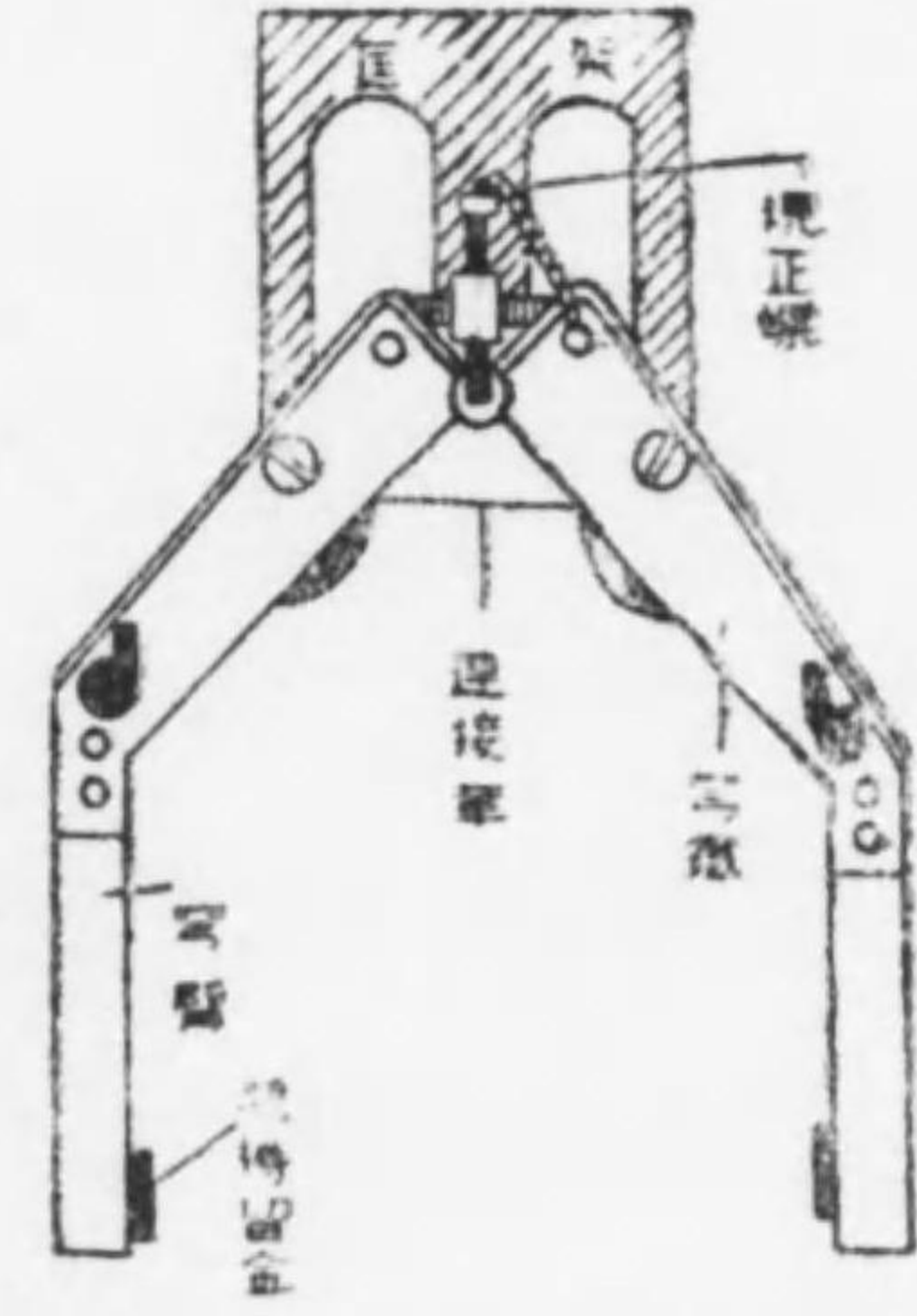
匡々架托  
面側 面正



匡架身砲  
面正



面正體極

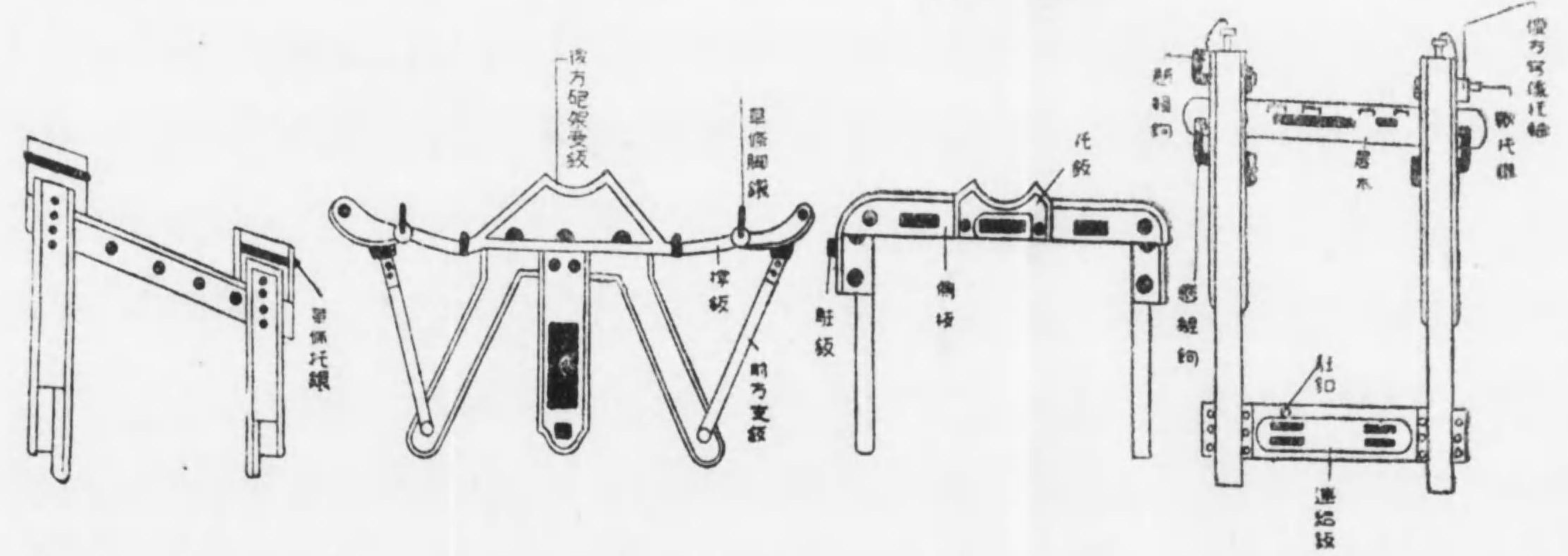


面側

匡々架大  
面正

匡架身砲  
面側

面側體極





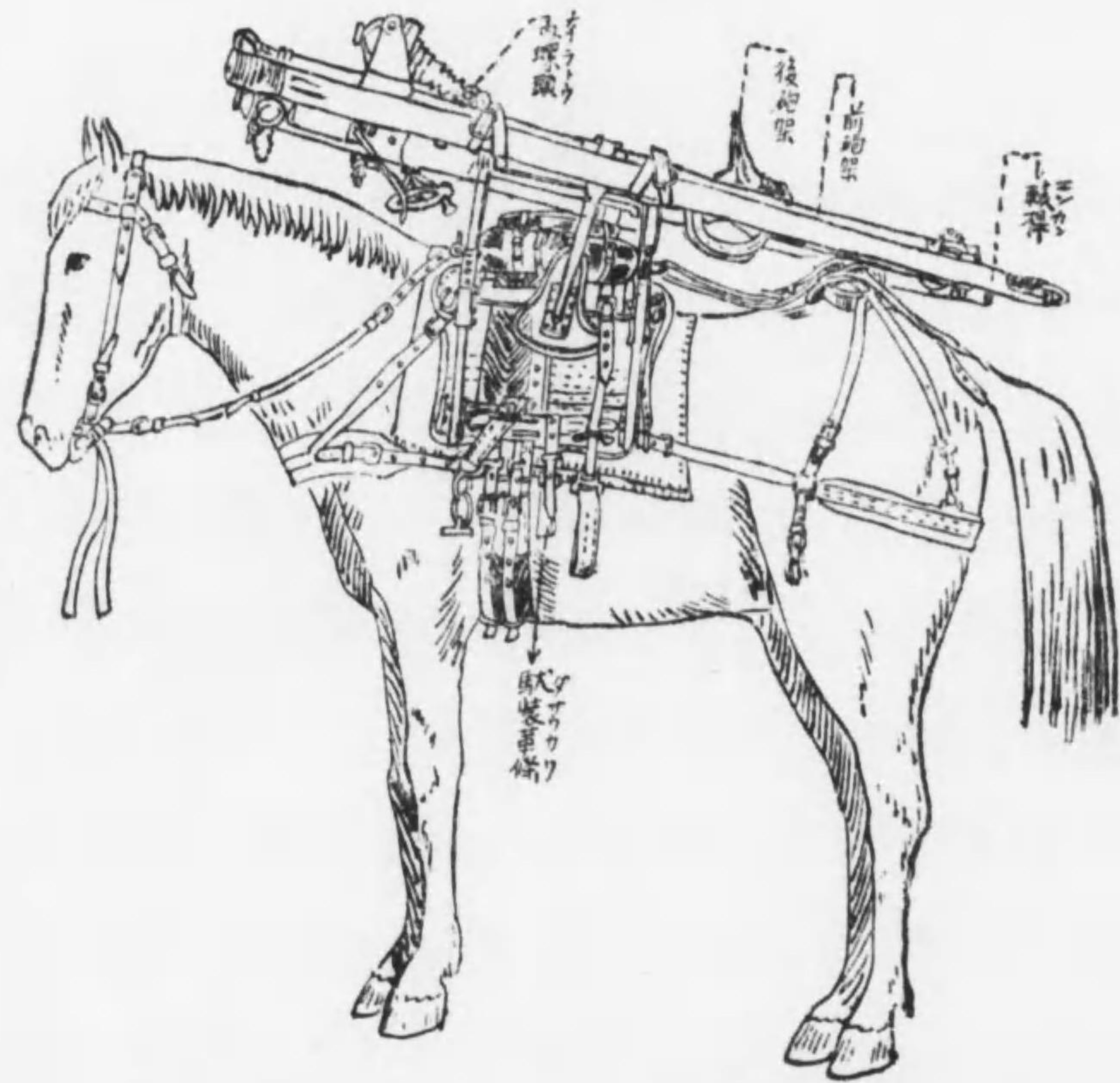




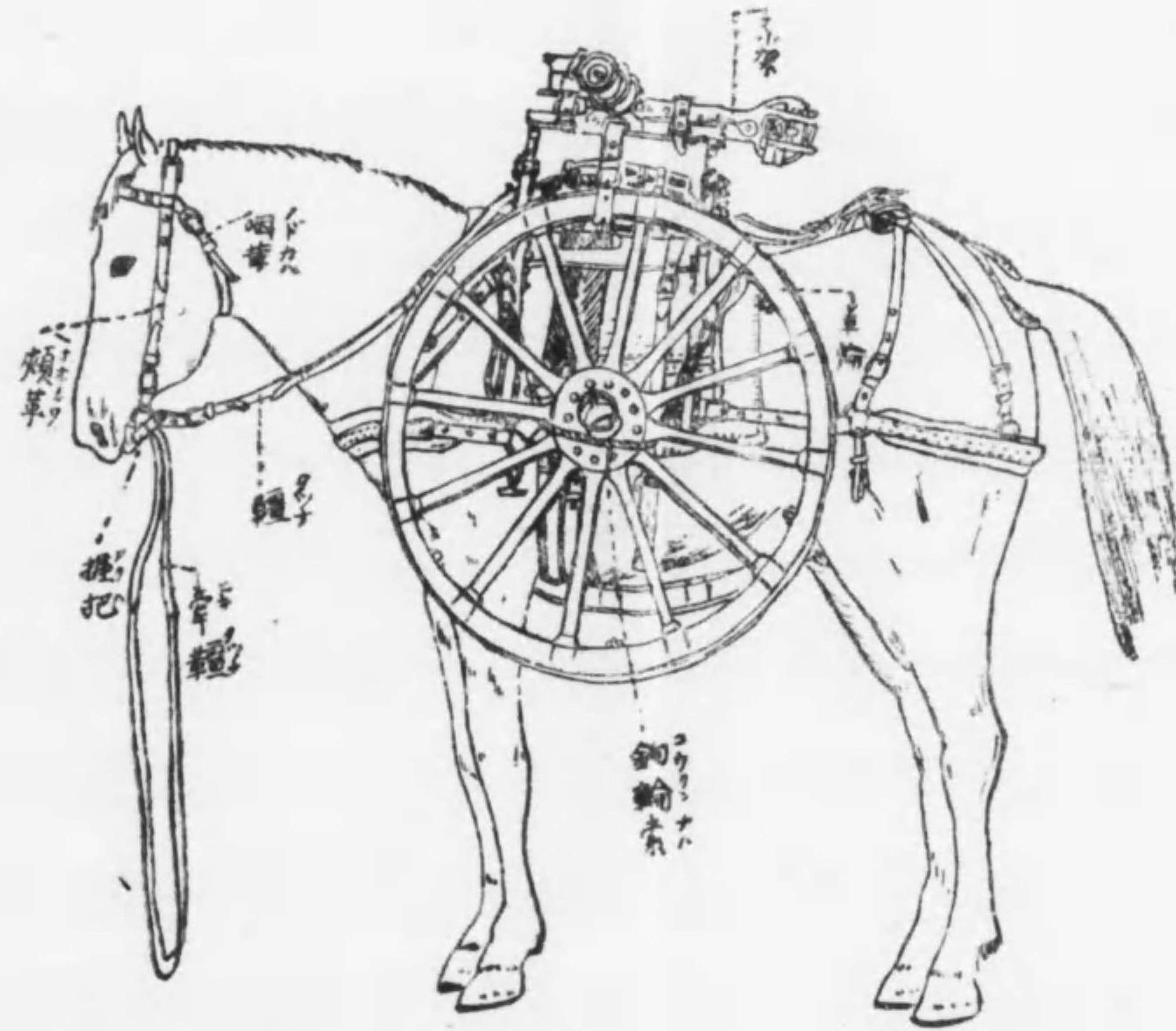




圖二第  
載馱ノ架大



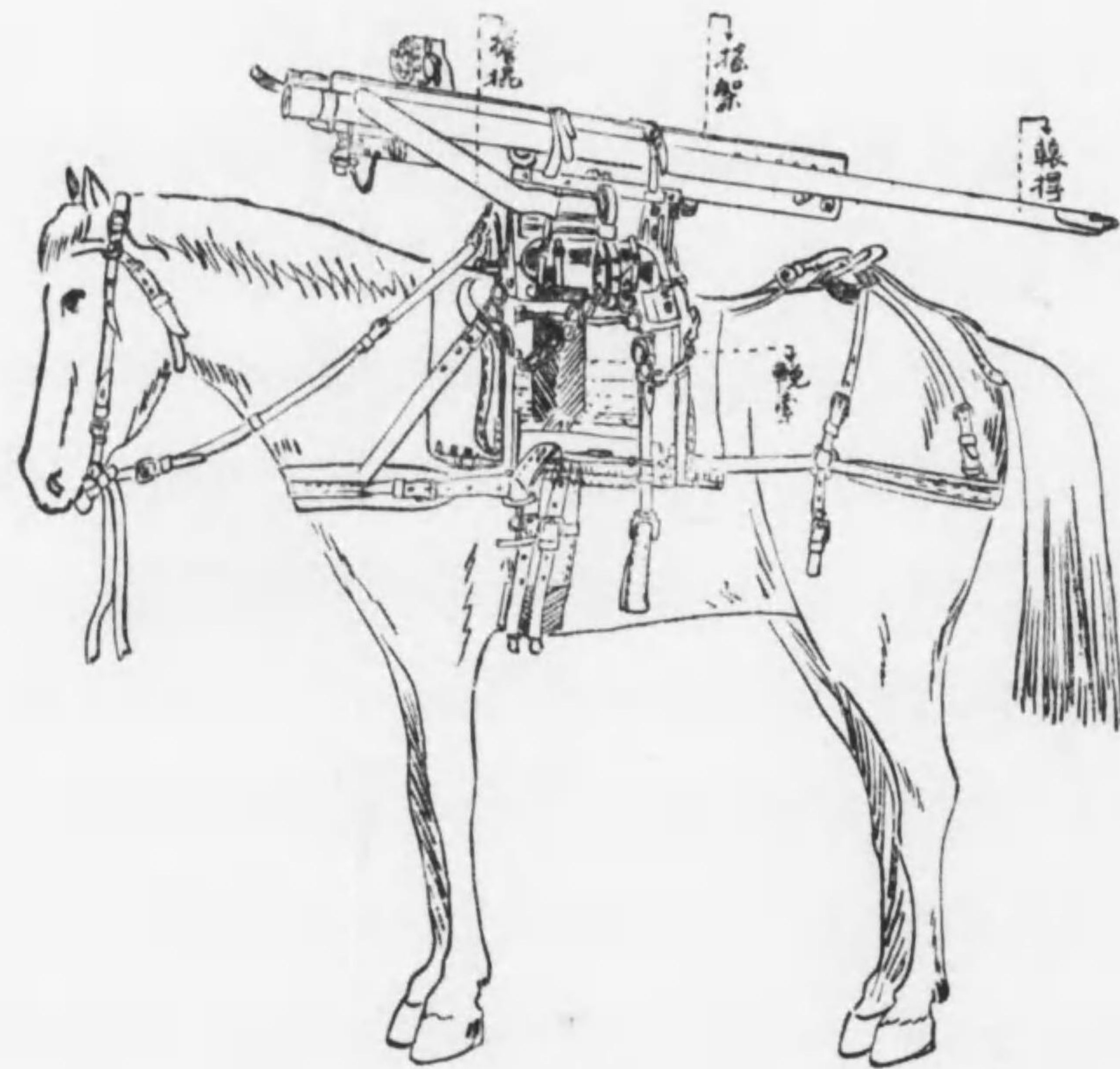
圖一第  
載馱ノ輪車及架小



附圖第八



圖三第  
載馱、架控



圖二第  
載馱、架大

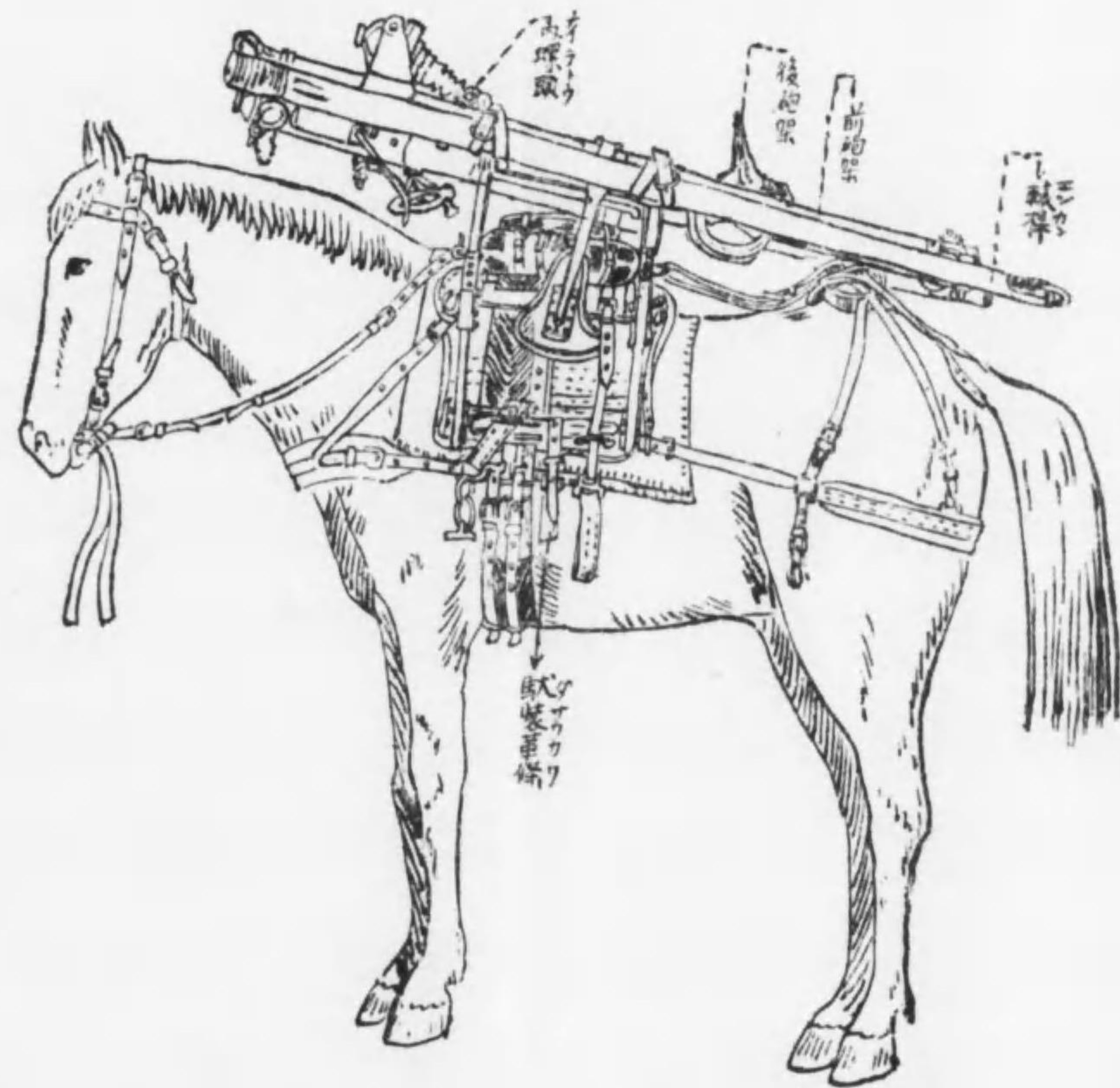
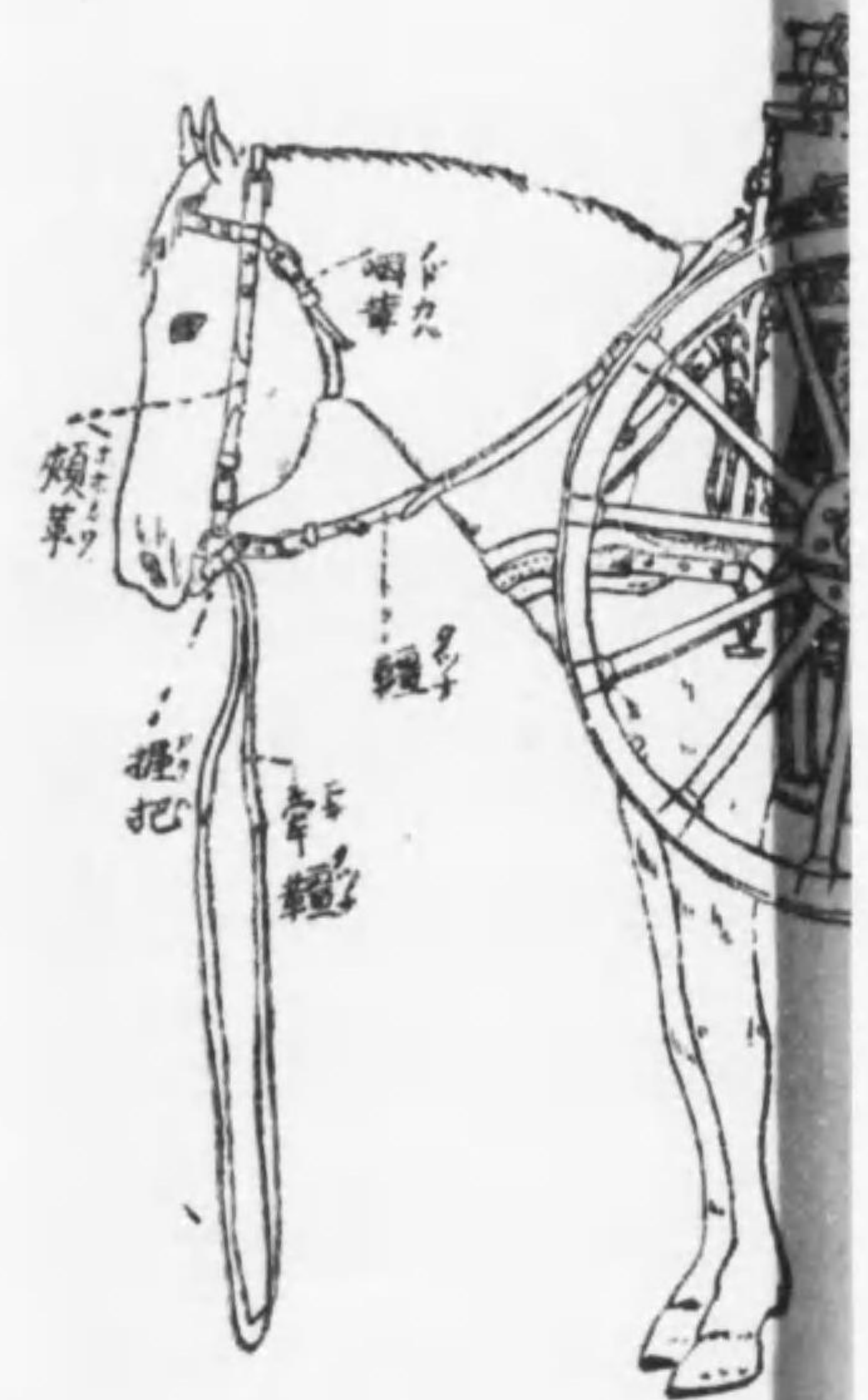
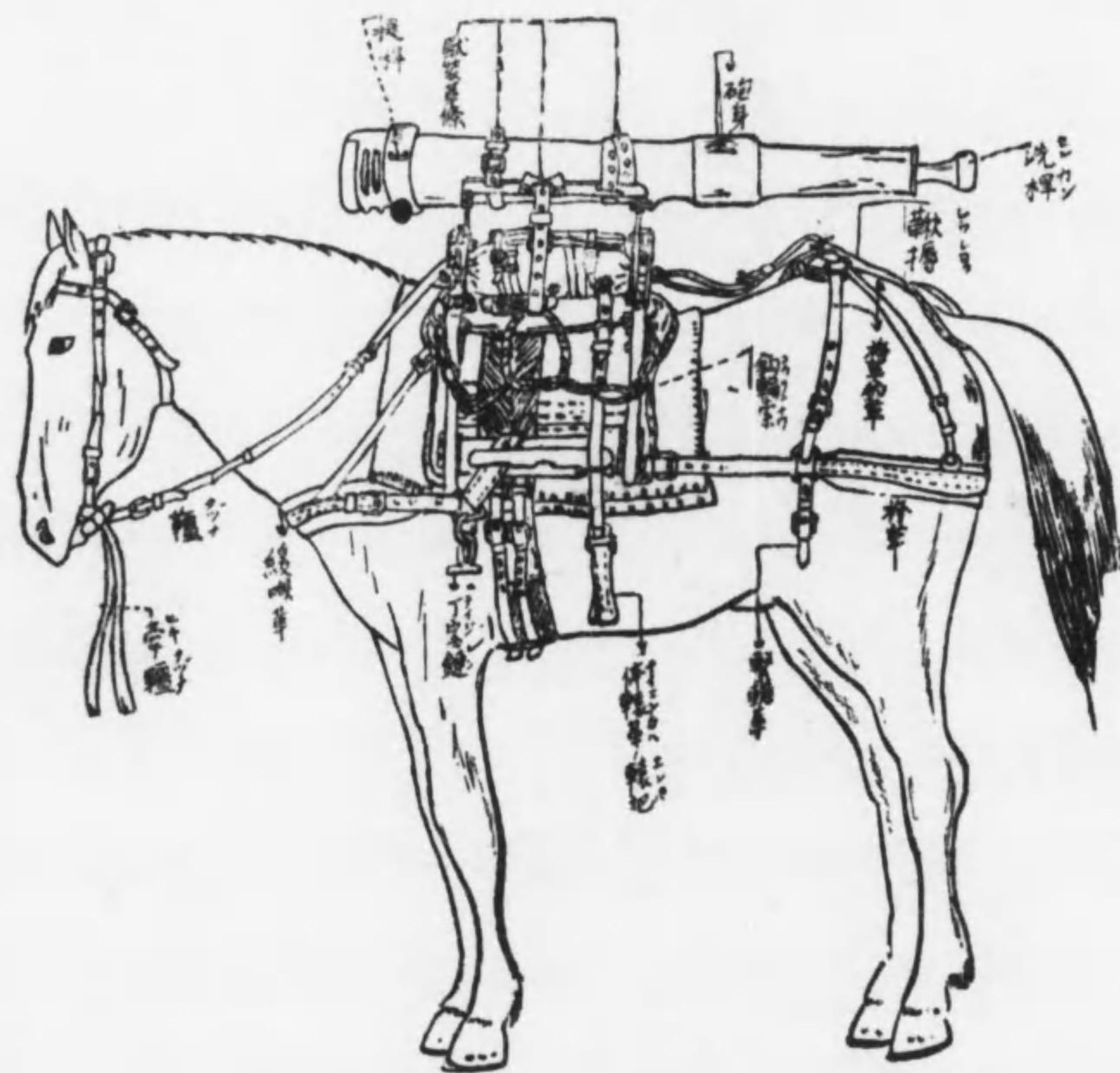


圖  
載馱

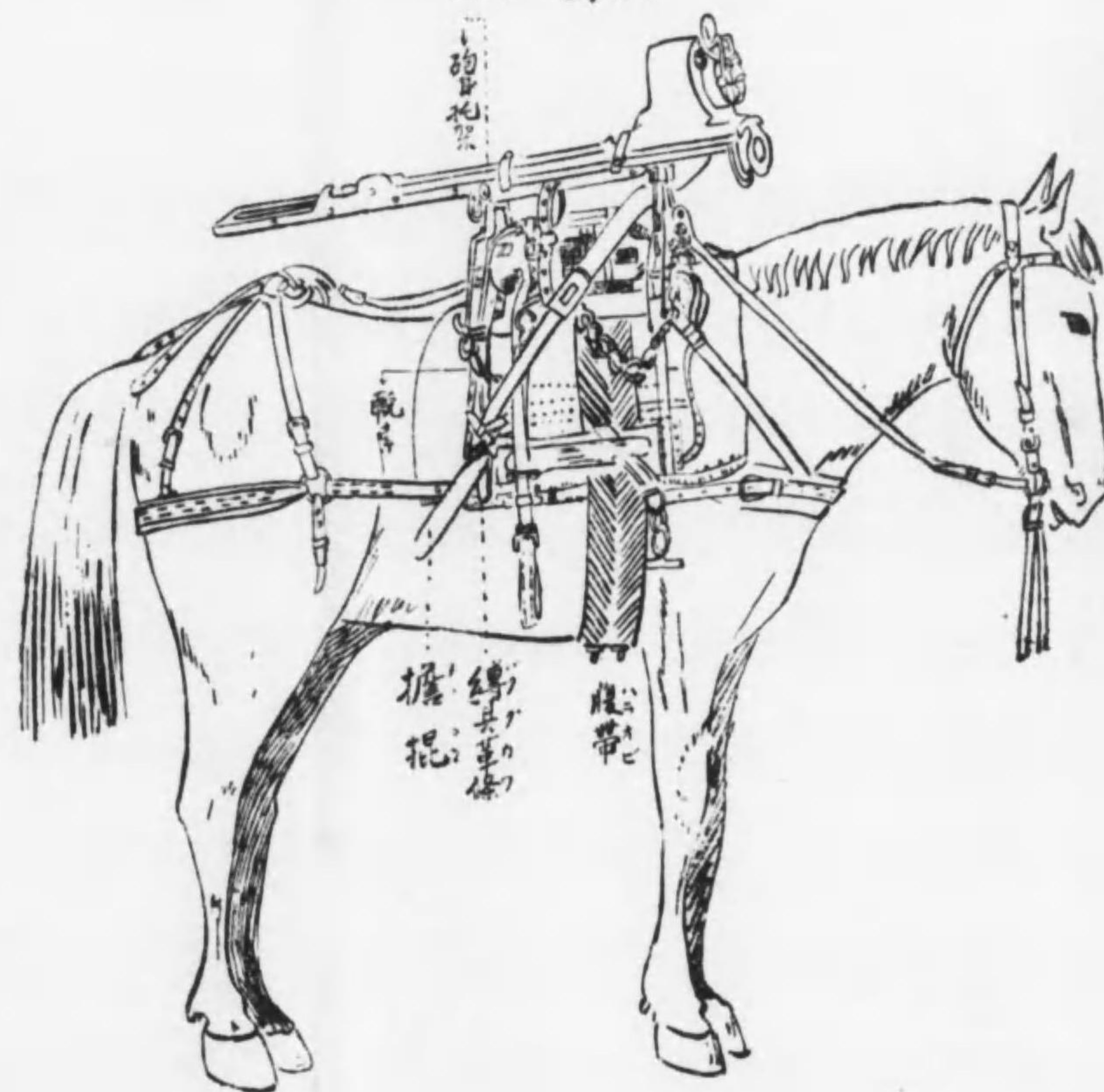




圖五第  
載馱，身砲



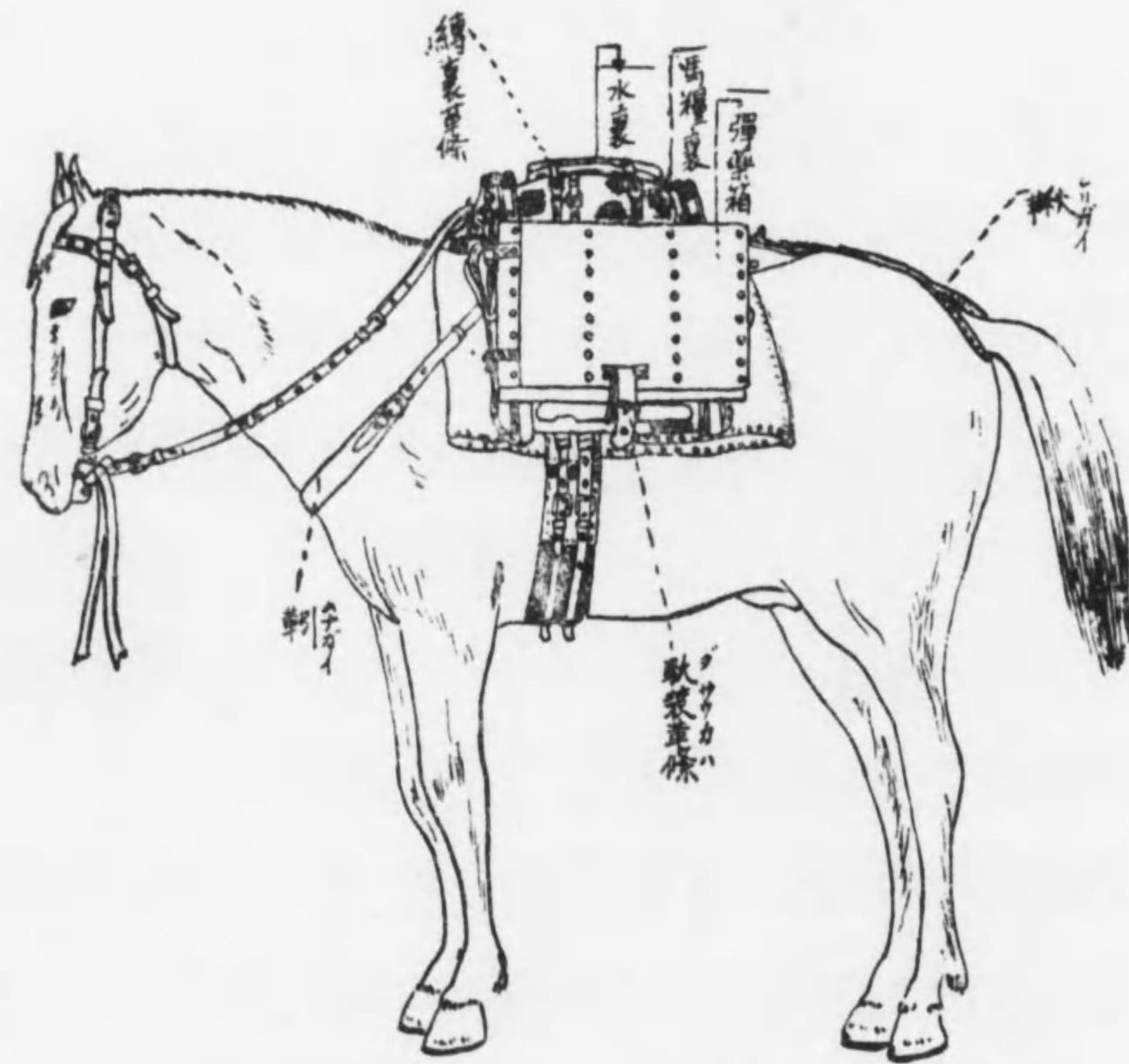
圖四第  
載馱，架托身砲  
(又示可側右)



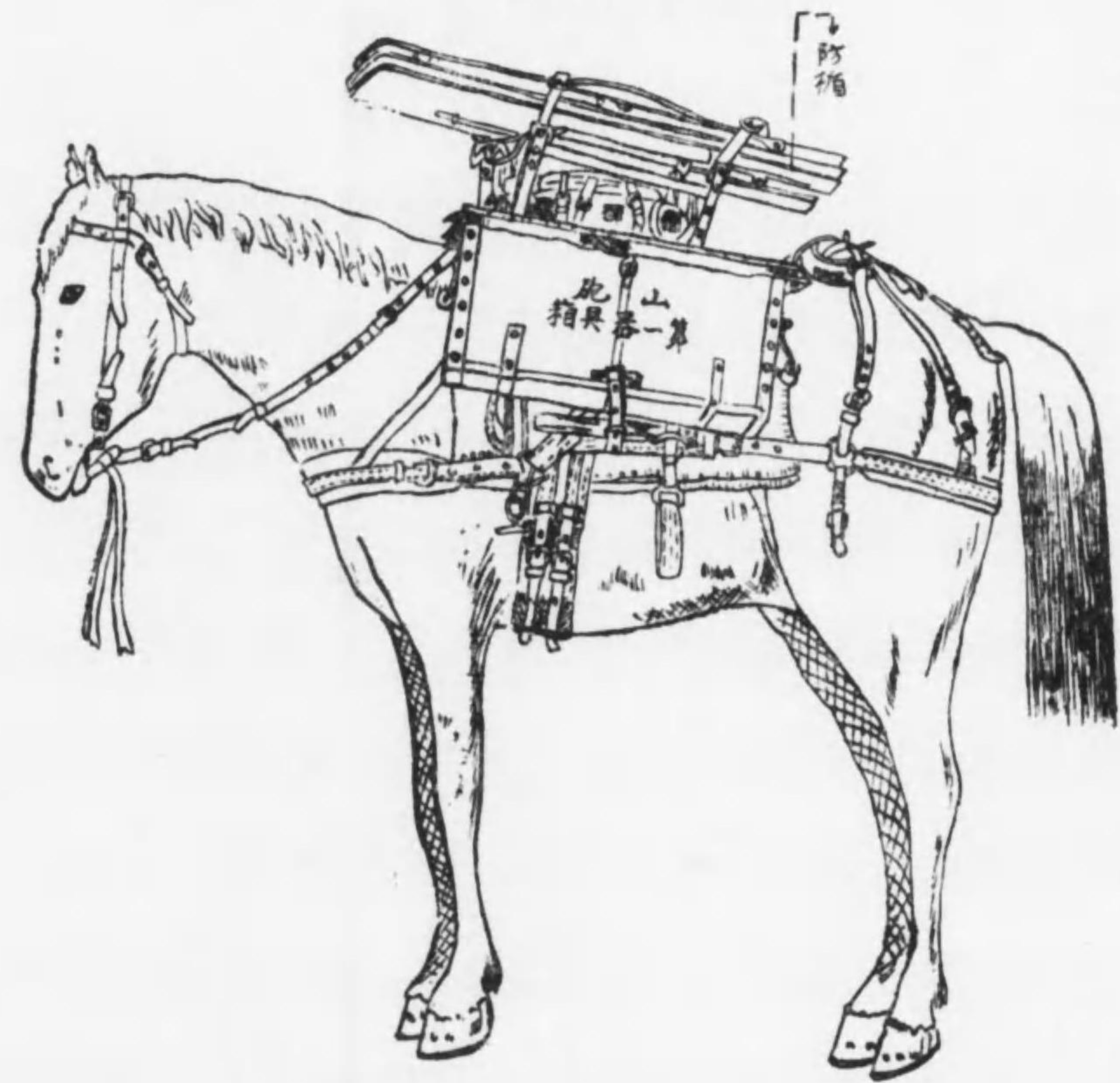
附圖第九



圖七第  
載馱ノ箱藥彈



圖六第  
載馱ノ箱具器防  
(只ノ箱兵器一ノ例也)



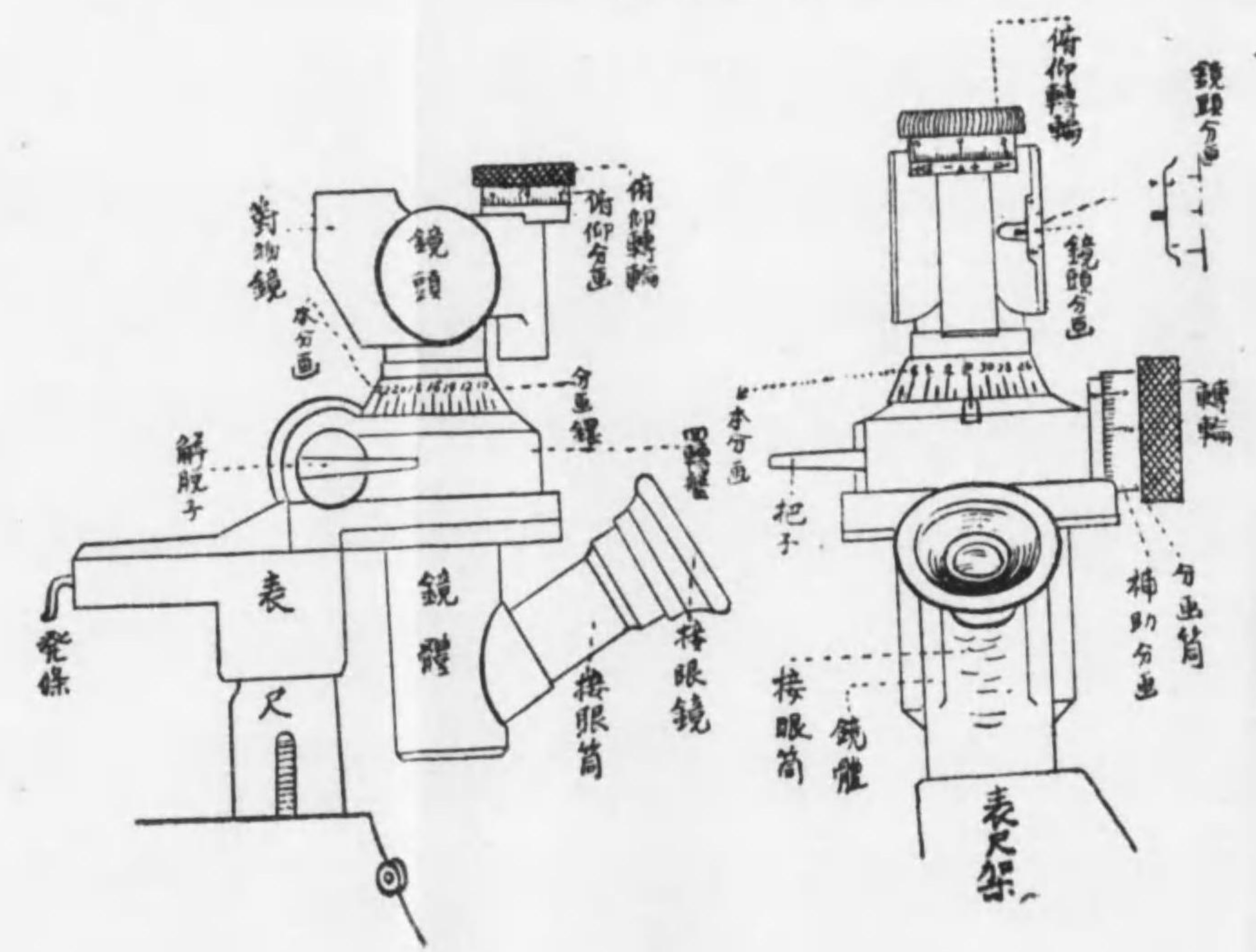
附圖第十



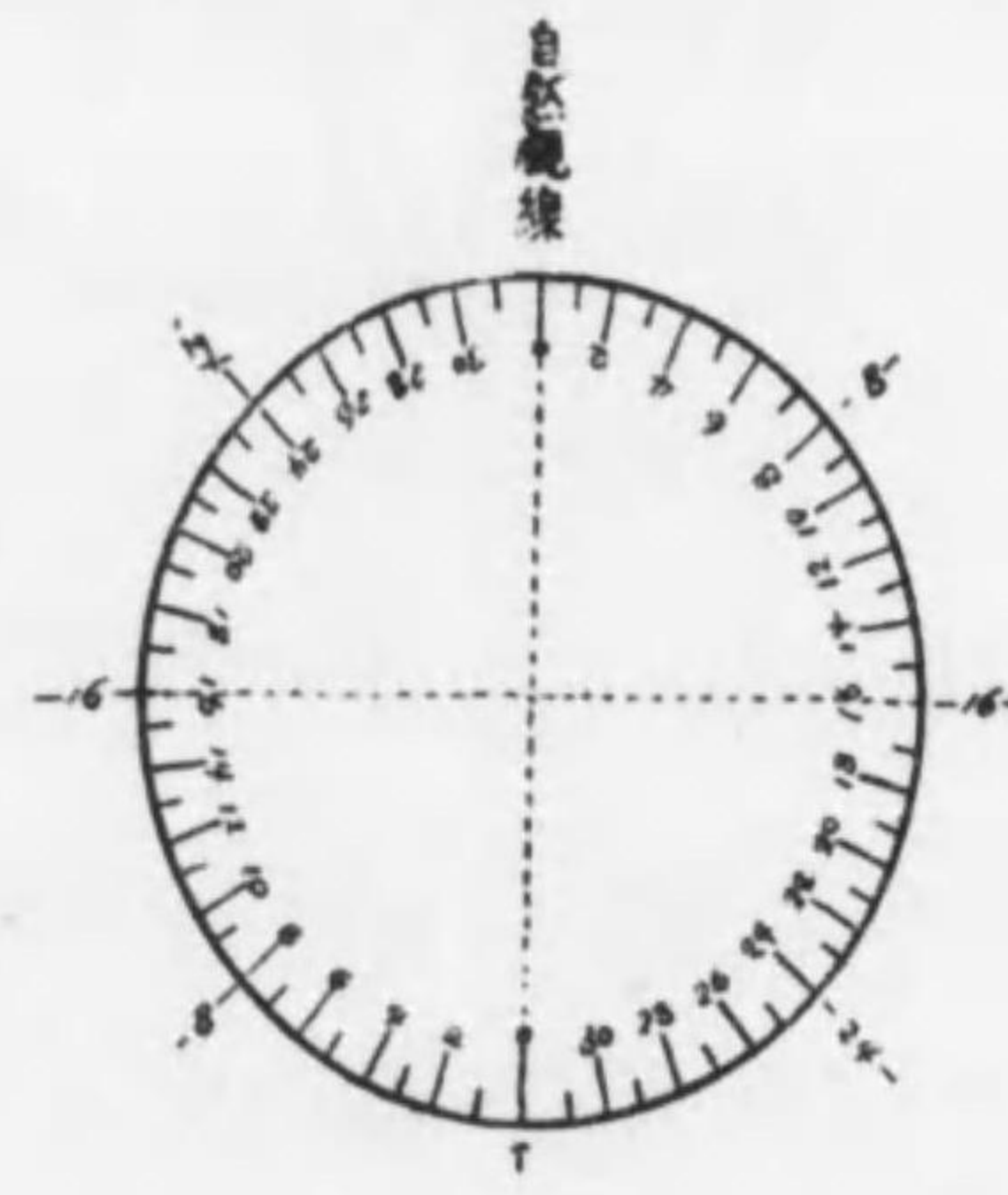


(具準照砲山式一四)

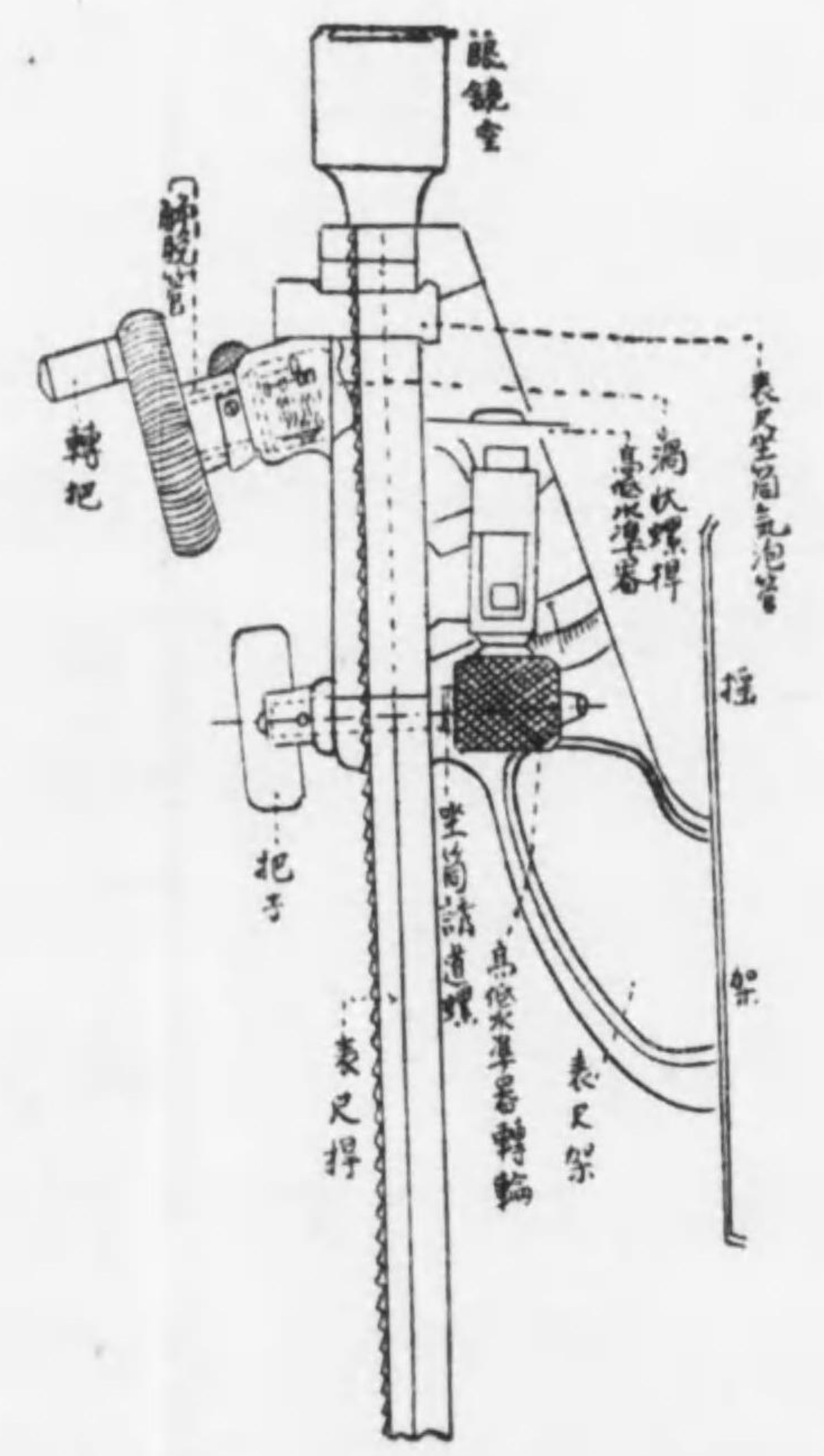
(鏡眼式二八)



(圖面平, 並令本盤轉回)



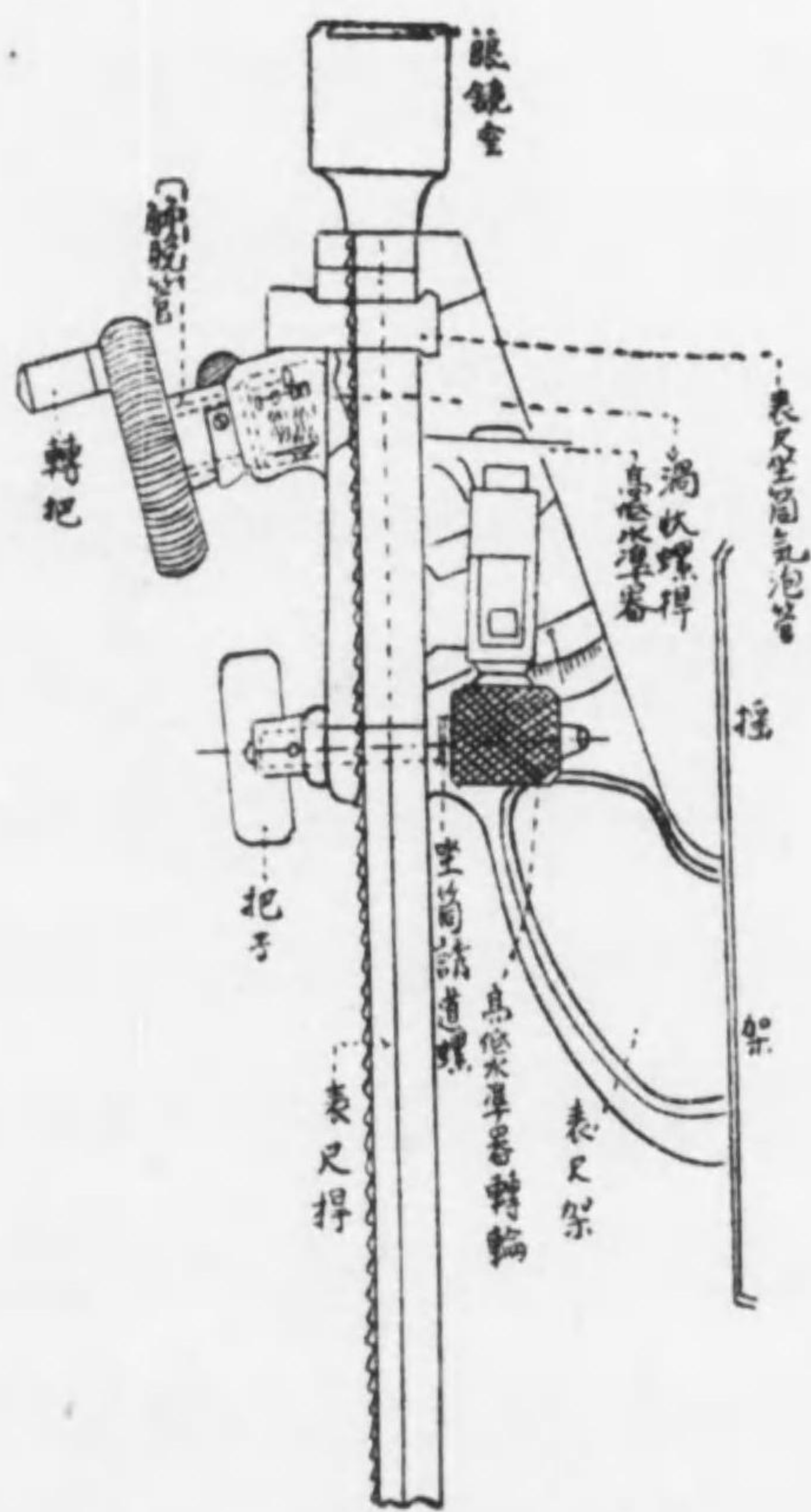
(尺表)



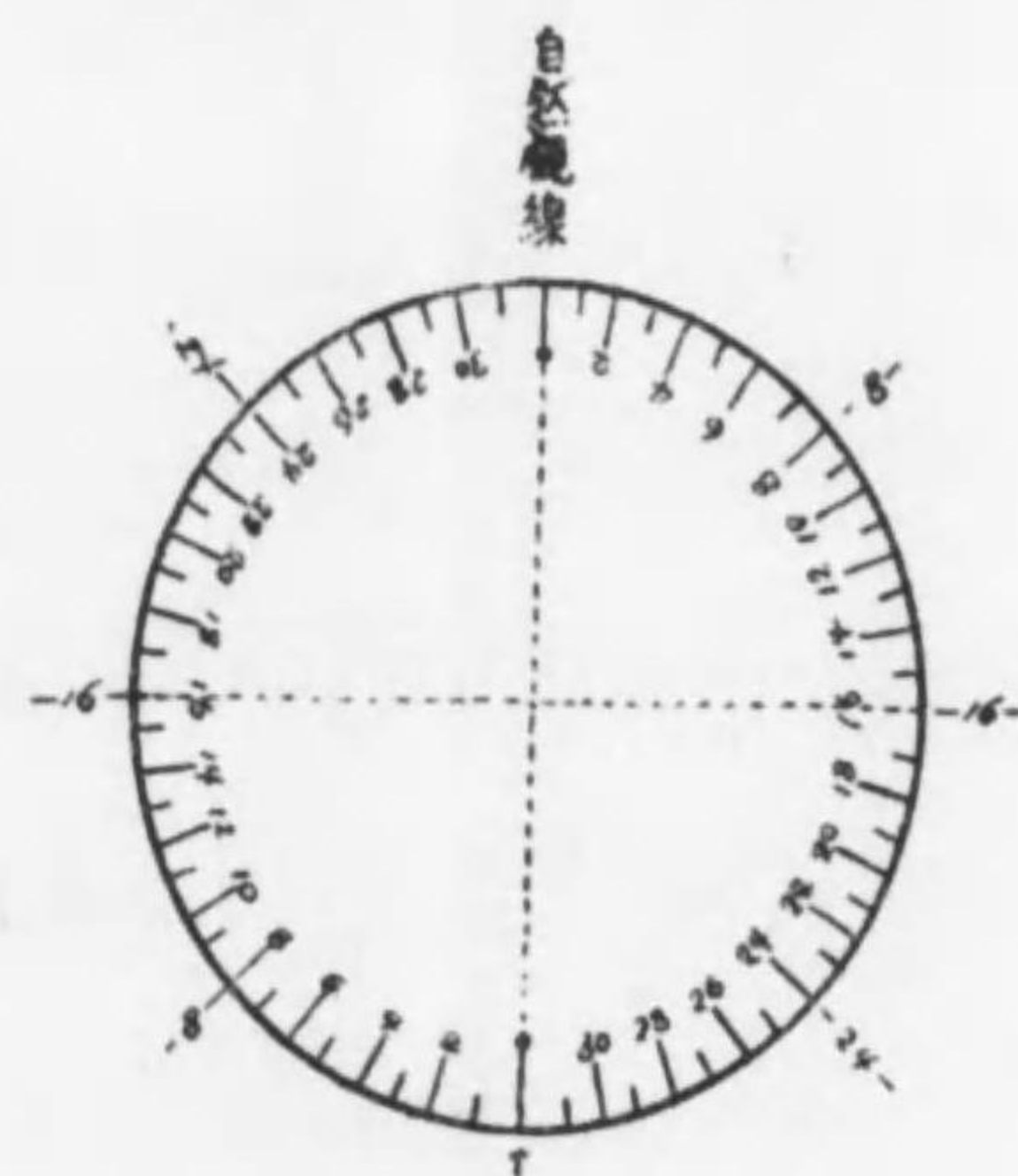




(尺表)

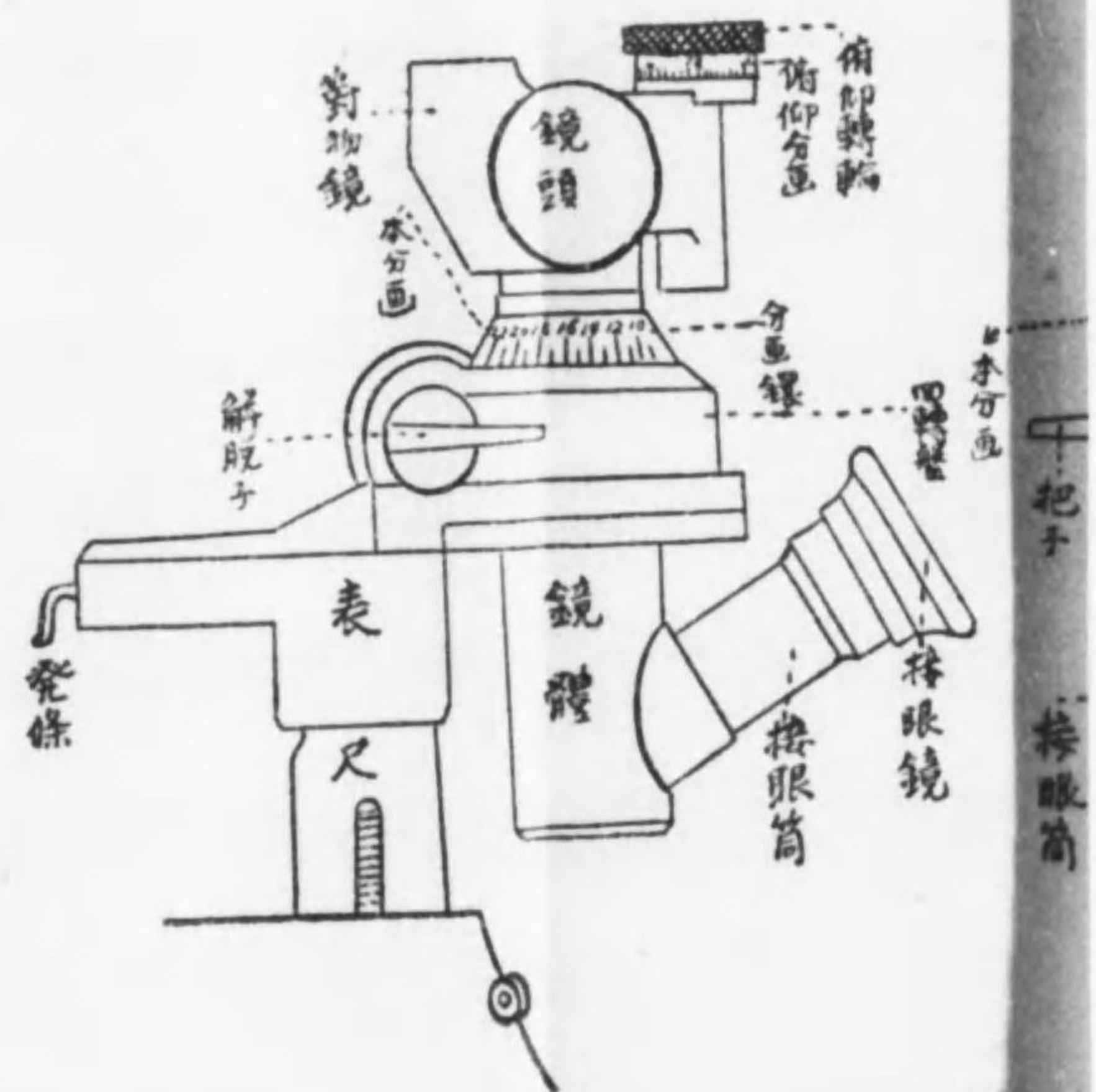


(圖面平, 面令本盤轉通)



(具準照石)

(鏡眼式)





(最新山砲兵須知)



昭和八年一月一日印刷  
昭和八年一月五日發行

最新山砲兵須知  
定價金六拾錢

編輯者 軍事學研究會

發行兼印刷者 和田信興  
東京市澁谷區原宿町三丁目二三〇番地

不許複製

發行所

東京市澁谷區原宿町三丁目二三〇番地  
武揚社出版部

振替東京七〇九八八番  
京都市伏見區深草町師團前

賣捌所

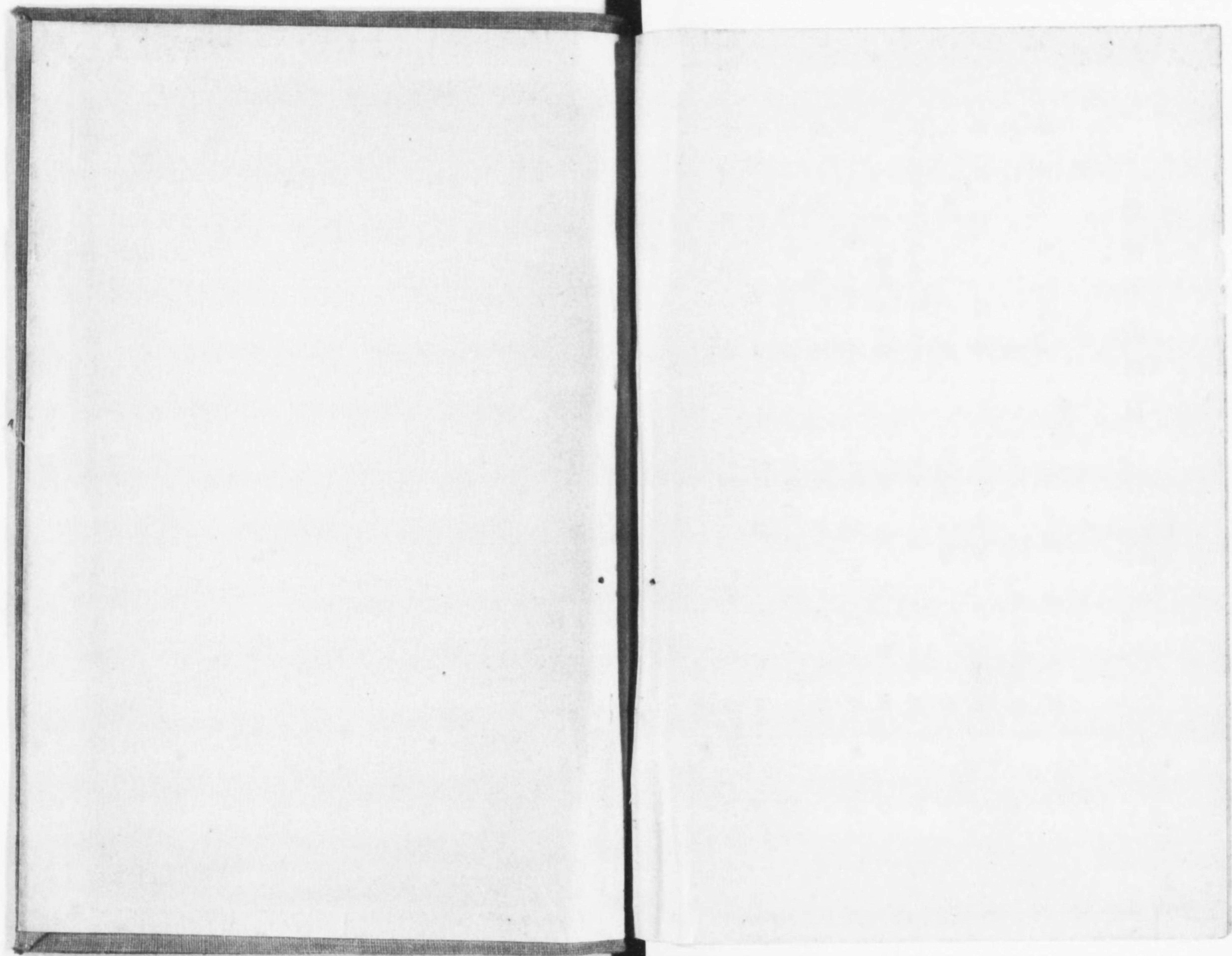
武揚書店

電話(伏)二八三番  
振替大阪二七九二番











終

